

拓殖大学大学院
言語教育研究科博士論文

「～（さ）せていただく」の使用と社会的容認度に関する
研究

A Discussion on the usage and social acceptance of
(s)asete itadaku

指導教授：小林 孝郎教授

孫 向宇
2021 年 3 月

目次

第1章 序論

1.1 研究の背景・目的.....	1
1.2 本研究の研究対象.....	2
1.3 研究の方法.....	3
1.4 本論文の構成.....	4

第2章 「～（さ）せていただく」に関する先行研究

2.1 「～（さ）せていただく」の用法に関する研究.....	6
2.1.1 菊地（1997b）.....	6
2.1.2 米澤（2001）.....	8
2.1.3 宇都宮（2005）.....	9
2.1.4 「敬語の指針」（2007）.....	11
2.2 「～（さ）せていただく」の使用動機及び使用効果に関する先行研究.....	12
2.2.1 使用動機に関する先行研究.....	12
2.2.1.1 菊地（1997b）：礼にかなう／相手を立てる.....	12
2.2.1.2 菊地（1997b）・井上（1999）：謙譲語B「～いたす」「お～する」の代 替語説.....	13
2.2.1.3 米澤（2001）：相手への配慮のための使用.....	14
2.2.1.4 椎名（2018、2021）：相手との距離を認識しながら関わる.....	15
2.2.2 使用効果に関する先行研究.....	16
2.3 外国人学習者の使用に関する研究.....	17
2.3.1 王（2018）.....	17
2.3.2 梁（2018）.....	18
2.3.3 筆者が行った「～（さ）せていただく」の習得・使用に関する対面意識調査	19
2.4 先行研究の整理とその問題点.....	20

第3章 「～（さ）せていただく」の「用法」の種類

3.1 基本的な用法について.....	23
3.2 基本用法以外の用法について.....	27
3.2.1 「～（さ）せていただく」の使用範囲拡大の仕組み.....	27
3.2.2 要素による拡大用法の分類.....	28
3.3 恩恵性の有無についての本研究の判定基準.....	30

第4章 「～（さ）せていただく」の使用状況の歴史的変遷

4.1 使用状況の歴史的変遷に関する先行研究.....	33
4.2 『青空文庫』を用いた使用状況の考察.....	34
4.2.1 『青空文庫』の概要及び本調査の方法.....	34
4.2.2 1890年～1900年の用例.....	35
4.2.3 1901年～1910年の用例.....	35
4.2.4 1911年～1920年の用例.....	36
4.2.5 1921年～1930年の用例.....	37
4.2.6 1931年～1940年の用例.....	39
4.2.7 1941年～1950年の用例.....	42
4.2.8 1951年～1960年の用例.....	44
4.3 まとめ及び本章の結論.....	45

第5章 「～（さ）せていただく」の社会的容認度について

5.1 「～（さ）せていただく」の社会的容認度に関する先行研究.....	48
5.1.1 先行研究の調査方法及び結果.....	48
5.1.2 先行研究の問題点及び本調査の目的.....	51
5.2 「～（さ）せていただく」の社会的容認度についての調査.....	52
5.2.1 調査の概要.....	52
5.2.2 調査結果.....	54
5.3 「～（さ）せていただく」の社会的容認度と各要素の関係.....	56
5.3.1 年齢による容認度の差.....	57

5.3.2	性別による容認度の差.....	58
5.3.3	欠落した要素の数と容認度との関係.....	60
5.3.4	欠落した要素の種類と容認度との関係.....	61
5.3.5	使用頻度と容認度の係.....	62
5.3.6	日本語母語話者の容認の種類.....	63
5.4	まとめと本章の結論.....	66

第6章 「～（さ）せていただく」の拡大用法の使用動機

6.1	好ましくない状況に多用され話し手の心理的負担を軽減する.....	68
6.1.1	言語景観とは.....	68
6.1.2	言語景観における「～（さ）せていただく」の用例収集.....	70
6.1.3	「～（さ）せていただく」の用法による分類.....	72
6.1.4	言語景観における「～（さ）せていただく」の使用動機.....	73
6.1.4.1	好ましくない状況における使用.....	73
6.1.4.2	好ましい状況における使用.....	74
6.1.4.3	「どちらとも言えない状況」における使用.....	75
6.2	場の改まり度の承認と維持.....	76
6.2.1	「予算委第2号」における使用状況.....	76
6.2.2	「予算委第21号」における使用状況.....	77
6.2.3	使用動機の内容.....	78
6.3	使用動機と使用効果の差について.....	79
6.3.1	許可者の明示性.....	79
6.3.2	「～（さ）せていただく」の文末表現と聞き手の選択権.....	80
6.3.3	表現自体の長さ.....	81
6.4	まとめと本章の結論.....	82

第7章 外国人日本語学習者の「～（さ）せていただく」の使用

7.1	コーパスに見る使用実態.....	84
7.1.1	使用するコーパスの概要.....	84
7.1.2	コーパスでの使用状況.....	85

7.1.3 用例の考察.....	89
7.2 外国人日本語学習者における「～（さ）せていただく」の使用意識に関する調査	91
7.2.1 調査の概要.....	91
7.2.2 調査結果.....	91
7.2.3 習得方法による使用意識の差.....	93
7.2.4 日本語母語話者に対する容認度調査の結果との比較.....	94
7.2.5 外国人学習者の使用意識の類型.....	95
7.3 まとめと本章の結論.....	98

第8章 日本語教育における「～（さ）せていただく」の捉え方

8.1 日本語教育教科書における「～（さ）せていただく」の取り上げ方.....	99
8.1.1 初級教科書での取り上げ方.....	102
8.1.2 中級教科書での取り上げ方.....	103
8.1.3 ビジネス用教科書での取り上げ方.....	104
8.1.4 日本語教科書調査のまとめと分析.....	105
8.1.4.1 「～（さ）せていただく」の学習段階.....	105
8.1.4.2 「～ていただく」と「～（さ）せていただく」との混同について....	106
8.2 学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査.....	106
8.2.1 聞き取り調査の内容.....	106
8.2.2 休暇の許可を求める場面で多用されることについて.....	108
8.2.3 日本語教師による「～（さ）せていただく」の説明パターン.....	108
8.2.4 各説明パターンの問題点.....	109
8.3 まとめと本章の結論.....	110

第9章 「～（さ）せていただく」の教授に関する提言

9.1 日本語教育文法に基づく「～（さ）せていただく」の用法分類.....	112
9.1.1 日本語教育における「80%を目指す文法」の必要性.....	112
9.1.2 「80%を目指す文法」に基づく「～（さ）せていただく」の用法分類....	113
9.2 「～（さ）せていただく」の各用法の学習について.....	115

9.2.1 「～（さ）せていただく」の学習の必要性.....	115
9.2.2 各用法の学習のタイミング.....	116
9.3 使用効果の学習について.....	118
 第10章 結論と今後の課題	
10.1 各章のまとめと結論.....	120
10.2 今後の課題.....	123
10.2.1 学習者の使用意識と母語話者の容認度の関連性について.....	123
10.2.2 「～（さ）せていただく」の社会的容認度について.....	123
 参考文献一覧	125
 付録	
1. 王（2018）の自由産出課題用紙.....	129
2. 学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査への回答	130

第1章 序論

1.1 研究の背景・目的・意義

近年、「（さ）せていただく」という表現には過剰使用、誤用などの問題があるとの指摘が目立つが、「～（さ）せていただく」の使用が問題として取り上げられたのは決して最近のことではない。作家の永井荷風は、1934年に銀座の喫茶店の店頭に「閉店させていただきます云々」という張り紙があったことを記している。このことを記事として取り上げた読売新聞の記事には、「おそらく、この表現に違和感を覚えたから、わざわざ記録したのであろう」と書いた（読売新聞社会部 1988:185）。また、雑誌『言語生活』の1954年の34号には「～（さ）せていただく」について、「余計なことを流行させたものだ」「つまらぬことをにちゃにちゃ申し述べることはない。」（松方三郎 1954）と、「～（さ）せていただく」の過度な使用は人に不快感を与えてしまう可能性がある」と指摘した。

井上（1999）によると、商店の貼り札で「本日休業します」ではなく、「休業させていただきます」のように書くことが関西から東京に広がったのは1950年代らしい。最初は抵抗があったようだが、慎ましやかに許可を求める表現として徐々に受け入れられた。

2000年代に入って、「～（さ）せていただく」の使用には、疑問が湧く使用例がますます増えて来ているように思われる。2010年に朝日新聞が4202人を対象に行った「「させていただきます」は変ですか？」というアンケート調査では、「変だ」と「どちらかといえば変だ」を選択した回答者の割合が全体の55%を占め、半数以上が「～（さ）せていただく」の使用に違和感を覚えていることが分かった。「敬語といえば「～～させていただきます」の多用、あるいは濫用も気になります。「～～します」、あるいは「～～いたします」でいいだろう、と私は内心ではよく思っています」「「そこでへりくだらなくてもいいだろう」という場面でも、やたらにへりくだって謙譲語を使うことが多い印象を持ちます。」（池上彰 2012）との指摘や、さらに2010年の『国公労調査時報』572号では「させていただきます症候群」という新語が登場し、政治的な場面での「～（さ）せていただく」の過剰使用を指摘している。

この「～（さ）せていただく」の問題について、文法の視点から「～（さ）せていただく」の過剰使用について取り上げ、「～（さ）せていただく」の使い方に拡大や揺れが生じていることをはじめて指摘したのは、菊地（1997b）である。その後、米澤（2001）、宇都宮（2005）などによる、「～（さ）せていただく」の拡大用法を独自の基準で分類し、

拡大用法が生じた理由までも論述した研究が現れた。ただ、拡大用法の使用に関しては、「かなり敬度の高い表現」（菊地 1997a）や、「誤用とされる表現も聞き手を尊重する「おかげさま」的発想に支えられていると考えられる」（米澤 2001）などといった肯定的な見方と、「丁寧過剰のフリをしたインポライトネス」（滝浦 2016）のような否定的な見方が併存するのが現状で、日本語教育の現場においても拡大用法の取り扱いを巡って共通理解を得るには至っていない。

一方、外国人日本語学習者による「～（さ）せていただく」の誤用に関する指摘も見られるが（梁 2018、王 2018）、外国人日本語学習者の使用状況を調査した先行研究は僅かで、またその誤用が日本語母語話者の使用状況から影響を受けているか否かや、「～（さ）せていただく」に關係する教育経験にどのように影響されているのかなど、日本語教育の現場において未だに解決されていない点が多い。

そこで本研究では、「～（さ）せていただく」の使用において日本語母語話者に見られる諸問題を検討したのち、外国人日本語学習者の使用状況との対照研究も行い、学習者の使用上の問題が生じた理由及びその解決策を探ることにした。

その上で、本研究の成果が、日本語教育の現場で、学習者の意味理解の助けとなり、さらに「～（さ）せていただく」の効果的な発信を可能とすることを目指したい。

1.2 本研究の研究対象

「～（さ）せていただく」は形式上、「使役形＋もらう」の使役授受表現「～（さ）せてもらう」の丁寧体であるが、本研究では研究対象として普通体の「～（さ）せてもらう」を除外し、丁寧体の「～（さ）せていただく」のみを取り上げる。その理由は以下の2点である。

- 1) 使用上の問題に対する指摘は「～（さ）せていただく」に集中している。
- 2) 使用場面や使用効果が異なる。

1) は、現在「～（さ）せていただく」の使用に対して、誤用・過剰使用などの指摘が多く見受けられ、普通体の「～（さ）せてもらう」にはそのような指摘が稀であることが背景にある。また椎名（2018）によると、1852～2005年までの間、「～（さ）せていただく」の使用が明らかに増えたのに対して、「～（さ）せてもらう」の使用頻度には大幅な変化

は見られないと言う。本研究の目的には「～（さ）せていただく」が高い頻度で使用される原因の究明という点もあるが、現在、使用がさほど問題視されていない「～（さ）せてもらう」には触れないこととする。

2) については、「～（さ）せてもらう」が普通の使役授受表現であるのに対して、「～（さ）せていただく」は文法上敬語に分類され、両者の使用される場面や使用効果が異なり、一概には論じられない点が挙げられる。本研究は対照研究ではないため研究対象を「～（さ）せていただく」の片方に絞ることとする。

1.3 研究の方法

研究方法の詳細は各章において述べるが、本節ではその概要を示しておく。

本研究ではまず、日本語母語話者並びに外国人学習者の「～（さ）せていただく」の使用に関する先行研究を概観し、その成果及び問題点の検討を通して本研究の研究課題を具体的に設定する。

日本語母語話者（以下、母語話者と略称する）の「～（さ）せていただく」使用について、「分類法の再検討」「各用法の使用状況の歴史的変遷」「各用法の社会的容認度」「使用動機」の4つの面から議論を展開する。

具体的に、「分類法の再検討」では、先行研究にある分類法の問題点を指摘し、そのうえで新たな分類法を立てる。

「各用法の使用状況の歴史的変遷」では、『青空文庫』を利用し、1960年までの「～（さ）せていただく」の用例を採集して用法別、年代別にまとめて考察する。用例の検索にあたっては全文検索システム「ひまわり」を使用する。

「各用法の社会的容認度」では、容認度に関する高橋・東泉（2018）の調査結果及び問題点を踏まえつつ、アンケート調査によって、2020年時点の各用法の社会的容認度を用法別、年齢別、性別で考察する。容認度の比較には、統計解析ソフトウェア「SPSS」を使用する。

「使用動機」については、言語景観及び日本の国会における委員会審議での「～（さ）せていただく」の使用に焦点を当て、それぞれの場面での使用動機を実例を通して明らかにする。

外国人日本語学習者（以下、「学習者」と略称する）の使用については、先行研究で残された課題を出発点とし、まず『日本語学習者会話データベース』及び『KY コーパス』を

用いて学習者の使用実態を概観し、その使用にどのような問題が存在するかを明らかにする。その後、アンケート調査を通して、学習者の習得ルート、並びに「～（さ）せていただく」の各用法に対する使用意識を把握する。また、日本語学習者がそのような意識を持つ理由については、「習得ルートによる影響」、「母語話者向けの容認度調査の結果との比較」、「日本語教育における「～（さ）せていただく」の捉え方」の3つの面から考察する。

「習得ルートによる影響」では、習得ルート別に学習者の使用意識を考察し、それぞれのルートで習得した学習者の使用意識の特徴を見出すことを試みる。

「母語話者向けの容認度調査の結果との比較」では、同じ用法に対する母語話者の容認度と日本語学習者の使用意識を対照することで、その特徴の異同を考察する。

「日本語教育における「～（さ）せていただく」の捉え方」では、考察対象として25冊の日本語教科書を選択し、該当表現の取り上げの有無及び取り扱い方を考察する。また、学習者が日本語教育の現場で受けた「～（さ）せていただく」の説明内容を調べるため、8名の日本語学習者を対象とする聞き取り調査も行う。

最後に、母語話者の使用状況と日本語学習者の使用上の問題点を総合的に検討し、日本語教育現場で「～（さ）せていただく」をいつどのように教授するべきかについて筆者の考えを述べる。

1.4 本論文の構成

本論文は10章からなり、次章以後は以下の構成で論議を進めていく。

第2章では「～（さ）せていただく」に関連する先行研究をまとめて考察し、問題の所在と本研究の課題を明らかにする。

第3章～第6章では母語話者の「～（さ）せていただく」使用について、第7章～第9章では日本語学習者の「～（さ）せていただく」使用について考察するが、具体的には次のような展開を予定している。

第3章では、先行研究にある「～（さ）せていただく」の分類法の問題点を踏まえ、それらの問題点を解決できる分類法について検討する。第4章では、『青空文庫』を用いて1960年代までの用例を採集し、各用法の出現する時期及び年代別の使用状況を考察する。第5章では各用法に対する母語話者の社会的容認度を調べるためアンケート調査を行い、調査結果を用法別、年齢別、性別で分析する。また、社会的容認度に影響を及ぼす要因に

についても考察する。第6章では言語景観及び日本の国会における委員会審議での「～(さ)せていただく」の使用に着目し、用例分析を通してそれぞれの場面での使用動機及び使用効果を論じる。

第7章からは日本語学習者の使用に関わる諸問題の検討に入る。第7章ではまず、『日本語学習者会話データベース』及び『KY コーパス』を分析資料として日本語学習者の使用実態を概観し、また用例考察を通して使用上の問題の有無を確認する。その後、「～(さ)せていただく」の各用法に対する日本語学習者の使用意識をアンケート調査を通して明らかにし、調査結果を母語話者の容認度調査の結果と比較することによって、その関連性を検討する。

第8章では日本語教育における「～(さ)せていただく」の捉え方を、日本語教科書での扱い、及び日本語教育の現場での扱いの2つの面から考察し、またその捉え方がどのように日本語学習者の使用意識に影響するのかを、第7章の調査結果を踏まえて検討する。

第9章では、第3章～第8章の議論を踏まえ、日本語教育における「～(さ)せていただく」のあるべき姿を検討し、その教授に関する提言を行う。

第10章では研究全体の総括を行う。各章の内容を振り返り、本研究の結論をまとめる。最後に、「～(さ)せていただく」に対して、将来の展望と課題について述べる。

第2章 「～（さ）せていただく」に関する先行研究

本章では、「～（さ）せていただく」に関連する先行研究を概観し、問題点を明らかにしたうえで、本研究の課題を具体的に設定する。

現存する「～（さ）せていただく」の用法とその分類を明らかにすることが、各用法の社会的容認度及び使用動機や使用効果の研究の基盤になるため、本章ではまず、「～（さ）せていただく」の用法に関する研究を概観する。次に、「～（さ）せていただく」の使用動機及び使用効果についての先行研究の立場を確認する。また、外国人日本語学習者の使用状況を考察した研究も見ておくこととする。最後に、先行研究の内容を整理して問題点を指摘したうえで、本研究の課題を明らかにする。

なお、「～（さ）せていただく」の表記について、先行研究では「（さ）せていただく」「させていただく」「サセテイタダク」など不統一が見られるが、本論文では原則として、引用箇所では、原著者の表記に従い、それ以外の場合は「～（さ）せていただく」に統一することにする。

2.1 「～（さ）せていただく」の用法に関する研究

「～（さ）せていただく」の用法及びその分類に触れた先行研究には、菊地（1997b）、米澤（2001）、宇都宮（2005）、文化庁（2007）があるが、本節では時系列に沿って見ていく。

2.1.1 菊地（1997b）

菊地（1997b）は、「～（さ）せていただく」の基本的な使い方を「本義」と名付け、その内容について以下のように述べている。

「させる」には、一用法として「『……してもよい』という恩恵／好意的な許可を与える」という用法がある。そこで、「……する」側が「……させてもらう」と述べれば、〈相手から「そうしてもよい」という恩恵／許可を得て、そうさせてもらう〉というふうに相手を立てた捉え方になるが、さらに「もらう」のわかりに「いただく」を使ったのが「させていただく」である。「いただく」は謙譲語Aというタイプの敬語であり、「させていただく」と使えば、敬語の機能としては、〈恩恵／許可の与え手（相手）を

高め、その受け手＝「……する」側（自分）を相対的に低める」ということになる。つまり、「させていただく」とは、本来、〈「どうしてもよい」という 恩恵／許可を得て 何かを「させてもらう」ことを、恩恵／許可の与え手を高めて述べる¹⁾ 表現である。

(p. 41)

ただ同時に、菊地は「日本語には、〈実際には必ずしもそうではなくても、相手から恩恵を得ているかのように捉えるほうが礼にかなう〉という発想がある」とも述べており、この発想に基づき恩恵の存在が明確でない場面にまで「～（さ）せていただく」の使用が拡張したと指摘している。また恩恵の明確さによって、「～（さ）せていただく」の用法を次の（Ⅰ）～（Ⅳ）の４種類に分類している。

（Ⅰ）．（本当に）恩恵／許しをいただくという場合

（例）先生の本を使わせていただけないでしょうか。

（Ⅱ）．恩恵／許しを得てそうすると捉えられる場合

（例）出席させていただきます。

一言ご挨拶させていただきます。

（Ⅲ）．恩恵／許しを得てそうすると（辛うじて）見立てることができる場合

（例）一緒にテニスをさせていただいた。

新郎とは十年来のお付き合いをさせていただいた田中と申します。

（Ⅳ）．恩恵／許しを得てそうするとは全く捉えられない場合

（例）新製品を開発させていただきました。

ホワイで過ごさせていただきます。

(pp. 41 - 45)

用法（Ⅰ）について菊地（1997b）は「「～（さ）せていただく」の最も基本的な使い方」と指摘し、また「～（さ）せていただく」の使用が用法（Ⅱ）までに拡張したことについて

¹ 太字は菊地（1997b）によるものであるが、下線は筆者によるもの。

て「自然なこと」と述べている。用法（Ⅲ）に関しても、その使用が適切である人の割合が（Ⅰ）（Ⅱ）よりも低下することは「好みの違い」であって、用法（Ⅲ）自体は「誤り」と言うべきものではない」との認識を示している。

ただ用法（Ⅳ）については、恩恵性の希薄化により本義が意識されなくなるため、用法（Ⅰ）～（Ⅲ）とは異質の、「単に〈何か「する」ことを、自分を低めて述べる〉だけの用法になっている」と述べている。また用法（Ⅳ）は「（1997 年時点では²⁾ 誤り」との判断を示している。

2.1.2 米澤（2001）

米澤（2001）は、「～（さ）せていただく」の基本的な使い方を「本来の用法」と名付け、その内容を以下のように定義している。

聞き手の使役行為が話し手の行為成就に繋がったとし、それを恩恵として受け止めている場面での使用である。 (p. 112)

また、「本来の用法」を「明確な使役行為が存在する用法」とし、それに対して「明確な使役行為が存在しない用法」も存在することを指摘したうえで、それらの用法を「拡大用法」と名付ける。さらに、「拡大用法」には以下のようなA～Cの3種類が存在すると述べている。

A. 話し手の行為の申し出

話し手は相手の利益のために自身が行為を行うことを申し出る際、実際には使役行為が存在しなくとも、表現上使役形の使用が見られる。

（例）ご希望の方に資料をお宅まで無料でお送りさせていただきます。

超過料金は手前どもの方でナニさせていただきますので。

B. 話し手の行為遂行宣言

実際は話し手の自分本位な行為遂行が行われるが、形式上は相手の使役行為のもと

²⁾ 原文は「現時点では」になっている。

遂行されたかのように表現される。

(例) [→面接応募者] (面接の) 部屋を分けさせていただきます。

[スピーチ] 新郎新婦の御紹介させて頂く次第でございます。:

[司会者] それでは、発表させていただきます。

C. 話し手の自分本位的な被使役行為者としての認識

話し手が自身の利益になる行為遂行が、恰も相手の意志、つまり使役行為により成就したかのように見せかける表現である。

(例) [女将→仕事の依頼相手] 私が勝手に決めさせていただきました。

[女性→レポーター] (飼い犬は) CMにもドラマにも出させて頂きまして。

(pp. 113 - 115)

2.1.3 宇都宮 (2005)

宇都宮 (2005) は、「～(さ) せていただく」の構造を、

①「ある行動を行う許可を得た表現」+②「恩恵間接尊重」+活用語尾 (p. 30)

とし、また「①において「許可を与えると想定される人物」を「行動の許可者」と名づけ、表現形式全体の「行動」の「決定権」を持つ人物と分けることにする。「行動の許可者」(「許可者」)は「…に～(さ) せていただく」の「…」の部分に入る人物だと想定できる。」とした。この構造を基に、「～(さ) せていただく」の基本的な使い方を「本来の意味」と名付け、以下のように定義した。

1) 「行動の主体である自分」が「行動に関係する人物」(＝「行動の許可者」または「許可者」)に、その行動を行う「許可」の意を得る(または得た)。

2) 1)に「恩恵」を感じ、「行動の許可者」を高くし、「自分」を高くしない、を兼備したものである。 (p. 31)

また上述の「本来の意味」は、以下の4点において従来の意味記述とは異なっていると主張している。

- 1) 「行動の許可者」を、「行動」の「決定権」を持つ人物と分けて明示した点
- 2) 「恩恵を受ける（受けた）」と、「行動の許可を得る（得た）」を分けて考えた点
- 3) 「相手」を高くするとされていた表現を、「行動の許可者」を高くする、とした点
- 4) 一部の文法書で述べられているような「光栄に思う」という概念を外した点

(p. 31)

以上の「本来の意味」に関する定義を踏まえ、宇都宮（2005）では「～（さ）せていただく」の用法をタイプA～タイプCの3種類に分類している。

1) <タイプA> 「本来の意味」の用法

（本当に）「ある行動を行う許可を得た」という意味

＋「恩恵間接尊重」の意味がある場合

「行動の許可者」が、本当に「許可」をした（する）場合。「…に～（さ）せていただく」の「…」の部分に具体的な人物を入れて言い表すことができる。

例：「先生にビデオカメラを使わせていただいた。」

「授業を早退させていただきますか？」

<どちらも「行動の許可者」＝「先生」>

2) <タイプB> 「許容範囲」の用法

「あたかも許可を得た」意味

＋「恩恵間接尊重」の意味があると見立てることができる場合

「行動の許可者」が、「許可」をした（する）と見立てることができる場合。「…に（さ）せていただく」の「…」の部分に具体的な人物を想定し言い表すことができる。

例：「（新聞記事で）敬称は、省略させていただきます。」

<「行動の許可者」＝読者>

「先日は、お邪魔させていただきましたありがとうございました。」

<「行動の許可者」＝相手>

3) <タイプC> 「検討を要する」用法

「あたかも許可を得た」意味

＋「恩恵」の意味があるとは捉えられない場合（間接尊重の意味はあると思われる）

「行動の許可者」を特定することができず、「…に～（さ）せていただく」の「…」の部分に具体的な人物を入れて言い表すことができない。

例：「弊社は新製品を（？ に）開発させていただきました。」

「夏休みは（？ に）沖縄に旅行させていただきます。」（pp. 31 - 32）

2.1.4 「敬語の指針」（2007）

平成 19 年（2007 年）の「敬語の指針」には、「「させていただく」の使い方の問題」という記述があり、そこでは「～（さ）せていただく」の基本的な用法を次のようにまとめている。

「（お・ご）……（さ）せていただく」といった敬語の形式は、基本的には、自分側が行うことを、ア）相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ）そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われる。（p. 40）

また、基本的な用法に合致しない用法の出現を「ア）、イ）の条件をどの程度満たすか」という問題として捉え、そのことを 5 つの用例を通して論じている。以下では用例とともに、論述内容を提示する。また、各用例の場面を＜＞内に提示する。

1) ＜相手が所有している本をコピーするため、許可を求めるときの表現＞

「コピーを取らせていただけますか」。

ア）、イ）の条件を満たしていると考えられるため、基本的な用法に合致していると判断できる。

2) ＜研究発表会などにおける冒頭の表現＞

「それでは、発表させていただきます」。

ア）の条件がない場合には、やや冗長な言い方になるため「発表いたします。」の方が簡潔に感じられるようである。

3) ＜店の休業を張り紙などで告知するときの表現＞

「本日、休業させていただきます」。

2)と同様に、ア)の条件がない場合には「休業いたします。」の方が良いと言えるだろう。

4) <結婚式における祝辞の表現>

「私は、新郎と3年間同じクラスで勉強させていただいた者です」。

ア)とイ)の両方の条件を満たしていないと感じる場合には、不適切だと判断される。ただし、結婚式が新郎や新婦を最大限に立てるべき場面であることを考え合わせれば許容されるという考え方もあり得る。

5) <自己紹介の表現>

「私は、〇〇高校を卒業させていただきました」

4)と同様だが、「私は、卒業するのが困難、だったところ、先生方の格別な御配慮によって何とか卒業させていただきました。ありがとうございました」などという文脈であれば、必ずしも不適切だとは言えなくなる。(pp. 40-41)

また「敬語の指針」(2007)では、上記の用例②～⑤を「ア)、イ)の条件を実際には満たしていなくても、満たしているかのように見立てて使う用法」として捉え、それらの用法が「～(さ)せていただく」の使用域を広げていると指摘している。

2.2 「～(さ)せていただく」の使用動機及び使用効果に関する先行研究

本節では、「～(さ)せていただく」の基本的な用法に該当しない用法を対象に、これらの用法の使用動機及び使用効果に関する先行研究の立場をまとめる。

2.2.1 使用動機に関する先行研究

2.2.1.1 菊地(1997b)：礼にかなう／相手を立てる

菊地(1997b)では、上述の「～(さ)せていただく」の用法(Ⅱ)の使用動機に、「「実際には恩恵を得ていなくても、相手から恩恵を得ているかのように捉えるほうが礼にかなう」という発想がある」と指摘している。例として、相手の話を「聞いた」ことを、実際にはとくに得るところのない話でも、「聞かせてもらった」と表現するほうが礼にかなう

という面がある。また、「今日は僕は早く帰るよ」と言ってもよい立場の上司が部下に「今日は早く帰らせてもらおうよ」というように、「本当は相手の許可を得る必要のない場合でも、相手の許しを得てそうするかのように捉えるほうが相手を立てることになる」という一面もある。

また用法（Ⅲ）にあたる「新郎とは十年来のお付き合いをさせていただいた田中と申します」「一緒にテニスをさせていただいた」という用例の使用動機については以下のように述べている。

友人どうし「つきあう」とか「テニスをする」とかは、一般には対等の関係であり、甲が乙から一方的に恩恵を得るという関係ではない。その意味で「相手から恩恵／許しを得てそうする」とは、本来捉えにくい内容であるが、例えば皇族や名士などとなら、付き合えるのは「恩恵」だと捉える人もあろう。一般の友人どうしであっても、相手を然るべき人と捉えて（あるいはそう見立てて）「なにかをさせていただいた」などと述べることは、（Ⅱ）の延長として説明のつく範囲の、ありうる表現である。

(pp. 42－43)

以上のように菊地（1997b）では、用法（Ⅱ）（Ⅲ）の使用動機を「礼にかなう／相手を立てる」ことであるとしている。

2.2.1.2 菊地（1997b）・井上（1999）：謙譲語B「～いたす」「お～する」の代替語説

菊地（1997b）では、「～(さ)せていただく」の用法（Ⅰ）～（Ⅲ）が謙譲語Aに該当するのに対して、（Ⅳ）は謙譲語Bに属する用法であるとし、そのうえで「～(さ)せていただく」に謙譲語Bの用法が生じた理由を以下のように述べている。

現代の代表的な謙譲語B「～いたす」の守備範囲が狭いという問題がある。「～いたす」は多くの動詞について使える代表的な謙譲語Bなのだが、多くの動詞とは言ってもサ変に限られ、非サ変動詞では、たとえば「過ごす→過ごしいたす」などとは言わない。つまり、非サ変の場合、謙譲語Bは作れないのである。またサ変の場合でも、「～いたす」は、連体修飾の場合には「～いたす者」などと言いきく。これに対して「させていただく」なら、サ変・非サ変を問わず使えるし、連体修飾の場合にも制約はない。守備範

囲の広い謙譲語Bを求める心理が現代日本語に潜在的にあって、「させていただく」がその位置を占めようとしている。(p. 45)

このように、菊地(1997b)は、「～いたす」が使用しにくいところでその代替語として「～(さ)せていただく」を使用する心理が用法(Ⅳ)の使用動機であると論じている。

また、井上(1999)では、「～(さ)せていただく」が従来の謙譲語「お～する」より守備範囲を広げていると述べ、拡大用法が生じた理由については「理論的にすべての動詞に付けられて便利であるため」とし、使用頻度が上がったのは「便利であるため」と、菊地(1997b)と同様の見方を示している。

2.2.1.3 米澤(2001)：相手への配慮のための使用

米澤(2001)は、相手の利益となる行為を話し手が行う場合の受給動詞の使用は、「「お前のためにわざわざ行う」といった自己尊大的な響きを伴い、話し手は自身のぞんざいさを感じ憚りを覚える」と指摘している。それを回避するため、「話し手は相手への配慮を強める必要がある場面では、「あなたのために私が～してやろう」と言う代わりに「～(さ)せていただきます」を使用し、実際に使役行為はなくとも、形式上は聞き手からの使役行為に促され、話し手の行為は成り立つことになる」と述べている。

また、話し手が相手の意向を無視して自分本位な行為を遂行させることについて「礼を欠き相手に対して失礼になりかねない」ことを指摘し、この場面での「～(さ)せていただきます」の使用には、「話し手の行為遂行は、相手は無視したところで成立しているのではなく、恰も相手の意志によるものであるかの如く感じさせることで、相手への配慮、丁寧さが解せる」という動機があることを述べている。

さらに、「～(さ)せていただきます」は「恩恵の与え手を主語にして述べなければならない「てくれる」と異なり、「てもらう」を用いることでその許可の与え手を自由に想定でき、つまり「おかげさま」的発想がそこにあると思われる」とし、「実際の使役行為者ではないが、聞き手を「おかげさま」的発想のもとに使役者に仕立て、聞き手への配慮を示すわけであり、そういう意味では丁寧語的要素の強い表現であると思われる」と述べている。

以上のことから米澤(2001)は、基本的な用法に該当しない「～(さ)せていただきます」の使用動機を「自己尊大感や自分本位な行為遂行による失礼さを回避し、相手への配

慮を表すための使用」と捉えていると思われる。

2.2.1.4 椎名（2018、2021）：相手との距離を認識しながら関わる

椎名（2018、2021）では「～（さ）せていただく」の後接部の文型を 11 種類に分類している。その詳細を次の表 2-1 に示す。

表 2-1 「～（さ）せていただく」の後接部の文型の分類（椎名 2018:62）

分類		例
発話行為型	願望型	～させていたきたい
	言い切り型	～させていただきますね
	意思表示型	～させていたきましょう
	言いさし型	～させていたきたいんですが
	質問型	～させていただいてもよろしいでしょうか
	仮定・条件型	～させていただかないと
	現状説明型	～させていただいています
非発話行為型	形式名詞・連体修飾語としての使用	～させていただくことになっています
	従属節内での使用	～させていただき、ありがとうございます
	他者発話の引用	～させていたくとさ
	過去形	～させていただきました

これに基づき、椎名（同上）は『青空文庫』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以後、BCCWJ と略称する）を用いて「～（さ）せていただく」の前接動詞、並びに後接部の文型変化の通時的研究を行った。その結果、前接動詞の多くには、「相手の存在や関与が必須である」という特徴が見られたのに対して、後接部については、言い切り型、現状説明型、過去形といった、一方的な行動の宣言や、相手の関与または交渉の余地のない使用例が増えた一方、願望型、意思表示型、言いさし型などの、相手と直接交渉する使用例は減少傾向にあることを示した。このことから椎名（同上）は「～（さ）せていただく」表現について、「従来の敬語が果たしてきた距離を確保する遠隔化だけではなく、近接化の機能も負ったことになる」と指摘し、「～させていただきます」は距離感を強いられるコン

テキストにありながら、その距離感を認識しつつ相手へ手を伸ばそうとする気持ちが話し手にある」と結論付けている。

2.2.2 使用効果に関する先行研究

「～（さ）せていただく」の使用効果について、先行研究では肯定的な意見と否定的な意見の双方が見られる。

前者の論者としては、菊地（1997a）、菊地（1997b）、米澤（2001）が挙げられる。菊地（1997a）は、「本日休業させていただきます」という用例に対して、「実際には許可などなく店が勝手にやすむのだから、「休業いたします」でもよいところ」であるが、「休業させていただきます」の使用には、「許しを請うているようで、敬度が高い印象を与える」という効果があると指摘している。

また、菊地（1997b）では、「出席いたします」よりも「出席させていただきます」に「恩恵的な出席許可」が、「ご挨拶いたします」よりも「ご挨拶させていただきます」に「光栄なこと」として捉える話し手の気持ちが示される表現上の効果があるとしている。

米澤（2001）は、相手の利益のために自身が行為を行うことを申し出る場面で「～（さ）せていただく」を使用することで、「聞き手は話し手の恩着せがましさを感じずにすむ」との効果があるとしている。

一方、使用効果については否定的な意見も多く散見される。

例えば『国公労調査時報』（2010）は、政治上重要な判断を求められる場面で「～（さ）せていただく」を過剰に使用することは、「聞き苦しいだけではなく、政治姿勢や発言内容の信用度にもマイナスに働く」との見方を示した。

また、前章で触れた 2010 年の朝日新聞のアンケート調査では、回答者からの使用効果に関するマイナスの意見が以下のように多数寄せられた。

- 1) へりくだっているようで、上から目線の言葉。経営者などから「この条件でさせていただく」といわれると、逆らうなという強いプレッシャーを感じる。

（東京、50 代女性）

- 2) これほど一方的で押しつけがましい言葉はない。

（奈良県、70 代男性）

3) 初めて聞いたときはバカにされているのかと面食らった。公務員や年配の人も使っているが、何と軽薄なと思う。

(千葉県、20代女性)

2.3 外国人学習者の使用に関する研究

「～（さ）せていただく」の不適切な使用については日本語母語話者だけではなく、外国人日本語学習者（以下、「学習者」と略述する）の使用実態に対する言及も少なくない。また、筆者は実際に日本語教育の現場で、学習者の「～（さ）せていただく」使用に対して日本語教師が「丁寧すぎる」と指摘する場面に居合わせたことがある。

本節では、王（2018）、梁（2018）に加え、筆者が行った中国人日本語学習者を対象とした「～（さ）せていただく」の習得・使用に関する対面意識調査を基に、日本語学習者の使用に関連する先行研究の内容をまとめる。

2.3.1 王（2018）

王（2018）は、依頼場面における使役授受表現の使用に関する日本語学習者の捉え方を調べるため、中国国内の大学の日本語学部³に在学している24名の学習者を対象に、会話の自由記述による空所補充式の自由産出課題と表現形式の使用に関する意見を尋ねるインタビュー調査を実施した。自由産出の課題は以下の通りである³。

【WさんとBさんの会話】

B「再来週の忘年会の幹事はだれがやってくれるのかな。」

W「あとう、よろしければ、私が…」

B「あ、君、入社1年目じゃないのか？できるのか？」

W:「はい、先輩方のアドバイスを伺ってやりますので、ぜひ_____。」

【質問】あなたがWさんだとします。あなたは、どうしても幹事をやりたいと思っています。そこで、Bさんをお願いしようとしています。下線のところで、どんな日本語を使いますか？いくつでも構いませんので、あなたが適切だと思う言い方をすべてお

³ 【質問】という部分に関しては、協力者全員が中国人であるため、質問は中国語で行われた。ここに掲げているのは、王（2018）が協力者の回答を日本語に翻訳したものである。なお、【質問】部分の原文（中国語）は付録1に掲げる。

書きください。

(p. 16)

その結果、24 名の対象者から得た 39 件の回答のうち、「～（さ）せていただく」を使用したものが 3 件あった。その詳細を以下に示す。

回答①：私にやらせていただきます。

回答②：試みにやらせていただきます。

回答③：私が担当させていただきます。

自由産出課題用紙では、「B さんをお願いしようとしている」と課題が「依頼・許可求め」であることを明記しているにもかかわらず、言い切り型の「～（さ）せていただきます」を使用した 3 件の回答がすべて宣言する言い方で、「やらせていただけませんか」などの依頼表現を回答した学習者はいなかった。このことに対して王は、学習者が「～（さ）せていただく」の各用法を適切に使い分けられていない可能性があるとして分析している。またこの調査において対象者 24 名全員が「～（さ）せていただく」を学習したことがあることから、日本語学習者には「～（さ）せていただく」を学習したことがあっても正確に使用できない可能性が示唆された。

2.3.2 梁 (2018)

梁 (2018) は、「～（さ）せていただく」の各用法に対する日本語母語話者と日本語学習者の使用意識を比較するため、日本語母語話者 32 名と日本在住の日本語学習者 36 名を対象としてアンケート調査を行った。調査の内容は、菊地 (1997b) の分類法の用法 (I) ～ (IV) にしたがって、それぞれ質問文を設定し、質問文の空所に適切な表現を選択させるものである。質問文の一例を以下に示す。

(読者が小説の作家に言うこと) 「新しい作品を_____。素晴らしいですね！」

- | | |
|-----------------|-----------------|
| a. 拝見させていただきました | b. 拝見させていただきました |
| c. 拝見いたしました | d. 拝見しました |

結果分析では、(Ⅰ)～(Ⅳ)の用法において「～(さ)せていただく」が含まれる選択肢を選択した協力者の割合を算出し、日本語母語話者と外国人日本語学習者の「～(さ)せていただく」の選択率を用法別に比較した。その結果は図2-1の通りである。

図2-1 梁(2018)の調査結果

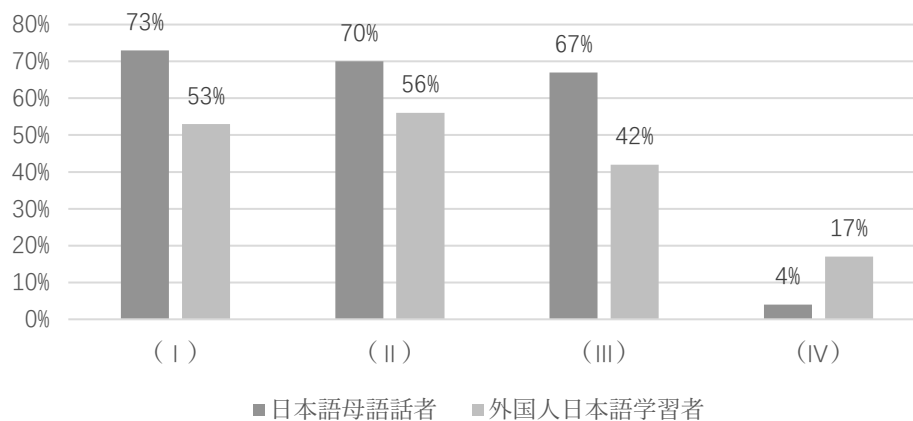


図2-1に示されているように、外国人日本語学習者と日本語母語話者の使用意識には「～(さ)せていただく」選択率に、用法(Ⅰ)≧用法(Ⅱ)>用法(Ⅲ)>用法(Ⅳ)のような同様の傾向が見られた。このことから、日本語学習者の使用意識は、学習者が日常接する周辺の母語話者の使用実態から影響を受けている可能性があることが窺える。また、(Ⅳ)を除くすべての用法において、日本語学習者の選択率が母語話者より概ね15%～25%ほど低いことから、学習者が「～(さ)せていただく」の使用を敬遠している可能性も示唆された。

2.3.3 「～(さ)せていただく」の習得・使用に関する対面意識調査

筆者は2019年7月に、東海地区在住の中国人学習者10名を対象とした「～(さ)せていただく」の習得・使用に関する対面意識調査を行った。この調査の目的は、中国人学習者の「～(さ)せていただく」の習得ルート及び使用する際の意識を考察するためである。この調査の設問及び回答内容を次の表2-2に示す。

表2-2 中国人学習者における「～(さ)せていただく」の習得・使用に関する調査の詳細

質問	回答の内容	回答した人数
----	-------	--------

Q1：あなたはどこでこの表現を習いましたか？	日本人がよく使うから覚えた。	4
	日本の大学・日本語学校で習った。	3
	日本のアニメで習った。	1
	中国の大学で習った。	1
	仕事場（アルバイト）で習った。	1
Q2：あなたはどのような場面でよくこの表現を使いますか？	丁寧さが必要な場面	4
	先生・上司など目上の人に何かを願う場合	3
	目上の人に	2
	（アルバイトで）顧客に	1

まず、質問1に対する回答では、大学、日本語学校や教科書などといった正規なルートで習得した人は全体の3割に過ぎない。半数以上の人は、詳しい説明をされたこともなく、他者が使用する場面でこの表現を覚えており、母語話者に誤用や過剰使用などの問題があると学習者もその影響を受けることが考えられる。この点においては前述した梁（2018）の研究と同様である。次に、質問2に対しては、学習者のほとんどがこの表現を敬語として捉えていることが分かるが、この表現の基本用法である「依頼・許可求め」を理解して使用している人が10人中3人しかおらず、それ以外の人は基本用法と拡大用法の使い分けができないものと考えられる。

2.4 先行研究の整理とその問題点

本節では、ここまでに論じた先行研究の問題点を、以下の1)～4)に整理したうえで、本研究の課題と方向性を明らかにする。

- 1) 「～（さ）せていただく」の用法をもれなく包含した分類法が確立されていない。

「～（さ）せていただく」の基本的な用法に対する先行研究の記述は、表現は異なるものの、いずれも「許可」「恩恵」といった要素に触れているため、議論の方向性が一致していることが分かる。その一方で、基本的な用法以外の用法に関して、以下のような不統一が見られる。

まず、分類基準に関して、菊地（1997）、宇都宮（2005）、及び「敬語の指針」（2007）では、許可行為並びに恩恵関係の有無を基準としている一方、米澤（2001）は使用動機をもとに分類している。

また、分類法の詳細を見ると、「敬語の指針」（2007）では「基本的な用法」と「そうでない用法」という二分法を採用し、「そうでない用法」の下にさらに細かい類別を設けていないため大雑把さが否めない（うえ、ア）、イ）の条件を実際には満たしておらず、満たしているかのように見立てることもできない用例が存在する可能性を考慮していない。

菊地（1997）及び米澤（2001）では、「恩恵／許可を得てそうする」と見立てることのできない用例にまで言及しているが、恩恵・許可のどちらかが欠落した用例は論じられていない。宇都宮（2005）は、4つの先行研究の中で唯一、許可と恩恵を別個に考える必要があると指摘したものであるが、分類項目がタイプB（＝「許可者あり＋恩恵あり」）とタイプC（＝「許可者なし＋恩恵なし」）の2項目に止まっており、「許可者あり＋恩恵なし」「許可者なし＋恩恵あり」のパターンの用例の存在には言及されておらず、菊地（1997）及び米澤（2001）と同様の問題点が存在する。

以上、「～（さ）せていただく」の研究史について概観してきたが、基本的な用法以外の用法をもれなく包含した分類法は未だに確立されていないことが分かった。拡大用法の使用動機は用法ごとに異なると考えられ、その考察も用法別に行うのが一般的であるが、分類法に不備があると使用動機の研究にも支障をきたす恐れがあるため、新たな分類法の検討が必要であろう。

2) 拡大用法の内、どの用法までが許容範囲内なのかが明らかにされていない。

「～（さ）せていただく」の拡大用法に関する研究では、拡大用法に対して「誤用」「揺れ」「許容範囲」などの判断が示される。しかし「～（さ）せていただく」の何種類もある拡大用法の内、どこまでが許容範囲で、どこまでが揺れなのか、を明らかにする必要がある。また、母語話者の容認度が不明であることが、学習者の運用面に影響を及ぼす恐れがあるため、「～（さ）せていただく」表現の許容範囲を明らかにすることは日本語教育上においてもその意義は少なくない。

3) 日本語母語話者による拡大用法の使用動機が十分に究明されていない。

「～（さ）せていただく」の拡大用法の使用動機には、様々な心理的要因が絡んでいると思われる。また、先行研究では、使用動機の検討が十分ではない可能性も考慮する必要がある。第6章で取り上げる言語景観及び日本の国会における委員会審議での「～（さ）せていただく」の使用状況の調査では、先行研究では触れられていない使用動機が存在する可能性も示唆されており、拡大用法の使用動機については引き続き考察が必要である。

また、「～（さ）せていただく」は敬語表現に属するため、その使用動機は「好意的な使用」である⁴にもかかわらず、実際の使用効果にはそうはならず、使用動機と実際の使用効果の間にずれが生じている。先行研究では話し手の使用動機に焦点を当てるものが多いが、この使用動機と実際の使用効果のずれに注目した研究は管見の限り見当たらないため、本研究では聞き手の心理にも注目して、このようなずれが生じる理由を検討する。

4) 日本語学習者の使用実態及びその要因が明らかにされていない。

先行研究では日本語学習者の「～（さ）せていただく」の運用上の問題を指摘しているものがあるが、現在のところ、日本語学習者の使用実態をコーパスなどの材料を利用して調査した研究は、筆者の調べた限り見当たらず、例えば日本語学習者の使用上の問題が言語的なものなのか、語用論的なものなのかなどの問題が残されている。また先行研究では、日本語学習者の使用状況が日本語母語話者の使用から影響を受けているとの指摘もあるが、調査対象の人数の少なさ、居住地域の偏りなどがあるため、「～（さ）せていただく」の使用における学習者と母語話者の関連性を明らかにするためには、さらに対象者、地域を広げた全面的な調査の実施が望ましい。さらに、日本語母語話者の使用に揺れが見られる中、「～（さ）せていただく」が日本語教育においてどのように扱われているかについての調査も必要であると思われるが、先行研究では、日本語教科書や日本語教育の現場での「～（さ）せていただく」の扱われ方について調査したものは極めて少数である。

本論文では次章以後、これらの問題点について考察をして行く。

⁴ ごく一部、「好意的な使用」でない使用例も見られる。その一例として、夫婦喧嘩の場面で、「実家に帰らせていただきますわ」が挙げられる。

第3章 「～（さ）せていただく」の用法の種類

第2章で確認したように、現存する「～（さ）せていただく」の各用法の分類には、統一された分類基準がない、許可と恩恵の違いが明確ではないなどの問題点が存在する。先行研究では「～（さ）せていただく」の社会的容認度や使用動機を検討する際、用法ごとに考察を行うのが一般的であるため、適切な分類の確立はその後のあらゆる研究の基盤となる。そのため本章では、上述した先行研究の問題点を踏まえ、新たな分類を検討する。

3.1 基本的な用法について

前章で述べたように、先行研究では、恩恵と許可の有無を基準に「～（さ）せていただく」の基本的な用法とそうでない用法を区別している。そのため、基本的な用法については、事実上の許可及び恩恵性が存在することが満たされる必要があると思われる。さらに、これ以外には何か必要な条件があるのかも検証の必要がある。本節では、「～（さ）せていただく」の基本的な用法にあたる例文（3-1）を材料にして、先行研究における「～（さ）せていただく」の基本的な用法の記述を再確認し、基本的な用法に必要な条件を明らかにする。

（3-1）すみませんが、先生の本を使わせていただけないでしょうか。

（菊地 1997b:40）

ここではまず、菊地（1997b）の定義を再掲する。

「どうしてもよい」という 恩恵／許可 を得て何かを「させてもらう」ことを、恩恵／許可の与え手 を 高めて述べる。

（菊地 1997b:41）

下線で示しているように、菊地（同上）の定義では、「許可」、「恩恵」以外に、「恩恵・許可の与え手」「高めて述べる」の2つの要素も含まれている。ここではひとまず、「許可」を「要素A」、「恩恵・許可の与え手」を「要素B」、「恩恵」を「要素C」、「高めて述べる」ことを「要素D」とそれぞれ呼ぶことにする。

例文（3－1）では、学生が「先生」に本の借用の許可を求めているため、「先生」が「恩恵・許可の与え手」であり、「先生」が「本を使わせる」ことが事実上の「許可」となる。また、「先生」が本の借用を許可することは、話し手の「先生の本を借用したい」という目的の成就につながるため「恩恵」として捉えられる。さらに、「～（さ）せていただく」自体は謙譲語であり、例文（3－1）では「先生」を高めて述べている。これが「高めて述べる」ことにあたる。

次に、米澤（2001）の定義を再掲する。

聞き手の使役行為が話し手の行為成就に繋がったとし、それを恩恵として受け止めている場面での使用である。（米澤 2001:112）

下線で示している箇所は、米澤（同上）の定義の「聞き手」「使役行為」「話し手」「恩恵」の4つの要素に相当するものである。例文（3－1）に当てはめると、「先生」が「聞き手」にあたるため、ここでの「聞き手」は菊地（同上）の要素Bに相当する。また、「使役行為」は「本を使わせて」という部分を指しているため、菊地（同上）の要素Aに相当する。「話し手」について、（3－1）では「学生」がこの要素に当てはまるが、菊地（同上）の定義ではこの要素には触れていないため、ここでは「要素E」と呼ぶことにする。「恩恵」は、菊地（同上）の要素Cに該当する。要素Dについては、米澤（同上）の定義は触れていない。

続けて、宇都宮（2005）の定義を再掲する。

①「行動の主体である自分」が「行動に関係する人物」（＝「行動の許可者」または「許可者」）に、その行動を行う「許可」の意を得る（または得た）。

② ①に「恩恵」を感じ、「行動の許可者」を高くし、「自分」を高くしない、を兼備したものである。（宇都宮 2005:31）

下線で示しているように、宇都宮（同上）の定義では、以下の5つの要素が存在する。

その一つ目は「行動の主体である自分」である。例文（3-1）に当てはめると、「本を借用」することが「行動」に当てはまるため、「行動の主体」は「学生」を指すことになる。したがって、ここでの「行動の主体である自分」は要素Eに該当する。

二つ目は「行動に関係する人物」（＝「行動の許可者」または「許可者」）である。「行動の許可者」が「先生」になるため、（3-1）の要素Bに該当する。

三つ目は「その行動を行う「許可」」である。「本を使わせる」という部分がこの要素に当てはまるため、（3-1）の要素Aに該当する。

四つ目の「恩恵」は、要素Cにあたる。

五つ目は「「行動の許可者」を高くし、「自分」を高くしない」ことである。「行動の許可者」である「先生」を高くすることになるため、（3-1）では要素Dに該当する。

最後に、「敬語の指針」（2007）の定義を再掲する。

基本的には、自分側が行うことを、ア）相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ）そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われる。

（「敬語の指針」2007:40）

「敬語の指針」（同上）の定義からは、「自分側」「相手側又は第三者」「許可」「恩恵」の4つの要素を抽出することができる。「許可」と「恩恵」はそれぞれ要素A、Cに該当するが、「自分側」は（3-1）の「学生」、「相手側又は第三者」は（3-1）の「先生」に当たると考えられるため、「自分側」は要素E、「相手側又は第三者」は要素Bに相当すると捉えることができる。また、要素Dに当たるものについては言及がない。

以上のように、「～（さ）せていただく」の基本的な用法に対する先行研究の定義を検討した結果、A～Eの5つの要素を確認することができた。なお、要素A～Cは上述したすべての先行研究において共通して存在するが、5つの要素をすべて包含した定義は宇都宮（同上）のみであり、菊地（同上）の定義では要素E、米澤（同上）及び「敬語の指針」（同上）の定義では要素Dがそれぞれ欠落している。

ただ、要素Dは相手への敬意を表すものであり、「～（さ）せていただく」は敬語のうちの謙譲表現に当たるため、その使用には必ず敬意を伴う。したがって要素Dは「～（さ）せていただく」のすべての使用に存在する恒常的な要素であり、欠落することは考

えにくい。また、要素Eは「～（さ）せていただく」の主語にあたる部分を表すものであり、「～（さ）せていただく」には必ず主語が必要であるため、要素Eも同じく欠落することのない恒常的な要素である。先行研究の一部ではこれらの要素に触れていないのは、それに関する記述を省略したものと考えられる。

以上のことから、本研究では要素D及び要素Eについても、要素A～Cと同じように、先行研究において共通して存在する要素と見做し、これ以降、要素Dを「敬意」、要素Eを「許可の受け手⁵」と呼ぶことにする。

また、要素A～Cに関しては次のように考えることにしたい。まず、Aは「許可を与える行為」について述べるものであり、例文（3-1）では「使わせ（る）」という部分がこの要素に該当する。米澤（同上）はこの要素を「使役行為」と記述しているが、「～（さ）せていただく」における使役行為は形式上のものであり、その実質は「許可行為」であるため、本論文では要素Aを「許可行為」と呼ぶ。

要素Bは「許可を与える者」であるが、これを本論文では、「許可者」と呼ぶことにする。なお、要素Bに当たるものを米澤（同上）は「聞き手」と呼んでいるが、「許可を与える者」と「聞き手」とが必ずしも同一人物であるとは限らないため、本論文では採用しないことにした。

また、「許可者」と「許可行為」は相互依存の関係にあるため、本論文ではこの2つの要素を合わせて「許可」とする。

要素Cについては、いずれの先行研究でも「恩恵」と記述しているため本論文でもこれに従うことにする。

以上のことから、基本的な用法とは、先行研究が共通して持っている（または持っている）と見なすことができる）「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の4つの要素を含むものであり、これらの要素がすべて認められる場合の「～（さ）せていただく」の用法を基本的な用法とすると、その使用範囲は必然的に限定されることになる。

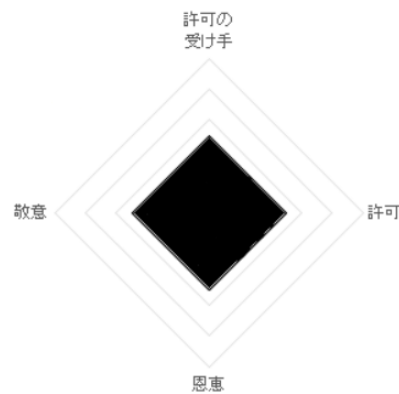
なお、本論文では、「～（さ）せていただく」の「基本的な用法」を「基本用法」と呼ぶことにし、その内容を以下のように規定する。

⁵ 先行研究では「話し手」、「自分」などの表記が見られるが、「～（さ）せていただく」の主語と発話者が必ずしも同一人物であるとは限らないため、「話し手」と表記するのは不適切であると思われる。また、「自分」は話し手を指しているのか、行動の主体を指しているのか不明であり、指す対象が曖昧である。宇都宮（2005）の「行動の主体」という表記は、「許可を受けて行動する者」という意味からすると「許可の受け手」と同じ対象を指すが、ここでは要素①、②の表記に合わせるため要素⑤の表記を「許可の受け手」とする。

「～（さ）せていただく」のすべての用法の内、「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の4つの要素をすべて有するものである。

このことを図3-1に示しておく。

図3-1 「～（さ）せていただく」の基本的な用法の使用範囲



上図では、基本的な用法に必須の「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の4つの要素を四角形で表している。黒色の四角形の部分は、「～（さ）せていただく」の基本的な用法の使用範囲を表しており、外側に向かって3層になっている四角形は使用範囲の拡大範囲を表す。

3.2 基本用法以外の用法について

3.2.1 「～（さ）せていただく」の使用範囲拡大の仕組み

第2章で既述したように、先行研究では米澤（同上）を除き、「許可+恩恵」の有無を基準に「～（さ）せていただく」の用法分類を行っている。また3.1で述べたように、

「～（さ）せていただく」の基本用法は「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の4つの要素で構成され、先行研究での分類は、実質的には各用法においてその4つの要素の内、「許可」及び「恩恵」が存在しているか否かということであった。

以上のことから、「～（さ）せていただく」の「基本用法（a）」を構成するこの4つの要素の内、一つもしくはいくつかの要素の存在が希薄化し（菊地 2010b:41）、使用範囲が拡大した場合（b）、さらに完全に欠落した場合（c）は、使用範囲上の制限が緩むこ

とになり、使用に拡大が生じると考えられる。この使用範囲の拡大の仕組みを図 3-2 に示す。

図 3-2 「～（さ）せていただく」の使用範囲拡大の仕組み

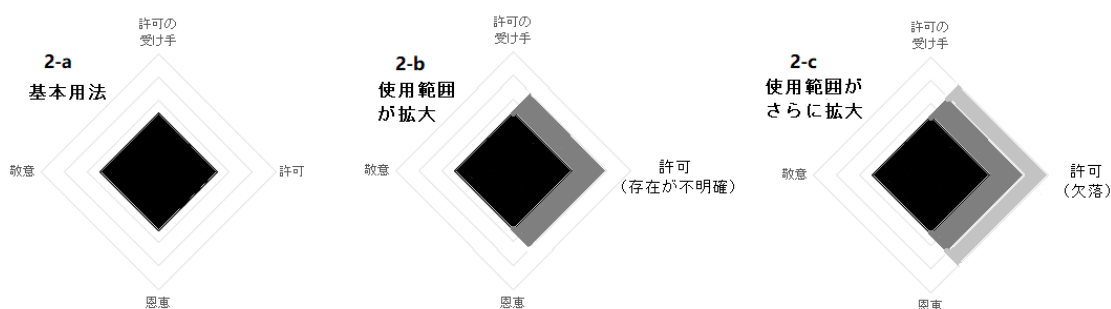


図 3-2 では、2-a が基本用法を示す。「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の 4 つの要素が基本用法の使用を黒色四角形の範囲に制限している。2-b では、「許可」という要素の希薄化により、「～（さ）せていただく」の使用が濃い灰色の四角形の範囲まで拡大する。2-c では、「許可」が完全に欠落し、「～（さ）せていただく」の使用がさらに薄灰色の四角形の範囲まで拡大している。

ただし、前節で論述した通り、「許可の受け手」と「敬意」は恒常的な要素であり、欠落することは考えにくく、「～（さ）せていただく」の使用範囲の拡大に関与しているのは「許可」及び「恩恵」の 2 要素となろう。

本論文では、このように、「許可」及び「恩恵」の 2 要素の希薄化または欠落に起因する使用範囲の拡大により生じた用法を「～（さ）せていただく」の「拡大用法」と呼ぶことにする。

3.2.2 「要素」による拡大用法の分類

前項で考察したように、「～（さ）せていただく」の拡大用法の実際は、その基本用法を構成する 4 つの要素のうち、「許可」と「恩恵」の 2 要素の希薄化または欠落に起因する使用範囲の拡大により生じた用法である。したがって「～（さ）せていただく」拡大用法には「許可」と「恩恵」の有無により表 3-1 に示すように 5 つの類型が存在すると考えられる。

表 3-1 拡大用法に考えられる 5 つの類型

用法		要素	
		許可	恩恵
基本用法		●	●
拡大用法	タイプⅠ	●	×
	タイプⅡ	▲	●
	タイプⅢ	▲	×
	タイプⅣ	×	●
	タイプⅤ	×	×

- ＊ 1) 「●」は、事実上の許可が存在する場合を示す。また、「恩恵」では、恩恵性の存在が確認できる場合を示す。
- 2) 「▲」は、事実上の許可が存在しないが、存在するとして見立てることができる場合を示す。
- 3) 「×」は、事実上の許可が存在せず、存在するとして見立てることができない場合を示す。また、「恩恵」では、恩恵性の存在が確認できない場合を示す。

表 3-1 で、事実上の許可の有無については、例えば「（学生が教師に）先生の本を使わせていただけないでしょうか」という菊池（同上）の用例では、学生が教師の本を借用する場合、教師からの同意を得る必要があり、教師が事実上の許可者、学生に本を使わせることが許可行為となる。そのためこの用例は「事実上の許可がある」と判定できる。

ただ、菊池（同上）や「敬語の指針」（同上）が指摘しているように、事実上の許可が存在しなくとも、「（学術発表中に）ここは図を提示するだけで説明は省略させていただきます」のように、自己決定した行為を誰かの許可の下で行われるように見立てることができる。この用例では、「説明を省略する」のは発表者の行為であるにもかかわらず、それをあたかも「聴衆の許可の下で省略する」かのように表現している。

そこで、本研究では、表 3-1 の分類に従い、「～（さ）せていただく」の拡大用法の類型を以下のタイプⅠ～タイプⅤに分類する。

タイプⅠ 事実上の許可が存在する＋恩恵性が確認できない場合

タイプⅡ 事実上の許可が存在しないが、存在するとして見立てることができる

＋恩恵性が確認できる場合

タイプⅢ 事実上の許可が存在しないが、存在するとして見立てることができる

＋恩恵性が確認できない場合

タイプⅣ 事実上の許可が存在せず、存在するとして見立てることもできない

＋恩恵性が確認できる場合

タイプⅤ 事実上の許可が存在せず、存在するとして見立てることもできない

＋恩恵性が確認できない場合

「～（さ）せていただく」の拡大用法は、基本用法に含まれている要素の希薄化・欠落によって生じたものであり、その類型は、希薄化・欠落した要素の種類と数によって決定される。この要素による分類は拡大用法のあらゆる可能性を考えたもので、この分類を用いることで、先行研究での、許可と恩恵の違いの不明確さを整理できたものとする。

3.3 恩恵性の有無についての本研究の判定基準

「～（さ）せていただく」の基本用法を構成する4つの要素に「恩恵」が含まれているが、恩恵とは抽象的な概念であるため、一部の用例においてその存在が顕在化していない場合がある。ただ、恩恵が拡大用法の類型を区分する基準の一つになっている以上、恩恵の有無を判断する基準を明示する必要がある。

先行研究での分類のいずれもが「恩恵」という要素に触れているにもかかわらず、恩恵の判定基準までを提示したものは見られない。ただし、2.1.4並びに2.2.1.1で触れたように、菊地（同上）及び「敬語の指針」（同上）では、文脈が恩恵の有無に影響を及ぼす可能性を示している。

菊地（同上）では、「新郎とは十年来のお付き合いをさせていただいた田中と申します」「一緒にテニスをさせていただいた」の2つの用例について、「友人どうし「つきあ

う」とか「テニスをする」とかは、一般には対等の関係であり、甲が乙から一方的に恩恵を得るという関係ではない」としながら、「例えば皇族や名士などとなら、付き合えるのは「恩恵」だと捉える人もあろう」と述べている。また、「敬語の指針」（2007）では、「私は、〇〇高校を卒業させていただきました」という例文には「恩恵を感じられない」とする一方、「「私は、卒業するのが困難だったところ、先生方の格別な御配慮によって何とか卒業させていただきました。ありがとうございました」などという文脈であれば、必ずしも不適切だとは言えなくなる」としている。ただ、いずれの研究においてもこれ以上の説明はなく、恩恵の有無を判断する基準の提示には至っていない。

菊地（1997b）の用例では、皇族や名士と付き合えるのは一種の荣誉であり、「付き合いわせてもらった」許可の受け手が名誉に思い、精神上的の満足感が得られることが予想されることから、「付き合う」という行為遂行から、恩恵を受けているという説明が成立するであろう。また「敬語の指針」（2007）の用例では、「先生方」の配慮で「卒業できない」という好ましくない事態が避けられたことから、恩恵性が認められる。

先行研究以外の用例についても、例えば出欠確認に対して「出席させていただきます」という返事では、許可の受け手が「出席する」という行為から何かを得られることは文脈では確認できないため、「恩恵」はないもの（以下、「恩恵なし」と略述）との判定が可能だが、「勉強になるのでぜひ出席させていただきます」とすると、「出席する」という行為により許可の受け手が「勉強になる」という精神上的の満足が得られるため、「恩恵」が生じる（以下、「恩恵あり」と略述）ことになる。

また、願望表現（「～（さ）せていただきたい」「～（さ）せていただけませんか」など）を含む用例では、許可の受け手の行為遂行が願望の達成につながると考えられるため、行為遂行に対する許可を一種の恩恵として捉えられる。さらに、感謝表現（「ありがとうございます」「おかげさまで」など）を含む用例についても、本研究では「恩恵あり」の用例として見なすことにする。

以上のことを踏まえ、本論文では、以下の1)、2)が「～（さ）せていただく」の使用されている文脈の中で確認できた場合のみを「恩恵あり」と判定する条件とする。

- 1) 何かを「させてもらう」ことにより、許可の受け手が精神・生理・物質的に満足を得ること、または好ましくない事態を回避できることを、文脈の中で明白に確認できる場合。

2) 願望表現や感謝表現がある場合。

本論文では次章以後、上述の分類を用いて、「～（さ）させていただく」の運用上の諸問題を考察していく。

第4章 「～（さ）せていただく」の使用状況の歴史的変遷

前章では、「～（さ）せていただく」の用法の類型を提示した。本章では、「～（さ）せていただく」の使用状況の歴史的変遷に関連した先行研究を見た上で、『青空文庫』を活用して「～（さ）せていただく」各用法の使用状況を年代別、用法別に考察する。このことによって、第5章の各用法の容認度に関する分析・検討へと繋げて行きたい。

4.1 使用状況の歴史的変遷に関する先行研究

今泉（1943）は、「「ていただく」は「来ていただく」「いらつしやつていただく」、明治の中葉以降流行して来た「…させていただく」のやうに用ゐられ」（p. 168）とし、「～（さ）せていただく」が明治中期以降実際に使用されていたことに触れている。しかし、時代を下って米澤（2001）は「～（さ）せてもらう」「～（さ）せていただく」の使用について、「明治末期まで用例が見られない。戦後頻用されていく」（p. 111）と述べており、この相違については検証が必要となろう。

松本（2008）は、明治・大正時代の文学作品における「～（さ）せていただく」の使用状況を調べるため、ROM版の新潮文庫のシリーズや『青空文庫』、国文学資料館、「日国オンライン」などのインターネット資料に加え、様々な印刷物まで渉猟して「～（さ）せていただく」の使用例を採集した。その結果、明治・大正時代の文学作品では27例の用例があり、そのうち最古のものは、三遊亭圓朝（1871）の以下の箇所であった。

さて此の若江の家へ宗桂という極感の悪い旅按摩がまいりまして、私は中年で眼が潰れ、誠に難渋いたしますから、どうぞ、御当家様はお客さまが多いことゆえ、療治をさせて戴きたいと頼みますと、慈悲深い母だから、

母「療治は下手だが、家にいたら追々得意も殖えるだろう、清藏丹誠をしてやれ」

（松本 2008:359, 下線は筆者。以下も同じ）

また、高橋・東泉（2018）は、日本語歴史コーパス（CHJ）を用いて「～（さ）せていただく」の用例を採集したが、20の用例すべてが明治・大正時代のものであった。

比較のため、松本（同上）及び高橋・東泉（同上）の調査結果を表 4-1 に年代別にまとめる。

表 4-1 松本（2008）及び高橋・東泉（2018）の調査結果

年代	松本（2008）	高橋・東泉（2018）	合計
1870-1879	1	0	1
1880-1889	0	0	0
1890-1899	5	0	5
1900-1909	5	4	9
1910-1919	9	4	13
1920-1929	7	12	19
合計	27	20	47

表 4-1 に示したように、「～（さ）せていただく」は明治初期の 1870 年代に初出し、明治中期の 1900 年代に入ってからその使用が次第に拡大している。しかし、以上の先行研究での考察は、採集した用例数が少ないうえ、用法別の検討がされていないという問題点が存在する。そこで次節では、1871 年～1960 年の期間を対象収録作品数が多い『青空文庫』を用いて、前後約 90 年間における「～（さ）せていただく」の使用状況を、用例を挙げながら年代別、用法別に考察することにした。

4.2 『青空文庫』を用いた使用状況の考察

4.2.1 『青空文庫』の概要及び本調査の方法

『青空文庫』（<https://www.aozora.gr.jp/>）は、著作権が消滅した作品や著者が許諾した作品のテキストを公開しているインターネット上の電子図書館である。収録数は 16,369 作品⁶であり、そのうち明治期から昭和初期の作品がその大部分を占めているため、本調査で設定した考察時期（1870 年～1960 年）とほぼ重なっている。

用例検索にあたっては、国立国語研究所が開発した全文検索システム「ひまわり」を用いた。検索結果のうち、本調査の考察時期に属しない用例や、「～（さ）せていただく」

⁶ このデータ数は 2021 年 1 月 21 日時点のものであり、筆者が実際に用例収集を行った 2019 年 4 月時点での収録作品数と異なる可能性がある。

の用例に該当しないもの（「見せていただく」、「寄せていただく」など）は除外した。その結果、本調査の検討対象となる用例は214例あった。また、1871年～1890年には用例がなかったため、以下では1891年～1900年の用例から考察していく。

4.2.2 1891年～1900年の用例

この時期の「～（さ）せていただく」の用例には以下の2例があった。

(4-1) お上人様、大工はできます、大隅流は童児の時から、後藤立川二ツの流義も合点致しております、させて、五重塔の仕事を私にさせていだきたい、それで参上りました。

（幸田露伴 1892「五重塔」）

(4-2) 吉里は善吉の盃を受け、しばらく考えていたが、やがて快く飲み乾し、「善さん、御返杯ですよ」と、善吉へ猪口を与え、「お酌をさせていただきますね」と、簞笥を放れて酌をした。

（広津柳浪 1896「今戸心中」）

(4-1) では、話し手が寺院の高僧に仕事の許可を求めているため、高僧が事実上の許可者となる。また、文末が願望表現になっているため、この用例は基本用法に該当すると判断される。

(4-2) では、「酌をする」のは「話し手自身のp行為」であるが、相手の許可を求めているように見立てることができる。また、本論文の第3章で提示した恩恵の有無の判断基準によると、この用例は「恩恵なし」に該当するため、用例4-2は拡大用法のタイプⅢに属すると判断される。

4.2.3 1901年～1910年の用例

この時期の「～（さ）せていただく」の用例は以下の1例のみであった。

(4-3) 「嵐山と云えば」と甲野の母は切り出した。「せんだって中は欽吾がまた、いろいろ御厄介になりまして、御蔭様で 方々見物させていただいたと申して大変

喜んでおります。」

(夏目漱石 1907「虞美人草」)

(4-3) では、「見物する」のは話し手自身の判断による行為であるが、聞き手を形式上の許可者として見立てることが可能である。また、この用例では許可の受け手が「見物する」という行為により「喜んでいる」と心理上の満足を得ており、「御陰様」という恩恵を示す文脈もあるため、「恩恵あり」として判断できる。したがって 4-3 は拡大用法のタイプⅡに該当する。

4.2.4 1911 年～1920 年の用例

この時期の「～(さ)せていただく」の用例には以下の 5 例があった。

(4-4) 「突然にこんなことを申し上げてはさだめし鉄面しいやつとおさげすみでもござりましょうが、あなた様が関東へお下りの節……できますことならば

「……………」 「あの、御一緒にお伴をさせていただきとう存じます。」

(中里介山 1915「大菩薩峠」)

(4-5) 「はじめまして。私は□□□(ママ)の姉でございます。二三日 お邪魔をさせていただきます。」

(中勘助 1915「銀の匙」)

(4-6) それがお牢にはいってからは、仕事をせずに食べさせていただきます。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしているようでなりませぬ。

(森鷗外 1916「高瀬舟」)

(4-7) けれども、もしわたくしにも、その、先生方のおしになる 批評と申すのを一つ言わせていただきますと、その深井というのが自分の本意でない役を演じながら、それを子供に見せておいたのははなはだしい間違いだと思われませんが—？」

(岩野泡鳴 1918「猫八」)

(4-8) どちら様にも義理が立ちませんから、薄情でもきょうかぎりこのお話には 手をひかせていただきます。

(有島武郎 1919『或る女』)

用例(4-4)では、話し手が聞き手に対して許可を求めており、また文末が願望表現であるため、この用例は基本用法に該当する。用例(4-5)～(4-8)において、「～(さ)せていただく」はいずれも話し手の自らの行為を表すが、(4-5)及び(4-8)では聞き手、(4-6)では「お上」、(4-7)では「先生方」をそれぞれ形式上の許可者として見立てることが可能である。また、恩恵の有無の判断基準によると用例(4-5)～(4-8)のいずれも「恩恵なし」に該当するため、この4例はすべて拡大用法タイプⅢに属する。

4.2.5 1921年～1930年の用例

この時期の「～(さ)せていただく」の用例は合計21例あった。その一部を例として挙げる。

(4-9) そしてスケッチする許を求めた。「おかまいなければ、一寸形だけ 書かせていただけますまいか。描いて置いて思い出した時見なおすと愉快的なものです。」

(宮本百合子 1924「伊太利亜の古陶」)

(4-10) 「いや、その前に」

「何であるか、申されてみるがよい」

「当江戸城のお庭を 拝見させていただきたいのですが。」

(吉川英治 1927「江戸三国志」)

(4-11) 「手前は、ただいまお出なすった店の若い者でございますが、お渡し申した金子に間違いがあるようですから、ちょいと 拝見させていただきたい。」

(林不忘 1927「丹下左膳」)

(4-12) 「あなたはこれから町の方へお帰りでございますか。」

「はあ。これから家へ帰ります。」

「では、御一緒に お供させていただきますまいか。わたくしも町の方まで参りたいのですが。」

(岡本綺堂 1924「水鬼」)

(4-13) 「私は家へ帰つて、綺麗な着物を染めて貰つて、賑やかな紫色のお嫁さんにならうかと、しつとりと考へます。何がこんなに嬉しいのでございませう。それから私は五月蠅くなく、あなたのお傍にいつて 居させていただきます。…あなたのやうな好い方にお逢ひ出来るものとは、いままでつゆ考へられませんでした。」

(横光利一 1927「火の点いた煙草」)

(4-14) 「時刻も遅いからお泊りなさい今夜は。」

「ありがとうございます 帰らせていただきます。」

(有島武郎 1923「親子」)

(4-15) 「閣下、お待たせを致しました。ほんとに立派な牛飼人ですな。ええと、所で、こう沢山警手の居る必要はございません。二人だけ此処へ残して置いて後は 引き取らせていただきます。」

(国枝史郎 1922「闘牛」)

(4-16) 十時が鳴つた。彼は一時間の間、火鉢と炭籠の高さばかりを計りながら黙つてゐた。

「では、私、失礼させていただきます。」と彼女は云つた。

彼女は立ち上ると白いショールを忘れて出ようとした。

(横光利一 1927「火の点いた煙草」)

(4-17) ——とにかく寝せつけて、

「おりんも、休ませていただきます。」

と、彼女が月江の部屋をそッとさがってきたのは、庭から影をひそめて、なお半刻も後あとのことでありました。

用例(4-9)～(4-12)において、「～(さ)せていただく」の使用はいずれも許可要求の意を表しており、聞き手が事実上の許可者となる。また、この4例の文末はすべて願望表現になっており、本研究の判断基準では「恩恵あり」となるため、いずれも基本用法に合致する使用である。

用例(4-13)では、「あなたのお傍にいつて居させていただく」は許可を求める表現ではなく、話し手の行為遂行宣言であり、「あなた」に許可を求めているように見立てることができる。ただ本例では、話し手と形式上の許可者である「あなた」とは恋愛関係にあるうえ、文脈には「あなたのやうな好い方にお逢ひ出来るものとは、いままでつゆ考へられませんでございました」や「何がこんなに嬉しいのでございませう」などといった話し手の感情表現もあるため、「あなたのお傍にいつて居させていただく」という行為の遂行が話し手に精神上的の愉悦・満足をもたらす。したがって(4-13)は拡大用法のタイプⅡに属する。

用例(4-14)～(4-17)において、「帰る」「引き取る」「失礼する」「休む」はいずれも話し自身の行為であるが、(4-15)では「閣下」、それ以外の用例では聞き手を形式上の許可者と見なすことが可能である。ただ、その行為遂行により、話し手が何かが得られることや、話し手に好都合な事態が生じることは文脈上読み取れないため、「恩恵なし」と判断できる。したがってこの4例は拡大用法のタイプⅢに該当する。

4.2.6 1931年～1940年の用例

『青空文庫』では、この時期の「～(さ)せていただく」の用例は合計69例あった。その一部を例として挙げる。

(4-18) 「そりゃ好都合です」と帆村探偵が叫んだ。「すぐに、私を参加させていただきますのですが」

西郷理学士は承諾して、卓上電話機を方々へかけていたが、やっとのことで、搜索隊がこれから爬虫館の方へ移ろうというところだと解ったので、その方へ帆村を案内して呉れることになった。

(4-19) さてそこで、一段と声を落して、かう言つた。

「就きましては、退院の支度があるものですから、二十円 拝借させていただきました
く存じます。厚かましいお願いですが、いはば只今の予言代といふことにして—
何十倍も儲かりますよ。フッフッフッフ」

(坂口安吾 1940「盗まれた手紙の話」)

(4-20) 「こちらの我儘は許していただけるものとして、ほんの希望だけを申し上げれば、わたくしは寧ろ、宣伝部の一員でけっこうでございます。それも補助部員といふ資格で 働かせていただければ うれしいと存じます。さうすればきつと、自分でなにかお役に立つやうな仕事を作りだせるだらうといふ自信がございます…」

(岸田国土 1940『泉』)

(4-21) 「しかし、とにかく、こんな遠いところへ、わざわざよく来てくださいました。館長に代つてお礼を申します」

「や、どうも……いろいろありがたうございました。たいへん有益な 見学をさせ

ていただきまして、一同この上もなく満足いたしてをります」

(岸田国土 1940『泉』)

(4-22) 「へえ、お久しぶりでござえます。お変わりもなくってと申し上げてえが、何だか、どこかおからだがいけねえそうで—実は、ちよいとそのことを伺ったものですから、夜分ながら出向きやした。お目にかからせていただいて、ありがとう存じます」

(三上於菟吉 1934「雪之丞変化」)

(4-23) 「…すこし言いすぎました。おゆるし下さい。たいへんの失言でございました。取消させていただきます。…」

(太宰治 1936「喝采」)

(4-24) 老人が、急に、口を切った。

「とつぜんですが、私を紹介させていただきます」

(久生十蘭 1939「墓地展望亭」)

(4-25) 「いらっしゃるのだったら、あたしも おともさせていただきますわ」

(平林初之輔 1932「謎の女」)

(4-26) 「…今宵、第一番の語り手たる 光栄を得させていただきます。…」

(太宰治 1936「喝采」)

用例(4-18)～(4-20)における「～(さ)せていただく」の使用は、いずれも許可を求めることを表しており、「話し手」が事実上の許可者となる。また、この3例の文末はすべて願望表現であり、加えて(4-18)では「そりゃ好都合です」、(4-20)では「希望を申し上げれば」「(そうさせていただければ)うれしいと存じます」などの恩恵を示す表現があるため、(4-18)～(4-20)は基本用法に合致する用例であると判断できる。

用例(4-21)及び(4-22)では、事実上の許可の存在は確認できないが、いずれの用例においても話し手の行為を聞き手の許可の下で行われたように見立てることができる。また、(4-21)では「大変有益な見学」「この上なく満足している」、(4-22)では「ありがとう存じます」といった恩恵表現があるため、この2例は拡大用法のタイプⅡに該当する。

用例(4-23)～(4-25)では、いずれも事実上の許可がなく、話し手の一方的な決定または行動を表している。また、その行為遂行に伴う恩恵の存在はいずれの用例でも確認できないため、この3例は拡大用法のタイプⅢに該当する。

(4-26)の「光栄を得させていただく」では、「光栄を得る」ということを誰かの許可の下で行われるように見立てるのは無理がある。それは、「光栄を得る」というのは客観的な事実であり、誰かからの許可が必要な行動ではないためである。例えば、「帰る」という行為を遂行する前に、普通は「帰っていいの？」などの一言で、相手の許可または合意を得る必要がある。たとえそのことが話し手の一方的な決定であっても、「帰るよ」などとその行為遂行を相手に伝達するのが一般的であり、黙って帰ることは稀である。そのため「帰らせていただく」では、話し手の行為遂行を相手の許可の下で行われるように見立てることは無理なくできるが、「光栄をえる」ことには許可の必要がないため、「光栄

を得させていただく」には形式上の許可者の存在も考えにくく、ここは菊地（1997b）及び井上（1999）が述べたように、謙譲語B的な用法にあたる。ただ、「光栄を得る」ことは、第3章で述べた「皇族と付き合う」ことと同じように、動作主体にとっては一種の「名誉」であり、精神上の満足が得られるため「恩恵」として捉えられる。したがって、用例（4-26）は拡大用法のタイプIVに該当すると判断される。

4.2.7 1941年～1950年の用例

この時期の「～（さ）させていただく」の用例は合計73例あった。その一部を例として挙げる。

（4-27）「失礼ですが、こちらに御秘蔵の書画を、拝見させていただきましょうか」

（坂口安吾 1950「街はふるさと」）

（4-28）新十郎はあきらめて、

「では、妹御に お目にかからせていただきたい ものですが、よろしいか」

「それは妹の自由です」

（坂口安吾 1950「明治開化 安吾捕物」）

（4-29）「…ここいらで、ちょっと 休憩させていただきませんか ？」と博士は、座長格のトウリア君を顧みて微笑んだ。

（橋外男 1947「ユニデス潮流の彼方」）

（4-30）…これを機に、大矢主任は懇談会を中止することにした。

「いろいろと話を うかがわせていただいて、ありがとうございました。…」

（坂口安吾 1949「復員殺人事件」）

（4-31）「このお店は今まで休業ですか」

「いいえ、私自身の開店記念日。大庭先生を 招待させていただく のは、身にあ

ま

る光栄でございます」

(坂口安吾 1950「街はふるさと」)

(4-32) 彼女は半ばその半白の髭の人に向い、半ばその席に*いあわせる*すべての人に向って、

「ちょっと、ひとこと 追加させていただきます」

椅子にかけたまま、にぎりあわせた両手をテーブルの上において云い足した。

(宮本百合子 1947『道標』)

(4-33) 「…でも、つまらないや、お母さんが死んでしまったから。僕の手書いたものが本になっても誰にも喜んでもらえないもの。」

「そんなことはありませんわ。お婆さんの代りに私が 読ませていただきますわ。」

(小山清 1949「前途なお」)

(4-34) 友松は、膳の前を離れた。

「思わず長座しました。上方の武辺と聞いては、事面倒、お尋ね者は、逃げ出すとしましょう。……ああよい半日を 過ごさせていただいた」

「まあ、よいではございませぬか」

「いやいや、ほろりと、よい頃、夜梅を見ながら寝に帰ります」

(吉川英治 1948『新書太閤記』)

(4-35) 「一生涯忘れることのできない、ころよい一週間を 過ごさせていただきました。」

(岸田国士 1950「放浪者」)

用例(4-27)～(4-29)は、いずれも許可を求める表現であり、聞き手が事実上の許可者になっている。また、この3例の文末はすべて願望表現であり、本研究の判断基準では「恩恵あり」と判定されるため、(4-27)～(4-29)は基本用法に該当する。

用例(4-30)及び(4-31)では、事実上の許可行為が存在せず、「話をうかがう」「招待する」は話し手の自分自身の行為であるが、いずれも聞き手の許可の下で行われた行為

と見なしても問題はない。また、(4-30)では「ありがとうございました」、(4-31)では「身にあまる光栄」といった恩恵表現があるため、この2例は拡大用法のタイプⅡに属する。

用例(4-32)及び(4-33)は宣言的な用法であり、事実上の許可行為は存在しないが、いずれの用例においても聞き手を許可者として見立てることが可能である。また、明確な恩恵性を示す文脈はいずれの用例でも確認できないため、この2例は拡大用法のタイプⅢに該当すると判断できる。

(4-34)及び(4-35)の「過ごす」は、前項で触れた「光栄を得る」と同じような、他人に許可を求める必要のない行為であり、また「〇〇さんのおかげで楽しい一日を過ごさせていただきました」のような文脈がない限り、その行為を誰かの許可の下で行われるように見立てることも難しい。(4-34)及び(4-35)ではそのような文脈が存在しないため、(4-26)と同じく謙譲語B的な用法であると思われる。また、いずれの用例でも「よい」「こころよい」などの恩恵表現があるため、「恩恵あり」と判断でき、(4-34)及び(4-35)は、拡大用法のタイプⅣに該当する。

4.2.8 1951年～1960年の用例

この時期の「～(さ)せていただく」の用例が合計43例あった。その一部を例として挙げる。

(4-36) 「…そのまえに、わたくしの発明について、ちょっと 自慢話をさせていた
だきたいのですが……」

「それはぼくも望むところですよ。…」

(江戸川乱歩 1955「影男」)

(4-37) なまじ家にブラブラしているのがいけないと思ったので、お源やお米の許可を得て一力丸の親方を訪ね、「私もヒマな身体で毎日ブラブラしていても仕方がありませんから、漁師の手伝いでもさせていた
だきたいものですが」と頼むと…

(坂口安吾 1951『明治開化 安吾捕物』)

(4-38) 「…実はあまり香しい話ではありませんが、若干おもしろいところもありますので、新年そうそう皆さんの お耳を汚させていただきます。…」

(坂口安吾 1954「餅のタタリ」)

(4-39) 車が勾配にさしかかった頃おいに、二人ばかりの税関吏が、扉をノックしてきた。

「国境税関です、お荷物を、検査させていただきます」

(橘外男 1954「グリュックスブルグ王室異聞」)

(4-40) だるまやは、儲けるばかりが眼目ではない。皆が一つ家族の心持で、娘と親の心持で、苦しさも喜びもともにわけ、働くことを学び、社会に 奉仕させていただく のが眼目であるというので、…

(宮本百合子 1951「だるまや百貨店」)

用例 (4-36)、(4-37) の「～(さ) せていただく」は、いずれも許可を求めるための使用であり、事実上の許可が存在するうえ、文末も願望表現になっており、本研究の判断基準では「恩恵あり」と判定されるため、この2例は基本用法に該当する。

用例 (4-38)、(4-39) において、「～(さ) せていただく」は話し手自身の行為を宣言するために使用されており、事実上の許可は存在しないが、いずれも聞き手を形式上の許可者と見なすことが可能である。また、その行為遂行により、話し手が何かを得られることや、話し手に好都合な事態が生じることを文脈からは読み取れず、恩恵性が感じられないため、この2例は拡大用法のタイプⅢに該当する。

(4-40) では、「社会に奉仕する」のが話し手自身の判断による行為であり、事実上の許可は存在しない。また、文脈では形式上の許可者の存在も確認できず、「社会に奉仕する」ことを誰かの許可の下で行われる行為として見立てることも困難である。したがってこの「～(さ) せていただく」は謙譲語B的な使用に該当する。さらに、(4-40) では恩恵を示す文脈も存在しないため、この用例は「許可」「恩恵」の2要素が欠落した拡大用法タイプⅤに該当する。

4.3 まとめ及び本章の結論

以上、『青空文庫』を用いて、1870 年～1960 年の 90 年間における「～（さ）せていただく」の使用状況を実例を挙げながら考察した。表 4-2 では、「～（さ）せていただく」の各用法の使用回数を年代別にまとめる。

表 4-2 『青空文庫』における「～（さ）せていただく」の各用法の使用回数（年代別）

	基本 用法	拡大用法					合計
		I	II	III	IV	V	
1871-1880	0	0	0	0	0	0	0
1881-1890	0	0	0	0	0	0	0
1891-1900	1	0	0	1	0	0	2
1901-1910	0	0	1	0	0	0	1
1911-1920	1	0	0	4	0	0	5
1921-1930	5	0	2	14	0	0	21
1931-1940	21	0	8	39	1	0	69
1941-1950	13	0	6	52	2	0	73
1951-1960	4	0	7	31	0	1	43
合計	45	0	24	141	3	1	214

まず、各用法の出現する時期については、本章第 1 節で述べたように、現在判明した「～（さ）せていただく」の最古の用例は 1871 年のものであるが、『青空文庫』ではその後、1890 年まで使用例が見られず、1892 年に初めて使用例が出現した。

また、用法別に見ると、基本用法及び拡大用法タイプⅢの用例は 1891 年～1900 年の間に出現し、すべての用法では最も早い。拡大用法タイプⅡの用例は 1901～1910 年の間に初めて確認され、こちらも比較的早い。それに対して拡大用法タイプⅣ及びタイプⅤの用例の初出がそれぞれ 1940 年代と 1950 年代であり、比較的に新しい用法であるといえる。

次に、各用法の使用回数を見てみる。ここで注目したいのは、基本用法と拡大用法タイプⅢの使用回数である。1891 年～1960 年の約 70 年間に於いて、基本用法の総用例数は

45 例であるのに対して、拡大用法Ⅲの総用例数は 141 例であると、基本用法の 3 倍以上である。年代別の使用回数を見ても、両用法が初めて出現した 1890 年代を除き、拡大用法Ⅲの用例数は常に基本用法を上回っている。なお、基本用法とタイプⅢの総用例数は、全用例数の 8 割以上を占める。

先行研究（菊地 1997b、椎名 2018 など）では、「～（さ）せていただく」の基本用法が縮小し、それに対して拡大用法、特に自己宣言する用法が主流になりつつあるという議論が散見されるが、『青空文庫』を用いた考察の結果を見る限り、1930 年代以後、基本用法の使用頻度が減少に転じたため、「～（さ）せていただく」の機能に変化が生じたのは近年ではなく、1930 年頃であるという推論も成り立つ。また、自己宣言に当たる拡大用法タイプⅡ、Ⅲは明治中後期に現れ、その後の使用の歴史も長いことや、拡大用法タイプⅢの総用例数は基本用法を大幅に上回っていること、さらに基本用法と拡大用法タイプⅢの総用例数が全用例数の 8 割以上を占めることから、本研究では、拡大用法タイプⅢが現れた 1890 年代頃から、基本用法と拡大用法タイプⅢが「～（さ）せていただく」の用法の 2 本柱になっていると捉えた方が妥当であると考ええる。

そこで、上述した使用状況の変化が「～（さ）せていただく」の社会的容認度にどのような影響を与えているのかを次の第 5 章で考察する。

第5章 「～（さ）せていただく」の社会的容認状況について

第1章で指摘したように、「～（さ）せていただく」の各用法の内、どこまでが許容範囲内かは研究者によって見解が分かれており、「正しい用法」と「誤った」用法の境界は未だに不分明である。また、拡大用法について、その使用を容認する論述（菊地 1997a、米澤 2001）と非容認的な論述（滝浦 2016）が併存している。母語話者における「容認度」（菊池 1997b、岡垣 2015）のこのような不統一は、外国人日本語学習者の運用面にも少なからず影響を及ぼす恐れがあるため、「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度を明らかにすることには大きな意義があるものと思われる。

本章では、「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度について調査した先行研究を概観したうえで、アンケート調査によって、2020年時点の「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度を検討する。また、「～（さ）せていただく」の社会的容認度がどのような要素に影響されるかについても考察する。

5.1 「～（さ）せていただく」の社会的容認状況に関する先行研究

5.1.1 先行研究の調査方法及び結果

先行研究の中で、「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度について調査を行ったものには菊地（1997b）、岡垣（2015）、高橋・東泉（2018）などがある。

菊地(同上)は、「～（さ）せていただく」表現について社会人103名（20代21名、30代18名、40代45名、50以上19名）を対象に、7つの例文の是非を○×式で問う形式のアンケート調査を実施した。アンケートに使用された質問文及びその類型を以下に示す⁷。

⁷（Ⅰ）～（Ⅳ）の類型は、本論文2.1.1で提示した菊地（1997b）の分類によるものである。

類型（Ⅰ）

- 1)（学生が教師に）すみませんが、先生の本を使わせていただけないでしょうか。

類型（Ⅱ）

- 2)（パーティーの出欠の返事で）出席させていただきます。
3)（結婚式で媒酌人が）媒酌人として一言ご挨拶させていただきます。

類型（Ⅲ）

- 4)（結婚式での、新郎の友人のスピーチ）新郎とは十年来のおつきあいをさせていただいております。
5)（同、新婦の友人のスピーチ）私は新婦と三年間一緒にテニスをさせていただいた田中と申します。

類型（Ⅳ）

- 6)（近所の人に）私どもは、休日はハワイで過ごさせていただきます。
7)（セールスマンが客に）新製品を開発させていただきます。

また、質問ごとの回答状況を表 5-1 に示す。

表 5-1 菊地（1997b）の調査結果（p. 41 より）

質問番号	類型	回答者数	
		○	×
1)	Ⅰ	90	10
2)	Ⅱ	86	13
3)		78	21
4)	Ⅲ	58	37
5)		40	50
6)	Ⅳ	17	76
7)		5	93

表 5 - 1 の通り、1) > 2) > 3) > 4) > 5) > 6) > 7) の順に「○」と回答した者の割合が多かったという傾向が見られた。また、類型Ⅰ、Ⅱにおいて、「○」と回答したものの割合はいずれも 70%を超えるが、質問 4) では認否の差が縮まり、質問 5) 、6) 、7) では、「×」と回答した者の割合が「○」を上回る結果となっている。

岡垣 (2015) は、菊地 (同上) の質問文及び類型をそのまま使用し、日本語母語話者 106 名 (10 代 17 名、20 代 32 名、30 代 10 名、40 代 18 名、50 代 17 名、60 代以上 12 名) を対象に「～(さ)せていただく」表現に対する意識調査を、菊地 (同上) と同様の方式で行った。その結果、ほとんどの年齢層で「○」と回答した者の割合が 3) > 1) > 2) > 5) > 4) > 7) > 6) の順に多いという結果となった⁸。中でも、(6) 、(7) の容認度が最も低く、(4) 、(5) もそれに次いで低かった。この結果は菊池 (同上) の結論と大部分が一致しているが、事実上の許可行為が存在しない用例 (3) の容認度が基本用法に当たる用例 (1) の容認度を上回る点については菊池 (同上) の調査結果との相違が顕著であった。

高橋・東泉 (2018) は、「～(さ)せていただく」を用いた文の容認度について、452 名を対象にアンケート調査を行った。調査方法は、菊地 (同上) や「敬語の指針」(2007) から採集した A～H の 8 つの例文に対して、対象者に「適切と思う」「違和感がある」のどちらかを回答させるものであった (用法の分類は菊地 (同上) に拠っている)。質問文及び回答状況の詳細を表 5-2 に示す。

表 5-2 高橋・東泉 (2018) の調査結果 (p. 48 より)

類 型	質問文		「適切と思う」 の回答者の割合
Ⅰ	A	(学生が教師に) すみませんが、先生の本を使わせていただけないでしょうか。	74%
	B	(相手の持っている本をコピーしたいとき) コピーを取らせていただけますか。	65%

⁸ ただし、具体的にどれらの年齢層がこの結果に当てはまるのかは、岡垣 (2015) では明言されていない。

Ⅱ	C	（パーティーの出欠の返事で）出席させていただきます。	77%
	D	（発表の冒頭で）それでは、発表させていただきます。	72%
	E	（店の休業を知らせる張り紙）本日、休業させていただきます。	81%
Ⅲ	F	（カラオケでいきなり）それでは歌わせていただきます。	67%
Ⅳ	G	（近所の人に）私どもは、正月はハワイで過ごさせていただきます。	23%
	H	（自己紹介で）私は、〇〇高校を卒業させていただきました。	11%

高橋・東泉（同上）の調査結果では、質問文 C、E（用法（Ⅱ））に対する容認度がそれぞれ 77%と 81%と高く、基本用法に当たる質問文 A の 74%を上回った。また、質問文 D（用法（Ⅱ））の容認度も、基本用法に相当する質問文 B の容認度を上回る。用法（Ⅲ）に当たる質問文 F の容認度は基本用法に続いて高いが、用法（Ⅳ）に相当する質問文 G と H の容認度は急激に下がり、いずれも 20%台以下にとどまる。この結果は、岡垣（同上）と同じ傾向を示すものと思われる。

5.1.2 先行研究の問題点及び本調査の目的

前項では、先行研究の「～（さ）せていただく」の社会的容認度についての調査結果に年代の違いによる差が生じていることが示唆されていた。調査時点の近い岡垣及び高橋・東泉の調査では似たような傾向が見られたことから、菊池が調査を行った 1990 年代とそれ以降では、「～（さ）せていただく」の容認度に変化が生じた可能性が考えられる。

また、容認度の数値を見ると、菊池が調査を行った 1997 年時点では、類型（Ⅰ）、（Ⅱ）の容認度がそれぞれ 90%、82.8%と高かった一方、高橋・東泉（同上）では両類型の容認度がそれぞれ 69.5%、76.7%と低下傾向にあり、特に基本用法において容認度の下落が目立つ。このことから、社会的に基本用法を含む「～（さ）せていただく」の使用への容認度が低下している傾向を示唆している。

これらの3研究では、「～（さ）せていただく」の用法について、菊池（1997b）の分類を採用しているが、この分類には、恩恵と許可の違いが明らかにされていないという問題点があることは既に第3章で指摘している。そのため、恩恵または許可の有無による容認度の変化が確認できないという難点がある。また回答者の属性について、岡垣（同上）及び高橋・東泉（同上）では年齢による容認度の差を考察しているが、性別による容認度の差異を比較した研究はこれまでには見られなかった。そこで本研究では、第3章で述べた要素による分類を用いて調査文を作成し、用法別や年齢別以外に、性別や、恩恵と許可の有無などの要因が「～（さ）せていただく」の容認度にどのような影響を与えるのかについても検討する。

以上のことを踏まえ、本調査では調査目的を以下の2点とする。

- 1) 2020年時点の「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度を明らかにし、先行研究の調査結果と比較する。
- 2) 容認度に影響を及ぼす要因について検討する。

5.2 「～（さ）せていただく」の社会的容認度についての調査

5.2.1 調査の概要

本調査は2019年12月から2020年3月にかけて、計82名の日本語母語話者を対象者に実施した。調査対象者の詳細は表5-3の通りである。なお、年齢層は高橋・東泉（2018）に倣い、若年層（10・20代）と中高年層（30～80代以上）に分ける。

表5-3 調査協力者の属性

	若年層	中高年層	計	%
男性	26人	18人	44人	54%
女性	11人	27人	38人	46%
計	37人	45人	82人	100%
%	45%	55%	100%	

第3章で提示した要素による分類に従い、基本用法とⅠ～Ⅴまでの拡大用法の下に質問文をそれぞれ2～4文、計14文⁹を設けた。質問文には先行研究の調査結果の検証を念頭に、極力先行研究の質問文を使用した¹⁰が、分類によっては部分的に、『青空文庫』及びBCCWJから採集した用例を加えた¹¹。

回答は、中間値を排除するため、6段階評価法（「0＝極めて不自然な言い方」、「1＝不自然な言い方」、「2＝やや不自然な言い方」、「3＝まあまあ自然な言い方」、「4＝自然な言い方」、「5＝極めて自然な言い方」）を採用した¹²。

本調査のアンケート用紙を以下に示す¹²。

アンケート質問票

() 内の場面状況で、①～⑭の例文の「～(さ)せていただく」の使用は、下記の0～5までのどれに該当しますか？回答欄に書いてください。 0＝極めて不自然な言い方 1＝不自然な言い方 2＝やや不自然な言い方 3＝まあまあ自然な言い方 4＝自然な言い方 5＝極めて自然な言い方		
類 型	例文	回答欄 (0～5の数字を入れてください)
基 本	① (学生が教師に) 先生の本を <u>使わせていただけないでしょうか。</u>	
基 本	② (教師の持っている本をコピーしたいとき) コピーを <u>取らせていただけますか。</u>	
Ⅱ	③ (遊園地で遊んだ後)	

⁹ 本調査を行った2019年12月までに、拡大用法のタイプⅠ（事実上の許可が存在する＋恩恵性が確認できない場合）に当たる用例はコーパスなどで見当たらなかったため、拡大用法のタイプⅠを調査対象から除外することにした。

¹⁰ 質問文①、②、⑤、⑦、⑧、⑬、⑭は先行研究の調査でも使用された例文である。例文③、⑥、⑨、⑩、⑪、⑫はBCCWJ、例文④は『青空文庫』から採集した。

¹¹ 中間値を排除した理由は、「自然度判定の調査の特徴から、「分からない」という形で回答を放棄する可能性が考えられ、中立的な選択肢の存在はその傾向を強める恐れがある」とした斎藤（2015）に拠った。

¹² ここでは参考のために各質問文の類型を記載しているが、調査協力者に配布した調査票には類型の記載はない。

	〇〇さんのおかげで <u>楽しい一日を過ごさせていただきました。</u>	
II	④（助手が教授に） 教授のお傍で、こんな楽しい <u>仕事をさせていただける</u> ことは、私にとって願ってもないことです。	
III	⑤（パーティーの出欠の返事として） <u>出席させていただきます。</u>	
III	⑥（学術発表中に） ここは図を提示するだけで説明は <u>省略させていただきます。</u>	
III	⑦（店の休業を知らせる張り紙） 本日、 <u>休業とさせていただきます。</u>	
III	⑧（授業中の発表の冒頭で） それでは <u>発表させていただきます。</u>	
IV	⑨（日記に書く） 大雨に降られ、大きな木の下で <u>雨宿りをさせていただいた。</u> おかげで濡れずに済んだ。	
IV	⑩（オークションサイトについての感想をネット上書き込む） 私は出品、落札共にいつも <u>楽しませていただいています。</u>	
V	⑪（会社の同僚に） 休暇中は <u>海外旅行をさせていただきました。</u>	
V	⑫（自分について話している） それで都立の教育研究所に <u>行かせていただいて</u> 障がい児の勉強をし、そのあと戻ってから障がい児学級の担任になりました。	
V	⑬（近所の人に） 正月はハワイで <u>過ごさせていただきます。</u>	
V	⑭（自己紹介で） 私は〇〇中学校を卒業させていただきました。	

5.2.2 調査結果

各質問に対する若年層の回答状況を表 5-4、中高年層の回答状況を表 5-5 にそれぞれ示す。

表 5-4 若年層の回答状況

質問 番号	各選択肢の回答者数											
	0		1		2		3		4		5	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
①	2	1	1	0	2	0	6	1	10	8	5	1
②	1	0	3	1	6	1	3	1	8	7	5	1
③	1	1	3	2	8	4	2	2	10	1	2	1
④	0	0	2	0	2	1	4	2	10	6	8	2
⑤	0	0	1	1	1	1	4	1	7	1	13	7
⑥	0	0	0	0	2	0	3	1	10	3	11	7
⑦	0	0	0	0	1	0	1	3	13	3	11	5
⑧	0	0	2	0	1	2	9	4	7	2	7	3
⑨	9	4	11	5	1	1	2	0	2	1	1	0
⑩	2	0	3	3	9	3	6	3	5	1	1	1
⑪	3	1	12	4	3	5	6	1	1	0	1	0
⑫	2	0	6	3	8	2	3	3	5	3	2	0
⑬	3	1	7	6	8	4	5	0	3	0	0	0
⑭	5	2	9	8	9	1	1	0	1	0	1	0

表 5-5 中高年層の回答状況

質問 番号	各選択肢の回答者数											
	0		1		2		3		4		5	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
①	0	0	0	0	11	5	4	4	2	9	1	9
②	0	0	4	0	3	0	8	4	2	11	1	12
③	3	1	3	2	5	9	4	6	2	9	1	0

④	0	0	0	4	0	2	5	3	13	13	0	5
⑤	0	0	3	3	0	4	4	5	6	0	5	15
⑥	0	0	0	2	0	1	0	8	12	4	6	12
⑦	0	0	3	6	0	0	0	6	15	6	0	9
⑧	0	0	0	4	0	2	4	2	9	15	5	4
⑨	8	5	7	16	3	4	0	2	0	0	0	0
⑩	1	4	2	5	1	16	8	2	6	0	0	0
⑪	5	11	10	5	1	11	2	0	0	0	0	0
⑫	7	4	2	11	7	10	0	0	2	2	0	0
⑬	8	13	10	8	0	4	0	2	0	0	0	0
⑭	12	21	6	3	0	3	0	0	0	0	0	0

次の3節では、上記の表5-4及び5-5のデータに基づき、用法、年齢、性別などの要素が如何に容認度を影響するのかについて考察する。

5.3 「～（さ）せていただく」の社会的容認度と各要素の関係

本節では、「～（さ）せていただく」の社会的容認度と様々な要素の関連性を考察するが、その前にまず、質問別、用法別に容認度を概観しておきたい。そのため、質問・及び用法ごとの回答の評価値の平均値を算出し¹³、その結果を表5-6に示す。

表5-6 各質問に対する回答の評価値の平均値

類型	質問番号	評価値の平均値	
		質問別平均	用法別平均
基本	①	3.39	3.42
	②	3.45	
Ⅱ	③	2.59	3.13
	④	3.67	
Ⅲ	⑤	3.88	3.87

¹³ここでは、各用法及び類型の総体的な容認度を観察するため、あえて年齢、性別などの要素を考慮せずに計算を行った。性別及び年齢別の考察は後続の4、5項で述べる。

	⑥	4.15	
	⑦	3.83	
	⑧	3.61	
IV	⑨	1.05	1.61
	⑩	2.16	
V	⑪	1.30	1.28
	⑫	1.85	
	⑬	1.17	
	⑭	0.78	

表 5-6 では、社会的容認度の値が、拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴの順に下がっている。基本的な用法に当たる質問①、②の容認度平均は 3.42 である。それに対して拡大用法Ⅲの容認度の平均値は 3.87 である。また、拡大用法Ⅱの容認度も 3.0 台を上回っている。この結果は、基本用法の容認度が最も高かった菊地（同上）の結果とは異なるが、岡垣（同上）及び高橋・東泉（同上）の調査結果とは同様の傾向を示している。

菊地（同上）は、「「させていただく」が謙譲語 A から B へと変わっていく可能性は、（中略）かなりありそうに思われる」と述べており、椎名（2018）も、言い切り型の「させていただきます」の使用が定型化してきたことを指摘している。このような先行研究の指摘に加えて、今回の調査結果でも、「先生の本を使わせていただけないでしょうか」のような許可を要求する用例よりも、「出席させていただきます」「発表させていただきます」など一方的な行動を宣言する用法の方に容認度が高い傾向が示されており、「～（さ）せていただく」は、基本の「許可を求める」用法から話し手自身の行為を伝達・宣言する用法へと、機能面で重点が入れ替わっているものと思われる。

5.3.1 年齢による容認度の差

本項では、年齢による各用法の容認度の差を考察するため、各質問に対する若年層と中高年層の回答結果に t 検定を実施した。その結果を表 5 - 7 に示す。なお、ここでは、t 検定の結果の内、年齢差の有無の判断に必要な有意確率のみを掲載する¹⁴。

表 5 - 7 質問ごとの t 検定の結果（年齢別）

質問 番号	評価値の平均値		年齢差の 有意確率
	若年層	中高年層	
①	3.46	3.33	0.656
②	3.24	3.62	0.193
③	2.7	2.49	0.473
④	3.78	3.58	0.392
⑤	4.14	3.67	0.120
⑥	4.38	4.04	0.128
⑦	4.27	3.47	0.002
⑧	3.68	3.71	0.888
⑨	1.22	0.96	0.272
⑩	2.54	2.11	0.114
⑪	1.7	1.00	0.002
⑫	2.46	1.40	0.000
⑬	1.73	0.71	0.000
⑭	1.32	0.33	0.000

表 5 - 7 から分かるように、質問⑦⑪は 1%水準、質問⑫～⑭は 0.1%水準で有意差が認められた。それ以外の質問には年齢による有意差が認められなかった。このことは、拡大用法タイプⅢに当たる質問⑦及び拡大用法タイプⅤで、若年層が中高年層より「自然な表現」として捉えていると言える。この結果は、高橋・東泉（同上）の調査と一致している。ただし、高橋・東泉（同上）では基本用法に当たる質問①にも有意差が認められ、

¹⁴ 質問⑤、⑦、⑨、⑭の分析結果について、等分散性の検定では「2 群の分散は等しくない」との結果が出たため「等分散を仮定しない」方の有意確率を掲げた。それ以外の質問については「等分散を仮定する」方の有意確率を掲載した。

「先生の本を使わせていただけないでしょうか」という表現に対する若年層の容認度が中高年層を上回る結果であったが、本調査では有意差が認められなかった。

高橋・東泉（同上）では、拡大用法Ⅴについて若年層の容認度が中高年層を上回る理由については触れていないが、本調査では若年層と中高年層の間に明らかな差が確認されている。この用法は許可、恩恵の2要素が欠落した、基本用法と最も乖離している用法であり、出現した時期も遅い比較的新しい用法であることから、年齢層による容認度の違いが現れたものと思われる。

5.3.2 性別による容認度の差

本項では、性別による各用法の容認度の差を考察するため、各質問に対する男性と女性の回答結果にt検定を実施した。その結果を表5-8に示す。なお、ここでは、t検定の結果の内、男女差の有無の判断に必要な有意確率のみを掲げる¹⁵。

表5-8 質問ごとのt検定の結果（男女別）

質問 番号	評価値の平均値		男女差の 有意確率
	男性	女性	
①	3.07	3.76	0.012
②	2.91	4.08	0.000
③	2.57	2.61	0.901
④	3.75	3.58	0.477
⑤	3.91	3.84	0.827
⑥	4.23	4.05	0.434
⑦	3.98	3.66	0.246
⑧	3.8	3.50	0.238
⑨	1.02	1.08	0.815
⑩	2.64	1.84	0.003
⑪	1.43	1.16	0.252

¹⁵質問②、⑤、⑥、⑦、⑩の分析結果に関して、等分散性の検定では「2群の分散は等しくない」との結果が出たため「等分散を仮定しない」方の有意確率を掲載した。それ以外の質問に関しては「等分散を仮定する」方の有意確率を掲載した。

⑫	1.93	1.76	0.571
⑬	1.68	1.39	0.240
⑭	1.02	0.50	0.015

表5-8から分かるように、基本用法に当たる質問①及び拡大用法Ⅴに当たる⑭は5%水準、質問②及び⑩は1%水準で有意差が認められた。それ以外の質問では性別による有意差が認められなかった。このことから、基本用法については女性が男性より「自然な表現」として考えており、その一方拡大用法Ⅳ、Ⅴについては、男性が女性より高い容認度を示す傾向であるが窺われた。

ただ、管見では、先行研究には性別による容認度の差を考察したものがなく、本調査の結果から結論を急ぐことは躊躇される。今後、更なる調査・議論が必要であろう。

5.3.3 欠落した要素の数量と容認度との関係

本項では、各用法において、その用法が欠落した要素の数と用法の容認度との関係について考察する。各用法¹⁶に包含されている要素を次の表5-9に再掲する。

表5-9 各用法が欠落した要素の数

用法の種類	許可	恩恵
基本用法	○	○
拡大用法Ⅱ	▲	○
拡大用法Ⅲ	▲	×
拡大用法Ⅳ	×	○
拡大用法Ⅴ	×	×

*○=存在する

▲=存在しないが、存在するとして見立てることができる

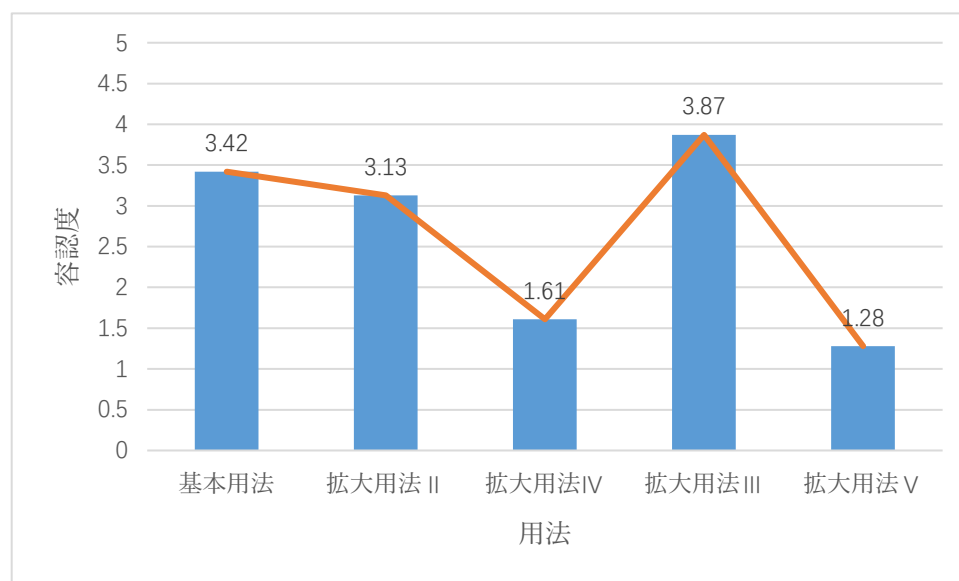
×=存在せず、存在するとして見立てることもできない

¹⁶ 拡大用法Ⅰは本調査の調査対象から除外されたためここでは触れないことにする。

表 5-9 から分かるように、拡大用法Ⅴ＞拡大用法Ⅲ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅱ＞基本用法の順に、欠落した要素の数量が多くなる¹⁷。各用法の容認度示す表 5-6 のデータに基づき、用法の欠落した要素の数量と容認度の関係を次頁の図 5-1 に示す。

菊地（同上）は、欠落した要素の数が増加するにつれて社会的容認度が下がると述べているが、本調査ではそのような傾向が確認できなかった。ただし、拡大用法Ⅱ、Ⅳ、Ⅴでは、欠落した要素の数と社会的容認度の間に何らかの関連が認められるが、拡大用法Ⅲではこの傾向が見られなかった。この要因については、次項で検討する。

図 5-1 欠落した要素の数量と容認度の関係



5.3.4 欠落した要素の種類と容認度との関係

既に述べたように、「～（さ）せていただく」の用法の類型は、「許可」と「恩恵」の2要素の有無によって決まる。本項では、この2要素と容認度との関係について考察す

¹⁷ 「▲」は一つの要素として数えることができないが、許可が完全に欠落した「×」より要素の数量が多いとして捉える。

る。ここでは、「許可あり」「許可なし」並びに「恩恵あり」「恩恵なし」を基準に「～（さ）せていただく」の用法を整理し、表 5-10 及び 5-11 のようにまとめる¹⁸。

表 5-10

恩恵の有無	用法の種類	容認度
あり	基本用法	3.42
	拡大用法Ⅱ	3.13
	拡大用法Ⅳ	1.61
なし	拡大用法Ⅲ	3.87
	拡大用法Ⅴ	1.28

表 5-11

許可の有無	用法の種類	容認度
あり	基本用法	3.42
	拡大用法Ⅱ	3.13
	拡大用法Ⅲ	3.87
なし	拡大用法Ⅳ	1.61
	拡大用法Ⅴ	1.28

ここではまず、恩恵と容認度の関係を考察するために、表 5-10 に基づき「恩恵あり」と「恩恵なし」の用法の容認度に t 検定を実施した。その結果、「恩恵あり」の用法と「恩恵なし」の用法の容認度には有意な差が認められず、恩恵と容認度との関連性は確認できなかった。

続けて、許可と容認度の関係を考察するために、表 5-11 に基づき「許可あり」と「許可なし」の用法の容認度に t 検定を実施した。その結果、1%水準で有意差が認められ、許可と容認度との関連性が確認できた。このことの理由については次の 6 章で考察することにする。

5.3.5 使用頻度と容認度の関係

本節では、各用法の使用頻度と容認度の関係について考察する。そのために、2 項目の分布状況を図 5-2 に示した。また、使用頻度については前章でも用いた表 4-6 の各用法の用例数のデータを使用した。

図 5-2 使用頻度と容認度の関係

¹⁸ 事実上の許可が存在しないが、存在するとして見立てることができる場合は「許可あり」として見なす。

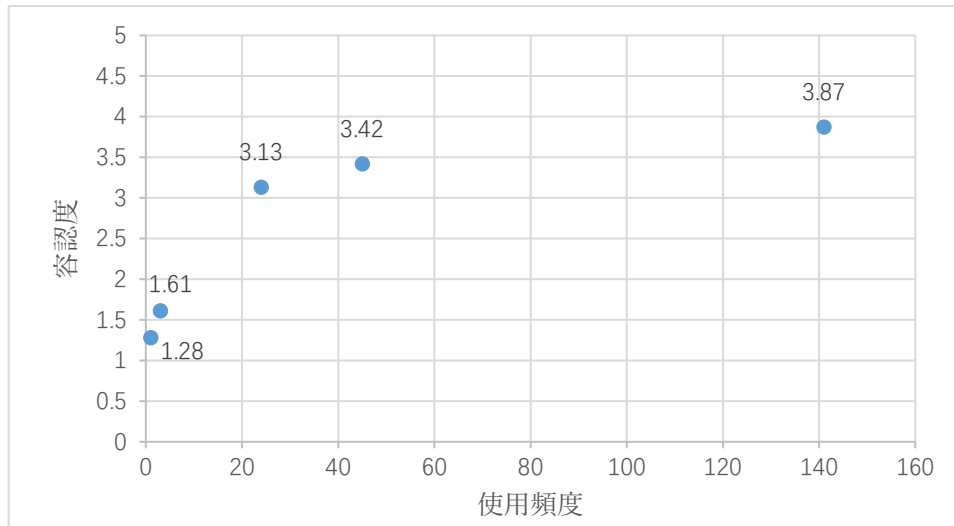


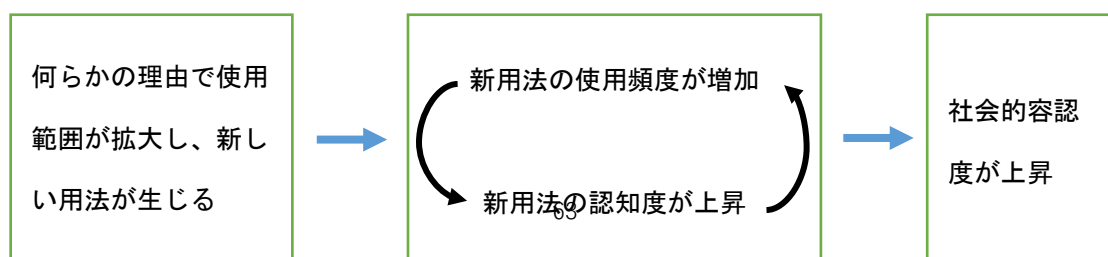
図 5-2 から分かるように、使用頻度と容認度には正の相関性が確認され、使用頻度の高い用法はその容認度も高くなる傾向が見られた。

このことについて筆者は、各用法の社会的容認度の変化には以下のようなプロセスの存在する可能性があるかと推測している。

まず、「～（さ）せていただく」が何らかの動機で、本来その使用が適切とされる場面以外で使用され、そこで新しい用法が生じることになる。ただ、しばらくの間新用法の認知度が低く、ほとんどの人がそれを「誤用」として捉える。時間が経つにつれて新用法を知る人が増え、この中ではその用法を容認できる一部の人がさらにそれを使い始めると新用法の使用頻度が上昇し、新用法をまだ知らない人もそれに触れる機会が増えるため、新用法の認知度が高くなる。認知度が高まると結果的には使用者がさらに増加する。このプロセスが繰り返されることにより新用法の社会的容認度が徐々に上昇し、最終的にこれが「正用」として捉えられることが考えられるのである。この社会的容認度の変化のプロセスを次の図 5-3 に示す。

ただし、以上の内容はあくまでも筆者の推論であり、これを証明するには更なる調査が必要であると思われるが、今後の課題にしたい。

図 5-3 「～（さ）せていただく」の社会的容認度における変化のプロセス



step1

step2

step3

5.3.6 日本語母語話者の容認の類型

前項では、事実上または形式上「許可」が存在する①～⑧に対する回答者の容認傾向と、「許可」が存在しない⑨～⑭への非容認傾向とを見た。しかしそれとは逆に、①～⑧に非容認的な回答者、⑨～⑭に容認的な回答者も存在した。本項では、こうした「～（さ）せていただく」の各用法に対する日本語母語話者の容認パターンの特徴について検討することにする。

そこで、82名の対象者の回答にウォード法を使用するクラスター分析を行った。その結果を示すデンドログラムが次頁の図5-4である。

図5-4 母語話者のデンドログラム

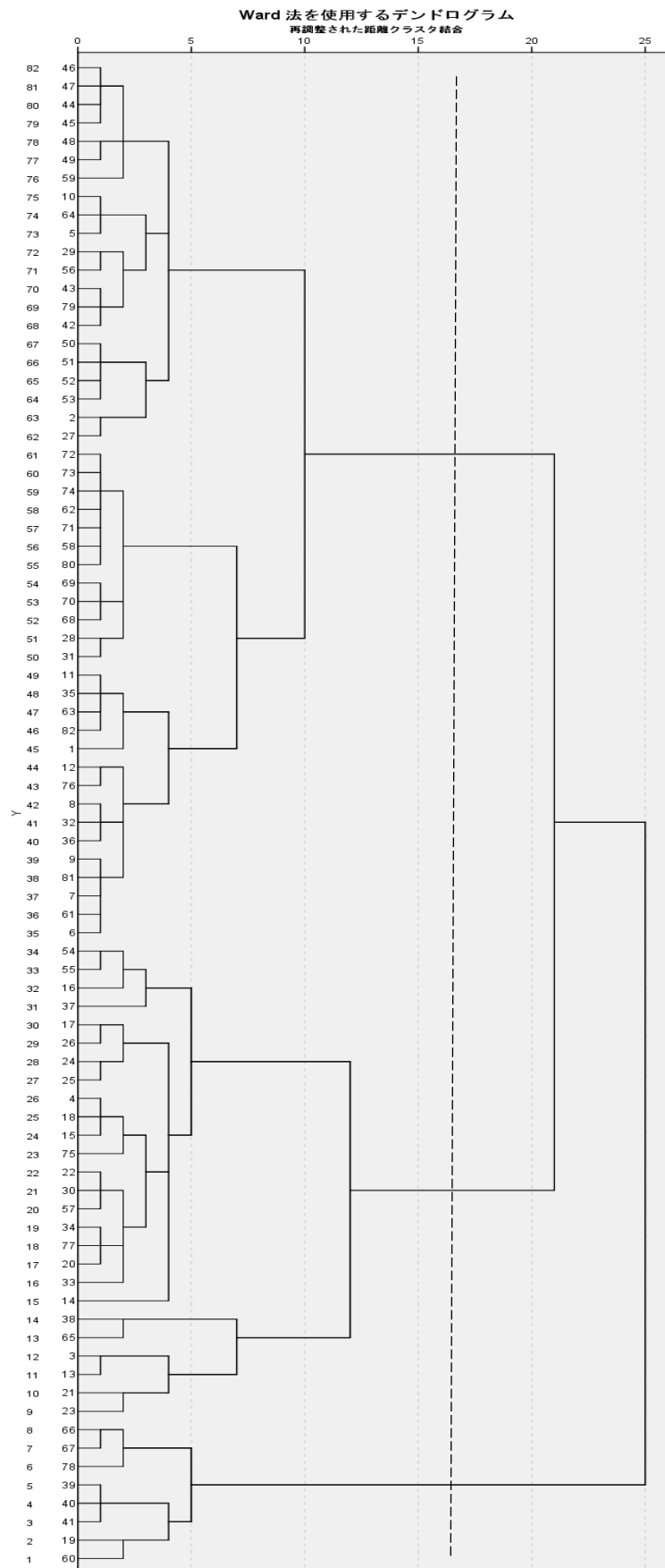
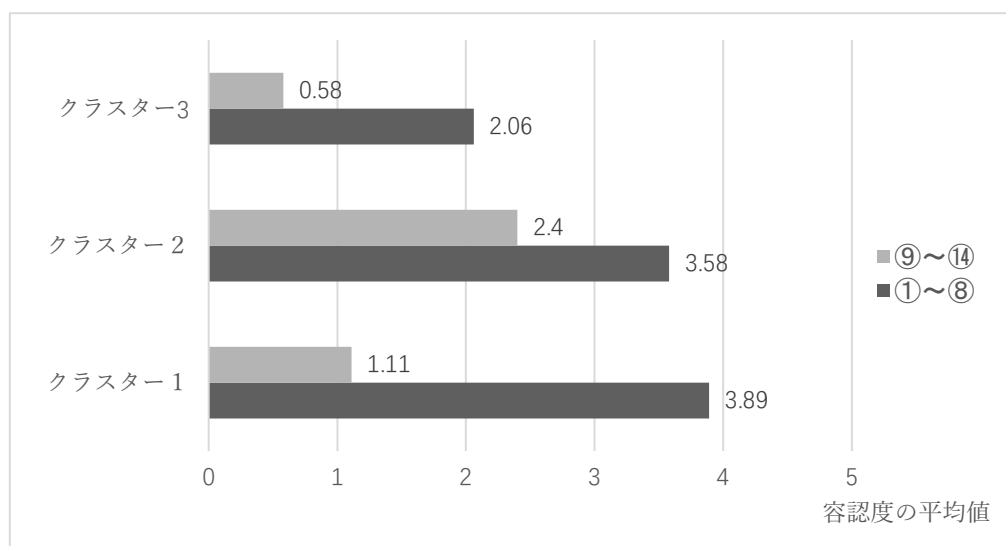


図5-4では、点線が示しているように、3つのクラスターが適切であると判断した¹⁹。そこで、3つのクラスターごとに、質問①～⑧及び⑨～⑭に対する容認度の平均値を算出し、その結果を次の図5-5に示す。

図5-5 3クラスターの質問別の容認度の平均値



第1クラスターには48名の調査対象者が所属し、これが対象者全体の59%を占めており、最多である。このクラスターでは、質問①～⑧に対する容認度の平均値が3.89と最も高い一方、⑨～⑭に対する容認度の平均値が1.11であり、非常に低い水準にとどまる。この明確に線引きをしている特徴を「用法区分型」と呼ぶことにする。

第2クラスターには26名の対象者が所属しており、全対象者の32%を占める。このクラスターでは、質問①～⑧に対する容認度の平均値が3.58であり、第1クラスターよりはやや低下するが、依然高い水準である。その一方、質問⑨～⑭に対する容認度の平均値が2.4と3クラスターの中では最も高い。以上のことから、第2クラスターを「容認傾向型」と呼ぶことにする。

第3クラスターには8名の対象者が所属しており、これが全対象者の9%に相当し、最少である。このクラスターでは、質問①～⑧に対する容認度の平均値が2.06と、3クラスターの中で唯一非容認的な態度を示すクラスターである上、質問⑨～⑭に対する容認度の平均値も0.58と最も低いため、「非容認型」と呼ぶことにする。

¹⁹ 図5-4では、4クラスター以上の場合、枝が短くなるため、分類が細かすぎると考えられる。

本調査では、3クラスターのうち「用法区分型」が多数派であることが分かった。ただ、今後「～（さ）せていただく」の各用法の使用状況の変化に従い、3クラスターのそれぞれの該当者数も変化する可能性には留保する必要がある

5.4 まとめと本章の結論

本章では、2020年時点の「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度をアンケート調査を通して明らかにした。その結果、恩恵が欠落し、形式上の許可のみが存在する拡大用法Ⅲの社会的容認度が基本用法を上回り、最も高いことが分かった。このことから、「～（さ）せていただく」の役割がその本来の用法である「許可を求める」から話し手自身の行為を丁寧に「伝達・宣言する」表現に移行しつつある傾向がうかがえた。

また、拡大用法Ⅴに対する容認度における世代間の差異が認められ比較的新しい用法への中高年齢層の抵抗感の存在が示唆された。また、基本用法に対する男女差については、男女の敬語意識の相違などの理由が考えられるが、明確な説明項を立てるためには、更なる調査が必要であることから、今後の検討課題とした。

「～（さ）せていただく」の社会的容認度に影響する要素について、本調査の結果では許可の有無、及び使用頻度と容認度の間において相関関係の存在が認められ、使用頻度が容認度に影響するプロセスについても検討した。また、拡大用法Ⅲを除くほかの用法において、欠落した要素の数と容認度には強い関連があることを確認したが、拡大用法Ⅲのみがこの傾向から逸脱しているのは、使用頻度による影響も働いているためであると考えられる。

本章ではまた、日本語母語話者の容認の類型を、クラスター分析を通して明らかにした。その結果、「用法区分型」、「容認傾向型」、「非容認型」の3クラスターが存在することと、「用法区分型」が多数派であることが分かった。

第一章で提起した「～（さ）せていただく」の使用の許容範囲については、本研究では以下の理由により、基本用法とともに拡大用法Ⅲも「許容範囲内の用法」として捉える立場を取ることにする。

- 1) 拡大用法Ⅲは「～（さ）せていただく」の使用が確認されると同時に現れ、使用頻度もその後常に基本用法を上回っている。
- 2) 拡大用法Ⅲの社会的容認度がすべての用法で最も高く、社会的に広く受け入れ

られている用法であると考えられる。

形式上の許可も存在しない拡大用法Ⅳ、Ⅴについては、その社会的容認度はいずれも 1.0 台にとどまり、使用頻度も低下していることから、現時点では「許容範囲外の用法」として捉えるべきであろう。また、拡大用法Ⅱに関して、調査ではこの類型に該当する質問③、④の容認度がそれぞれ 2.59 と 3.67 とゆれが見られたことから、本研究ではこの用法を「許容範囲境界線上の用法」とする。

第6章 「～（さ）せていただく」の拡大用法の使用動機

「～（さ）せていただく」の拡大用法の使用動機について、先行研究ではこれまで様々な角度からの考察がなされてきたが、用法によって使用動機が異なり複雑であるため、まだ検討の余地が残されているものと思われる。そこで本章ではまず、言語景観及び国会議事録における「～（さ）せていただく」の使用例から、話者による拡大用法の使用動機について改めて検討してみることにした。また、聞き手の心理に焦点を当てて、第2章第4節で指摘した使用動機と実際の使用効果の「ずれ」がどのような理由で生ずるのかについて検討する。

6.1 好ましくない状況に多用され話し手の心理的負担を軽減する

日本放送協会放送文化研究所が2015年に行った「日本語の揺れに関する調査」（以下、「NHK調査」と略述）では、「～（さ）せていただく」の前に来る言葉の違和感についての質問があり、「禁煙」「休業」など受け手にとって都合の悪い状況を表すことばの場合には違和感が少なく、「正用」の判断となることが多数を占める一方、「営業」などの場合には違和感が強く「誤用」と扱われる傾向があるとした。この点については塩田（2016）も、「～（さ）せていただく」は、「自分のその行動が相手に対して、なんらかの具体的・心理的な負担・迷惑・不利益を与える（と考えられる）場合に用いられることが多い。」と述べている。ただしいずれの研究も多用される理由については明言していない。

筆者が2020年7月から9月にかけて行った言語景観における「～（さ）せていただく」の使用実態の調査では、「閉店する」「休診する」「利用を中止する」など好ましくない状況での使用例が多く、筆者が収集した使用例の7割を占めた。そのため本節では、言語景観での使用例の考察を通して「～（さ）せていただく」の拡大用法の使用動機を探ることにする。

6.1.1 言語景観とは

本項では、言語景観の定義について述べる。

日本で初めて言語景観という用語を使用したのは地理学者の正井泰夫である。正井（1972）は以下のように述べている。

言語景観とは、言語およびその視覚表現である文字からみた都市景観のことである。(正井 1972:153)

この定義から、言語景観には少なくとも「文字」と「都市景観」の2つの要素が必要であることが分かる。スーパーの入り口に貼られたポスターやチラシが、言語景観の具体例となるが、全く同じ内容のポスターがスーパーのホームページに載っていても言語景観にはならない。これは、「都市景観」という要素が欠落しているためである。

その後、言語景観の定義と伴にその範疇について詳述したのはダニエル・ロング (2010) である。ダニエル・ロング (同上) は、言語景観を以下の4つの視点から論じた。

ア) 言語景観は文字言語（看板や店の並ぶ商品のラベルなど）であり話しことば（その商品のためのラジオ CM や電車内のアナウンスなど）ではない。つまり、言語景観は視覚的な情報であり、聴覚的な情報ではない。

イ) 言語景観は公的な場に見られる文字言語（店舗のショーウィンドウにある看板など）であり、私的なコミュニケーション（個人間で交わされる文通や電子メールなど）ではない。

ウ) 言語景観は不特定多数の読み手に発される物（商店街のポスターなど）であり、特定の個人宛てに書かれた物（自宅のドアにテープで張られた言付けなど）ではない。

エ) 言語景観は自然に、受動的に視野に入る物（駅売店の雑誌の見出しに使われている語句など）であり、意図的に読まなければならない物（その雑誌の中の記事など）ではない。(ダニエル・ロング 2010:179)

本稿で扱う「言語景観」は、以上の正井 (1972) およびダニエル・ロング (2010) の議論を踏まえたものである。

6.1.2 言語景観における「～（さ）せていただく」の用例収集

本研究は考察対象として、2020年7月から9月にわたり筆者の生活・通学圏地域やインターネットから、「～（さ）せていただく」が使用されている言語景観を20例収集した。ここではまず、これらの用例および使用場面を以下に提示する（「～（さ）せていただく」が含まれる文のみを提示している）。なお、下線は筆者によるものである。

- ①（あるスーパーマーケットのポスター）4/24、25はお休みさせていただきます。
- ②（あるドラッグストアの掲示物）マスクのご購入は、お一人様 一点限りとさせていた
た
だきます。
- ③（デパートの掲示物）誠に勝手ながら全館午後5時30分に 閉店させていただきます
。
- ④（歯科医院の掲示物）12月28日（土）は午後から 休診させていただきます。
- ⑤（公園の掲示物）園内の1時間あたりの滞留者数を 200名以下とさせていただきます。
す。
- ⑥（遊園地の掲示物）発熱があるお客様はご入場を お断りさせていただきますので、
ご
了承のほどお願い申し上げます。
- ⑦（ある観光地の掲示物）GW期間は国・県の要請を受けまして全ての駐車場・トイレ
の利用を 中止とさせていただきます。
- ⑧（ある飲食店の看板）ランチタイムはお飲み物を サービスさせていただいております。

- ⑨（土産屋のポスター）送料無料で全国に 発送させていただきます。
- ⑩（ある飲食店の看板）全席 禁煙とさせていただきます。
- ⑪（ある工務店の看板）無料で、ご相談させていただきます。また、ご希望でしたら
こ
ちらからお伺いさせていただきます。
- ⑫（レストランの看板）混雑時には時間制限を 設けさせていただく 場合がございます
の
でご了承ください。
- ⑬（ある飲食店の看板）アルコールは 別料金とさせていただきます。
- ⑭（ある飲食店の掲示物）誠に勝手ではございますが 9 月 17 日（火）以降のご予約を
停止させていただきます。
- ⑮（高速道路の脇にある看板）東名高速道路で集中工事を 実施させていただきます。
- ⑯（デパートの掲示物）下記日程にエレベーターのメンテナンスを 実施させていただ
き
ます。お客さまにご不便、ご迷惑をお掛けいたしますことを深くお詫び申し上げます。
ます。
- ⑰（スピードショップの看板）確かな技術と知識でお客様の車両を カスタムさせてい
た
だきます！
- ⑱（公園の看板）今後ごみ捨てを確認した時は、厳重に対処させていただきます。

⑮（駐車場の看板）かかる行為や糞尿などによる場内の汚損を発見した場合には、所属署へ通報させていただく場合があります。

⑯（ショッピングモールの掲示物）お子様用のおもちゃは撤去させていただきました。

ご不便をおかけしますが、何卒ご理解頂けますようお願いいたします。

筆者が収集した用例では、「閉店する」「休診する」「利用を中止する」など受け手にとって好ましくない状況を表すものが最も多い一方、「飲み物をサービスする」「無料で届ける」など好ましい状況を表すものもある。さらに、「通報する」「厳重に対処する」など話し手の行動を強く宣言する用例も確認されたが、これらの用例が「好ましい状況」と「好ましくない状況」のどちらにも該当しないため「どちらでもない状況」に分類する。それぞれのタイプが占める割合を表 6-1 に示す。

表 6-1 各場面における使用例の割合

使用場面	用例の番号	用例数 (%)
好ましい状況	⑧、⑨、⑪、⑰	4 (20%)
好ましくない状況	①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑩、 ⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑳	14 (70%)
どちらでもない状況	⑱、㉑	2 (10%)

表 6-1 から分かるように、20 例の内「～（さ）せていただく」の前に好ましくない状況を表すことばが来るものが 14 例で、全体の 70%も占める。これは、前述の「NHK 調査」の結果、並びに塩田（同上）の論述に一致している。ただ、これらの先行研究では、「～（さ）せていただく」の前に好ましくない状況を表すことばが多用される理由について触れられていないほか、その逆に好ましい状況にも用いられていることや使用動機に言及していないことなどの問題点がある。本稿では、それらの問題点を踏まえながら言語景観における「～（さ）せていただく」の使用状況を考察していきたい。

6.1.3 「～（さ）せていただく」の用法による分類

本研究の分類法によると、前項で提示した20の使用例はすべて拡大用法タイプⅢ（＝実際の許可者と許可行為が存在しないが存在すると見立てることができる、かつ恩恵関係も欠落した用法）に当てはまることが分かる。これは、言語景観の「何らかのメッセージを一方向で伝達する」という本質的特性によるものであると思われる。言語景観の役割は許可を求めるものではなく、行為遂行宣言による情報伝達であると思われるため、事実上の許可は存在しないが、発話者は何らかの理由で言語景観を目にする人（受け手）を行為の許可者と見立て許可を求めているかの如く「～（さ）せていただく」を使用したと思われる。また言語景観における受け手は専ら受動的に情報を受け取る立場であり、発話者のために何かをしたわけではないため実際の恩恵関係は伴わない。

本稿では以下、言語景観において発話者が聞き手を許可者と見直して許可を認めているような言い方をする意図を検討していきたい。

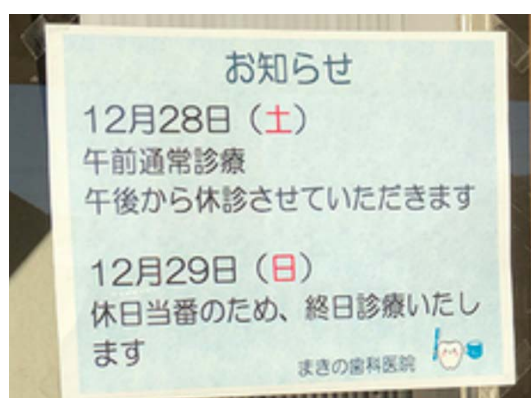
6.1.4 言語景観における「～（さ）せていただく」の使用動機

前述したように、言語景観における「～（さ）せていただく」の使用には「好ましい状況」「好ましくない状況」「どちらでもない状況」の三種類の場面があったが、本節では、それぞれの場面における「～（さ）せていただく」の使用動機を考察する。

6.1.4.1 好ましくない状況における使用

ここでは、該当例が最も多かった「好ましくない状況における使用」の使用動機について検討するが、用例④の出どころである図6-1の「歯科医院の掲示物」から始めたい。

図6-1 歯科医院の掲示物



この用例では、「休診する」に「～（さ）せていただく」が使用されたのに対して、「診療する」には「～（さ）せていただく」ではなく「いたす」が使われている。「NHK 調査」の結果が指摘するように、「休診する」に「～（さ）せていただく」が使用されても違和感は少ないが、「本日は診療させていただきます」となると特定の場面を除き非常に違和感のある表現になる。

日本社会においては、「病院に行けば診療してもらえる」、「百貨店に行けば買い物ができる」などは当然のことと理解される。しかし、病院の休診やデパートの休業など、サービスを提供する側の都合による負の事態は、期待外れなことであり、失望や不満などのマイナスの感情を生じさせることになる。この時サービスを提供する側には、好ましくない状況を如何に丁寧にかつ低姿勢で顧客に伝えるかが重要なものとなる。

上述した場面において単に事実を伝える「します」はもとより、謙譲語の「いたす」でも誠意の不足や、表現の硬質感が問題とされる場合がある。それに対して、「～（さ）せていただく」の使用は、自分を被使役行為者に仕立て、恰も相手の命令によって行動したかのような表現となっているため、「話し手が「頼み」「相手の命令に従う」という回路が生じ、自己負担を払っていることを表現化することで丁寧さを増していると思われる」（米澤、2001）ことになる。これによって、好ましくない状況は受け手が許可したようになり、低姿勢で丁寧さを伝え、話し手の心理的負担を軽減する効果もある。

以上の論点から、「～（さ）せていただく」の使用例 20 例のうち「好ましくない状況」に該当する 14 例を考察する。

用例①、③、④、⑦、⑭、⑯、⑳には、「いつもなら当たり前に利用できる施設・サービスなどが何らかの理由で完全に利用できなくなる」という共通点があり、そのことへの事業者側の配慮が表現されている。この場面での「～（さ）せていただく」の使用は、事前に利用者と合意したかのように受け取れるため、心理的負担の軽減という話し手の意図がうかがえる。用例②、⑤、⑥、⑩、⑫、⑬、⑮は、「いつもなら当たり前に利用できる施設・サービスなどが何らかの理由でその一部が利用できない」という共通点がある。ここでの「～（さ）せていただく」の使用には、利用者に対して不便や負担を求める心理がうかがえる。

また、前述の三場面のうち、「好ましくない状況」における使用例が多い理由は、話し手の心理的負担が大きいためであると思われる。この点については、「休業させていただきます」や「閉店させていただきます」などの表現が商業敬語として広がったため頻用さ

れていると論じている研究もあるが、「～（さ）せていただく」には話し手の心理的負担を軽減する効果がある以上、心理的負担の大きい場面で多用されるというのが本稿の考え方である。

6.1.4.2 好ましい状況における使用

また、聞き手にとって「好ましい状況」における「～（さ）せていただく」の使用例も確認された（用例⑧、⑨、⑪、⑰）。本項ではこれらの用例を考察する。

用例⑧、⑨、⑪の「飲み物をサービスする」「送料無料」「無料で相談する」は、いずれも「本来料金がかかるものが支払わなくてもよいことになった」という利用者にとって好都合な事態という共通点がある。また、用例⑪、⑰の「こちらから伺う」「確かな技術で車をカスタマイズする」も、「利用者に便利さや高水準なサービスを提供すること」が共通点であり、話し手に心理的負担があるとは考えにくく、前項で述べた理由では説明がつかない。

用例⑧の「飲み物をサービスする」については、本来飲食店では飲み物に対して代金を支払うものだが、「飲み物を無料で提供する」というサービスは客の期待に応えるものである。これは用例⑨および⑪の「送料無料で届ける」「無料で相談する」においても同様である。また、用例⑪および⑰の「こちらから伺う」「確かな知識と技術で車をカスタマイズする」は、いずれも「平均レベル以上のサービスを提供する」ということを表している。つまり、ここでの「好ましい状況」というのは、利用者の希望や期待に添うものである。米澤（同上）は、「相手の利益となる行為を話し手が行う場合、「お前のためにわざわざ行う」といった自己尊大的な響きを伴う。そのため、話し手は相手へ配慮を強める必要がある場面では、「あなたのために私が～した」と言う代わりに、「～（さ）せていただきます」を使用する。」と指摘した。また「～（さ）せていただく」の使用効果について「実際に使役行為はなくとも、形式上は聞き手からの使役行為に促され、話し手の行為は成り立つことになる。聞き手は話し手の恩着せがましさを感ぜずにすむ。」とも述べている。

これらのことを考え合わせると、言語景観での好ましい状況における「～（さ）せていただく」の使用には、話し手の「高水準のサービスをアピールしたいが、尊大な態度や自慢げな言い方を避けたい」という矛盾した気持ちが潜在的に存在しているものと考えられる。

6.1.4.3 「どちらとも言えない状況」における使用

ここでは「どちらでもない状況」用法にあたる用例⑱、㉑を考察する。

用例⑱の「ごみ捨て行為を厳重に対処する」および用例㉑の「迷惑行為を通報する」は、いずれも表現が一方的で、威圧感を感じる表現である。「～（さ）せていただく」は本来謙譲語で、硬い言い方を回避するための表現であるが、話し手はどのような意図であえて使用しているのであろうか。

用例⑱の「今後厳重に対処～（さ）せていただく」では、「以前よりも厳しい対処をする」もしくは「違法なごみ捨てに対する世間一般の対処よりも厳たる姿勢で対処する」といった意味合いが含まれる。用例㉑の「通報する」も厳しい対処である。こういった、通常よりも厳しい対処をする場合、聞き手から許可を得たように言うことで、「了承の上、自己責任で行動してほしい」「万が一厳しい対処を取った際は責任を一切負わない」といった話し手の立場を強くアピールする意図がうかがえる。

6.2 場の改まり度の承認と維持

複数の者が会話する場面では、本来「します」や「いたします」で済むところを誰かひとりが先に「～（さ）せていただく」を使用すると、その後の人も「～（さ）せていただく」を使用する傾向がある。特に会議や発表など、複数者が発言する場面では、途中で「～（さ）せていただく」の出現する頻度が急に上がることが多いとされる。

この現象について確認するため、本研究では国会議事録検索システムを利用し、委員会ごとの「～（さ）せていただく」の出現するタイミング及び頻度を確認した。なお国会議事録を考察資料として選んだ理由は、国会の委員会が「複数者が発言する場面」及び「改まった場面」の2点に合致するためである。検索方法は、「～（さ）せていただく」のうち、「せていただ」をキーワードに指定した。検索結果のうち、「～（さ）せていただく」の用例に該当しないもの（例：見せていただく）を除外することにした。

検索の結果、上述した現象を確認できた委員会は多数あることが分かった。以下の2.1、2.2では、令和2年9月3日の「第201回国会 参議院 予算委員会 閉会后第2号（以下、「予算委第2号」と略述する）」と令和2年6月11日の「第201回国会 参議院 予算委員会 第21号（以下、「予算委第21号」と略述する）」の2つの会議録を例として用いて説明を試みる。

6.2.1 「予算委第2号」における使用状況

表6-2に「第2号」での「～（さ）せていただく」の使用頻度の時間的推移を示す。

表6-2 「第2号」における使用頻度の時間的推移

発言の 順番	「～（さ）せていただく」の使用 に関する事件	使用 回数	発言1回あたりの 平均使用回数
1～4	なし	0	0
5	初めて使用される	1	-
6～25	使用頻度がやや上昇する	6	0.3
26	一回の発言で4回使用される	4	-
27～125	使用頻度が大幅に上昇する	78	0.77
126～137	事実陳述の内容がメインであるため使用が落ち着く	0	0
138～141	2回使用される	2	0.5
142～150	使用頻度が再び上昇する	8	0.89

この委員会には合計165回の発言があり、発言の順番1～4では「～（さ）せていただく」の使用がなく、その後5番目、9番目及び13番目の発言に1回ずつの使用があったが、いずれも非常に長い発言の中で1回のみ使用であった。このため会議全体の改まり度にそれほど大きな影響はなかったものと思われるがその後16番目、18番目、20番目、24番目でも使用が確認され、使用頻度がやや上昇した。例えば26番目の発言では、「～（さ）せていただく」が計4回使用され、その後125番目の発言まで「～（さ）せていただく」が連続して用いられた。この間の「～（さ）せていただく」の使用頻度は1～25番目での使用頻度（1回の発言あたりの使用回数0.3回）の2.6倍（1回あたり0.77回）になる。その後126～137番目までの発言は事実の陳述がメインで「～（さ）せていただく」を使用する機会は減少したが、138、142番目の発言で再度「～（さ）せていただく」

く」が用いられた。これを皮切りに 150 番目の発言まで「～（さ）せていただく」の使用頻度が再び上昇した。

6.2.2 「予算委第 21 号」における使用状況

次に、表 6 - 3 で「第 21 号」での「～（さ）せていただく」の使用頻度の時間的推移を示す。

表 6 - 3 「第 21 号」における使用頻度の時間的推移

発言の 順番	「～（さ）せていただく」の使用 に関する事件	使用 回数	発言 1 回あたり の平均使用回数
1 ～483	偶発的な使用	63	0.13
484～495	国務大臣が計 9 回使用する	9	0.75
496～553	使用頻度が急激に上昇する	63	1.09
554～590	使用がしばらく落ち着く	9	0.24
591～627	委員及び国務大臣の使用を機に使 用頻度が再び上昇する	36	0.97

この委員会には合計 684 回の発言があるが、「～（さ）せていただく」の使用に関して 484 番目以前ではほぼ偶発的であり使用頻度が低い。国務大臣が 484 番目から 494 番目までの 5 回の発言で「～（さ）せていただく」を 9 回使用したことを皮切りに、その後 496 番目～553 番目までの 58 回の発言で「～（さ）せていただく」が 63 回使用され、使用頻度が急激に上昇してきた。その後、554 番目の発言から使用頻度がしばらくの間低下するが、委員が 591 番目と 593 番目の発言で「～（さ）せていただく」を 2 回連続で使用し、国務大臣が 597 番目の発言で 3 回使用したことを機に使用頻度が再度上昇し、627 番目までの計 37 回の発言で 36 回の使用が確認された。

こうした現象は、例として挙げた「第 2 号」と「第 21 号」のほかに、令和 2 年 5 月 22 日の「第 201 回国会 衆議院 厚生労働委員会 第 15 号」や令和 2 年 5 月 15 日の「第 201 回国会 衆議院 厚生労働委員会 第 13 号」など多数の会議録で確認されている。

6.2.3 使用動機の内容

6.2.1 及び 6.2.2 の考察から、「～（さ）せていただく」の使用頻度に明らかな変化が起きるタイミングは、複数回の発言で連続して使用される場合や、一人が一度の発言中に複数回使用する時である。これは、「～（さ）せていただく」の連続使用がその場の改まり度に影響を及ぼした結果だと考えられる。言葉が使用されるあらゆる場面では改まり度が存在し、丁寧さが求められる場面であるほど改まり度も高くなるが、改まり度は常に同じ水準に維持されるものではなく、使用される言葉の待遇度及びその使用頻度によって上下すると思われる。国会の委員会のような複数の人が順番に発言する場面では、「～（さ）せていただく」の偶発的な使用は改まり度にさほど影響しないが、連続して使用される場合、その場面の改まり度が上昇し、後続の発言者はその改まり度を維持するため、「～（さ）せていただく」の使用が義務的になる。本稿ではこのような場面での使用動機をこれと捉えた。現在、「～（さ）せていただく」の使用頻度が年々上昇してきているという言語状況の中で、やはり「周りの人が使っているから、自分も失礼にならないように」という心理で「～（さ）せていただく」を使用している人も多いのではないだろうか。

なお、前の発言者に続いて発言する者の心理状態に「「～（さ）せていただく」表現は固より知悉している」ことを婉曲に表すために用いているという意図がうかがえるとする見方も成り立つかもしれない。ほかの発言者全員が「～（さ）せていただく」を使用している環境の中、当人だけが使わないことで、「その表現を知らない」と思われる恐れを避けるために使用する心理がそこにあると考えられるからである。

6.3 使用動機と使用効果のずれについて

前節では、拡大用法の使用動機に関する本研究の見解を述べた。これまでの研究では本調査を含め、拡大用法の使用動機を「丁寧さを求めるため」、「相手への配慮のため」、「失礼を避けるため」などといった肯定的な捉え方がほとんどであったが、現実にも、喧嘩などごく一部の場面を除き、相手を貶めるなどの否定的な用例は考えにくい。しかし、第2章第2節で触れたように、朝日新聞の調査では、このような肯定的と思われる使用に対して「プレッシャーを感じる」、「一方的で押しつけがましい言葉である」などの否定的な意見が多数集められ、（話し手の）使用動機と（聞き手が受ける）使用効果の間には「ずれ」が生じていることが観察される。それゆえ本節では、こうした評価を生む聞き手の心理に着目し、このようなずれが生じた理由を検討してみることにした。

6.3.1 許可者の明示性

前章では、「～（さ）せていただく」の社会的容認度が「許可」という要素の有無に影響されることが明らかになっている。本節ではその理由について検討する。

米澤（2001）は「～（さ）せていただく」における「許可者」について、「恩恵の与え手を主語にして述べなければならない「させてくれる」と異なり、「させてもらう」を用いることでその許可の与え手を自由に想定できる。つまり「おかげさま」的発想がそこにあると思われる。実際の使役行為者ではないが、聞き手を「おかげさま」的発想のもとに被使役者に仕立て、聞き手への配慮を示すわけである」（p. 116）と述べている。「～

（さ）せていただく」は本来、事実上の許可が存在する場面での使用が基本であり、事実上の許可が存在しない場面でも、文法上「させる」には主語が必要であるため、話し手が誰かを形式上の許可者として想定しなければならない。

拡大用法Ⅱ、Ⅲでは、許可の受け手が遂行する行為に最も関係している人物が「させる」の主語として立てられることがほとんどである。例えば、「荷物を検査させていただきます」では検査を受ける者、「それでは発表させていただきます」では発表の聴衆がそれぞれ「させる」の主語として見立てられる。

また、事実上の許可行為が存在せず、存在するとして見立てることもできない拡大用法Ⅳ、Ⅴの場合、米澤（同上）によれば、話し手が聞き手を「させる」の主語として見立てることで聞き手への配慮を示すことになる。

しかし、以上はあくまでも話し手が想定した範囲内のことであり、「させる」の主語について聞き手は必ずしも話し手の想定した通りに理解しているとは限らない。「荷物を検査させていただきます」の例では、検査を受ける立場にある聞き手にとって、自分が「検査する」という行為の許可者として想定されていることは理解するに難くないが、「～発表させていただきます」の場合も同様に理解できる。

しかし、拡大用法Ⅴの「夏休みは海外旅行をさせていただきました」などに違和感を覚えるのは、聞き手が話し手の「旅行する」という行為には全く関与していないため、「旅行させた」（傍点筆者）主体は誰なのかの推測が難しいからであることが考えられる。

本研究で行ったアンケート調査において、許可者がある、またはあるとして見立てることのできる用法（基本用法、拡大用法Ⅱ、Ⅲ）の容認度がすべて 3.0 を上回る結果であっ

たことに対して、許可者の存在を見立てることのできない用法（拡大用法Ⅳ、Ⅴ）の容認度が低下して1.0台に留まったのは、上述した判断が働いたものと思われる。

6.3.2 「～（さ）せていただく」の文末表現と聞き手の選択権

椎名（2018）は、「させていただきます」や「させていただいております」という「言い切り型」（p. 62）の使用について、「聞き手は話し手の一方的な宣言を聞くだけで、行動への許可を与えるといった関与や交渉の余地はない」、「インターアクティブな交渉をしようとするコミュニケーションを被った非インターアクティブな方便と言うことができる」と述べている。

「～（さ）せていただく」は本来、菊地（1997b）が指摘しているように、「この本のコピーを取らせていただけますか」のような許可を求める用法がその「最も基本的な使い方」であると述べている。「本のコピーを取らせてほしい」という話し手の依頼場面では、本の持ち主である聞き手には「許可（コピーを取らせてあげる）」もしくは「拒否（取らせてあげない）」のどちらかを自由に選択することができ、また「～取らせていただけますか」という疑問文形式の文末は、聞き手をそのような選択に自然に誘導する働きがある。

一方、平叙文の文末形式を取る「この本のコピーを取らせていただきます」はどうだろう。この用例では、事実上の許可が全く存在せず、話し手が一方的に決定した事項を伝える表現になっており、まさに椎名（同上）が指摘した「コミュニケーションを被った非インターアクティブな方便」に該当するものである。同じ「～（さ）せていただく」表現にもかかわらず、「許可」は形式上のものであるため、聞き手からは「許可・許可」の選択権が奪われてしまい、「話し手の言う通りにする」選択しか残らない。このことから、前出の、聞き手による「プレッシャーを感じる」、「押しつけがましい」という評価は、「許可」または「拒否」の選択権の消滅に関係しているものと考えられる。

なお、「コピーを取ります」や「コピーをお取りいたします」などの常用表現に対して、「押しつけがましい」などの批判が起きないのは、「～する」や「お・ご～する」には元来「許可」という要素がないためである。

以上のことから、「～（さ）せていただく」の拡大用法に対する違和感の多くは、「許可」が実質的なものか、形式的なものかによるものと考えられるのである。

6.3.3 表現自体の長さ

「～（さ）せていただく」にはまた、表現自体の音韻的な長さの問題が存在する。この点を関連表現のモーラ数から考えて見ることにする。

「連絡させていただきます」の場合、動詞の語幹部分である「レンラク」のモーラ数と敬語表現部分の「サセテイタダキマス」のモーラ数9の比率（小数点第2位以下、四捨五入。以下同）は<3:7>である。一方、一般的な謙譲表現を例にとると、「連絡いたします」は<4:6>、「ご連絡します」は動詞語幹とそれ以外の比率は<5:5>となる。このように、「～（さ）せていただく」の使用文では、動詞部分と敬語表現部分のバランスが問題になるものと思われる。日本語の動詞は、5モーラ以内が圧倒的であるため、敬語表現部分が大半を占める場合が多く（例：行かせていただきます、など）、聞き手は動詞部分よりも、「～（さ）せていただく」の部分に注意が向いてしまうことになる。また、「～（さ）せていただく」が続けて使用される場合では、その「音韻的長さ」が累積し、結果的には余剰的に聞こえてしまうのである。

さらに、この音韻的長さの問題は、「～（さ）せていただく」の過度使用が時間的ロスを引き起こし、会話が長引いてしまうことに繋がる。これも「～（さ）せていただく」の頻用が反感を招くことの一因ではないかと筆者は考えているが、この点については、今後の課題としておきたい。

6.4 まとめと本章の結論

本章では、言語景観及び国会委員会における「～（さ）せていただく」の使用例を観察し、使用動機を検討した。その結果、言語景観における「～（さ）せていただく」の使用には、「好ましい状況」、「好ましくない状況」、「どちらでもない状況」の三種類の場面があり、いずれも予想を超える事態が起きた場面にのみ使用されることが分かった。また、「好ましくない状況」での使用例が全用例の7割と最も多く、その理由について本稿では、好ましくない状況における話し手の心理的負担が最も大きく、「～（さ）せていただく」には話し手の心理的負担を軽減する効果があるため多用されることを論じた。

「好ましい状況」および「どちらでもない状況」での使用動機については、それぞれ「恩着せがましさの回避」と「強い立場のアピール」であるとした。また、国会委員会での使用動機について本稿では、①「～（さ）せていただく」の使用により場面の改まり度が上がり、前の発言者によって基準化されたその場の改まり度を承認し維持するための使用

と、②「前の発言者が「～（さ）せていただく」を使うのに伴い、後に発言する者も「当該表現を元より知悉している」ことを宣明するための使用、の2点にまとめた。

また、使用動機と使用効果の間に存在する「ずれ」について、本章では「許可者の明示性」、「聞き手における選択する権利の消滅」、「表現自体の音韻的長さ」の3方面から検討し、現在「～（さ）せていただく」の拡大用法の使用に対する指摘の多くが、「許可」の形式性によるものであることを述べた。

確かに、菊地（同上）や井上（1999）が指摘している通り、謙譲語と比較すると、「～（さ）せていただく」には守備範囲が広いというメリットはあるが、その使用効果には上述のような少くない問題があり、現状では、「謙譲語 B」としての役割は、まだ社会的に受け入れられているとは言えない。ただし、時間が経つにつれて、拡大用法の使用の広がりにつれて、「許可」という要素が意識されなくなれば、違和感が薄れて「謙譲語 B」として社会的受容が増加することも考えられるが、この点については、今後も着目していきたい。

第7章 外国人日本語学習者の使用

「～（さ）せていただく」の不適切な使用については日本語母語話者だけではなく、外国人日本語学習者（以下、「学習者」と略述する）に対する指摘もメディアなどを中心に多くの言及が見られる。また、筆者は日本語教育の現場で、学習者の「～（さ）せていただく」使用に対して「丁寧すぎる」と日本語教師が指摘する場面にも居合わせたことがある。学習者の「～（さ）せていただく」の習得・運用に関しては、様々な問題が存在すると思われるが、第2章で指摘したように、現在のところ、日本語学習者の使用実態を調査した研究は、筆者の調べた限り見当たらず、「～（さ）せていただく」の各用法に対する学習者の使用意識も不明である。また、日本語母語話者の使用に「揺れ」が見られる中、「～（さ）せていただく」が日本語教育においてどのように扱われているかについての調査も必要であると思われるが、先行研究では、日本語教科書や日本語教育の現場での「～（さ）せていただく」の扱われ方について調査したものは極めて少数である。

以上のことを踏まえ、本章より、学習者の習得・運用にかかわる以下の1)～4)の諸問題について論じることとする。

- 1) 学習者の使用実態
- 2) 「～（さ）せていただく」の各用法に対する学習者の使用意識
- 3) 学習者用日本語教科書・日本語教育の現場における「～（さ）せていただく」の各用法の取り扱いとその問題点
- 4) 「～（さ）せていただく」の適切な教授法

本章では、1)及び2)について考察する。

7.1 日本語学習者の「～（さ）せていただく」使用の実態

本節では、「日本語学習者会話データベース」及び「KY コーパス」を利用することにより、学習者の大まかな使用状況を把握する。

7.1.1 使用するコーパスの概要

本項では、「日本語学習者会話データベース」及び「KY コーパス」の概要について述べる。

「日本語学習者会話データベース」（以下、NINJAL）は、研究活動のための基礎資料として「外国語母語話者と日本語母語話者の生の会話データ」を提供するという目的により、国立国語研究所が ACTFL-OPI²⁰の口頭能力試験の方式を利用して収集したものである。データの収集時期は2007年2月～2008年1月であり、合計390人分のデータが収集されたが、公開されて検索可能なのはこのうちの339件である。被験者の日本語レベル²¹は初級 - 下から超級までと多岐にわたるが、中級（188名）と上級（110名）の被験者が全体の7割以上を占める。また、被験者の母国語については韓国語（170名）、中国語（60名）、英語（31名）が上位3位を占める。

「KY コーパス」（以下、KY）は、NINJALと同じく OPI を利用し、外国人学習者90人分の会話の音声データを文字化した言語資料である。90人の被験者を母語別に見ると、中国語、英語、韓国語がそれぞれ30人であり、さらに、その30人の OPI の判定結果別の内訳は、それぞれ、初級5人、中級10人、上級10人、超級5人ずつとなっている。なお、KY の検索はタグ付き KY コーパス (<http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/>) を利用した。

7.1.2 コーパスでの使用状況

用例検索の結果、NINJAL では15例、KY では10例の用例が確認された。以下にコーパス別の検索結果を示す。なお、被験者の日本語レベルを[]内に、「～（さ）せていた

²⁰ ACTFL とは「American Council on the Teaching of Foreign Languages」（全米外国語教育協会）のことである。OPI（Oral Proficiency Interview）とは、面接者（テストター）が学習者に対して、定められた方法により30分以内のインタビューを行い、その言語運用レベルを判定するものである。OPI では、言語運用レベルの判定尺として、超級（Superior）、上級（Advanced）、中級（Intermediate）、初級（Novice）を設けており、超級以外の級では、それぞれの級をさらに上中下に下位分類しているため、全体としては「超級」から「初級の下」までの10段階の評価尺度があることになる。各級には詳しい判定基準が設けられているが、ここでは省略する。

²¹ レベルの判定は OPI の基準による。

だく」の使用場面を（ ）に記す。なお、用例中の S は学習者 (Student) を、T は試験官 (Tester) の略である。

1) NINJAL の用例

① [超級] (上司に話す)

S²²: ちょっと午後 休みをさせていただいてもよろしいですか。

② [超級] (大学の教授に話す)

S: じゃ 1 回メール 出させていただきます ので、先生のご都合のよい時間を、でき
れ
ばお伺いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

③ [上級 - 上] (「うちに泊まらない？」という試験官の誘いを断る)

S: ほんとに申し訳ございません、今度機会があればぜひ、泊まらせていただきます
ので。

T: 絶対よ、もう今度そんなこと言ったらもう絶対許さないから。

④ [上級 - 上] (大学生活について試験官に話す)

S: 今度わたくしの作品、展覧会に、出す、あのものをちょっと、手伝ってくれない
かっていうことで、ちょっと 参加させていただいて、でわたくし名前の、1 つ
の
作品を作ったんですけれども、どうですかね先生はどうあー評価したのかわから
ないんですけれどもまあ無事に終わりました。

⑤ [上級 - 上] (試験官に取材中)

S: さようでございますか、もう少し、あの具体的に、お話をさせていただいてもよ
ろしいでしょうか。

T: あどうぞ、どうぞなんでも聞いてください

⑥ [上級 - 上] (専門家に講演会の出席を依頼する)

S: このたび講演会があるんですよ、その、日本の文化についてあの講演会があるんですけれども、D 先生から、先生が、日本の文化の専門家としていろんな活躍を
してらっしゃると言われて、あの、今回よろしければ、あの、今度の講演会に、
時間がよければ、参加させていただきたいな一と思うんですけれども。

⑦ [上級 - 上] (仕事を辞めて大学に入りたいと上司に相談する)

S: あの、たぶん、長い時間にはなりません、1 年だけですので、はい、もうちょ
っと 勉強させていただきたいですが。

T: は一、わかった。じゃちょっと、こちらでも考えてみます。

⑧ [上級 - 中] (上司に話す)

S: 実はきょう、ちょっと風邪気味で、あの、早く、あの、仕事は あがらせていた
きたいんですけど。

⑨ [上級 - 中] (料理の手順を試験官に説明する)

S: ちょっとだけ、あの、作りかた、あの、ちょっと 話させていただきます。

⑩ [上級 - 中] (専門家に講演会の出席を依頼する)

S: あの、講演会がありまして、その講演会に、えーと A 先生は、あの、スピーチを
させていただきた、スピーチをあの一、なさっていただきたいと思います。

⑪ [上級 - 下] (試験官と話す)

T: そろそろロールプレイをしたいと思うんですが、えーとじゃあ、はいじゃあこれ
にしましょうか、えっと。

S: すいませんちょっと 読ませていただけないですか。

T: はいどうぞ、はい。

⑫ [中級 - 上] (上司に話す)

S: ちょっと申し訳ございませんが、ちょっと、休ませていただきたい、いただけま
せんか。

⑬ [中級 - 上] (教師に話す)

S: 先生、えっと、私きょう、あの、風邪気味で、欠席させていただきませんか。

⑭ [中級 - 上] (教師に話す)

S: えー、あした、私のお母さんは、入院するようになった。それで、先生、私はあした 休ませていただきませんか。

⑮ [中級 - 上] (上司に話す)

S: あの一午後に 休ませていただきませんか。

2) KY の用例

⑯ [超級] (教授のところに行く)

S: こんにちは、あのきょうはおいそぎ、お忙しいところをちょっと お邪魔させていただきます。

⑰ [超級] (就任の挨拶)

S: えー今日から台湾の支店長を (⑰-1) 任命させていただきまして、 (⑰-2) 赴任
させていただきました。

⑱ [超級] (試験官にこれからの予定について話す)

S: 今日、あの、早めに、あの、帰らせていただきます。

⑲ [上級 - 上] (試験官の質問に答える)

T: S さんが日本の文部大臣だったら、どんなふうに日本の教育を変えていこうと思いますか。

S: あのー、わたしもし文部大臣に つとめさせていただきましたら、…

⑳ [上級 - 上] (試験官の質問に答える)

T: 正月は何どうするんですか、お正月は。

S：正月はね、わたし、日本に来てね、3年間でね、お節料理食べたことがないか、今年、んーいちおう、友達に頼んでどっか ホームステイさせていたただこう かなと
 思います。

㉑ [上級 - 上] (宴会での発言)

S：その話題、あの、についてちょっと、あの 一話せていただきたいと思います。

㉒ [上級 - 上] (集会で自己紹介する)

S：皆様、こんばんは。えわたくしアメリカの、Sさん、あ、Sと申しますが、よろしくお願いいたします。えー本日のロータリークラブの集まりに (㉒-1) 参加さ
せていただいて、えー誠にありがとうございました。皆さんの大切なえ一時間を (㉒-2) 借りさせていただいて、本当にありがとうございました。

㉓ [上級 - 上] (アルバイトの内容を試験官に説明する)

T：どんなアルバイト？

S：あの一、「会社名」という会社で、ちょっと、いろんなことをもう、させて
いただいて、…

7.1.3 用例の考察

ここでは、前項①～㉓の例を本稿第3章で提示した用法別にまとめた。結果を表7-1に示す。

表 7-1 用例の分類 (用法別)

使用の区分	類型	用例の番号	%	
基本用法		①、⑤、⑦、⑧、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮	36%	
拡大用法	Ⅱ	㉑、㉒-1、㉒-2	12%	52%
	Ⅲ	②、③、④、⑨、⑯、⑰-2、⑱、⑳、㉓	36%	

	V	⑬	4%	
誤用		⑥、⑩、⑰-1	12%	

表 7-1 から分かるように、拡大用法に該当する用例は全体の 48% を占めており、基本用法に該当する用例はそれに続き、40% を占める。拡大用法の用例数が基本用法を上回ることが日本語母語話者と同傾向を示しているが²³、母語話者の場合、拡大用法の使用頻度が基本用法の 3 倍以上になっている (p. 46) のに対して、学習者ではその差が僅か 8% で、基本用法と拡大用法の使用率が比較的均等であると言える。

拡大用法に該当する用例の内訳を見ると、形式上の許可が存在する類型ⅡとⅢの用例数がそれぞれ 3 例と 9 例で、拡大用法全用例数の 9 割以上を占める。それに対して、形式上の許可者も不明な用例は類型Ⅴの 1 例のみで、類型Ⅳの用例が見られなかった。拡大用法類型Ⅱ、Ⅲの使用頻度が多い点においては、母語話者と共通する特徴が見られた。

また、学習者の日本語レベルを見ると、上級以上の学習者による使用例が 21 例であり、全用例の 84% にも上ることになる。残りの 4 例も、中級レベルの最上位段階である中級 - 上の学習者によるものであり、初級から中級 - 中までの学習者による用例は見られなかった。このことは、日本語教育における「～（さ）せていただく」の学習時期を推測させるものだが、この点については、教科書調査などによる検証を次章で行う。

使用場面については、上司、専門家、教師などの目上の者に対する使用や、宴会、就任あいさつなどの改まった場面での使用が全用例の大半を占めており、学習者は「～（さ）せていただく」が謙譲語であることや、丁寧さが求められる場面で使用されることにある程度の理解を示していることが分かる。ちなみに、基本用法に該当する用例では、10 例中 6 例が欠席、早退などに関する依頼であり、学習者は特に目上の者に休みの許可を求める場面で「～（さ）せていただく」を使用しているように思われる。この理由については次章で検討する。

NINJAL と KY では、合計 3 例の誤用が確認された。そのうち、用例⑥と⑩は本来「～ていただく」を使用すべきところで「～（さ）せていただく」が使用されたものである（⑩の場合は、直後に自己修正を行っているが）。用例⑰-1 では、学習者が「任命する」側ではなく「任命される」側であるため、ここでは適切な表現として「任命され」や「任命

²³ 各用法における母語話者の使用頻度は第 4 章の表 4-2 のデータによる。

していただき」などが考えられるが、仮に学習者が後者を使用しようとしている場合、用例⑰-1は用例⑥、⑩と同じ種類の誤用に分類されることになる。今回の調査に使用したコーパス資料では、先行研究が指摘している「私にやらせていただきます。お願いします。」（王 2018:20）のような、基本用法と拡大用法を混同する用例は確認されなかったが、「～ていただく」と「～（さ）せていただく」との混同が目立つ。この理由及び学習の要点についても次章以降で論じる。

7.2 外国人日本語学習者における「～（さ）せていただく」の使用意識に関する調査

本節では、「～（さ）せていただく」の各用法に対する学習者の使用意識を調査したうえで、日本語母語話者の容認度との異同について考察する。

7.2.1 調査の概要

本研究では、2020年8月～10月にかけて、計80名の中国人学習者を対象としてアンケート調査を実施した。アンケート調査票の冒頭部分（以下、「パート1」とする）に「あなたは「～（さ）せていただく」という表現を知っていますか」という質問を設けた。この質問に対して「知らない」と回答した者は、考察対象から除外した（14名）。その結果、有効な回答は66部であった。また、パート1には「～（さ）せていただく」の習得方法に関する質問も設けた。

アンケート調査の第2部（以下、パート2とする）で使用意識調査を行った。このパートでの質問文は、母語話者の社会的容認度についての調査で用いた14文をそのまま使用したが、容認度調査と異なり意識調査では調査対象の学習者に使用の可否を問うものであることから、選択肢は母語話者に用いた6段階式に代わり、「適切」または「不適切」のいずれかを選択させる2択式にした。

7.2.2 調査結果

パート1の習得方法に関する調査の結果を表7-2、パート2の各質問に対して「適切」と「適切でない」をそれぞれ回答した人数及び割合を表7-3に示す。

表7-2 習得方法に関する調査（パート1）の結果

質問		回答した人数	%
あなたはどこでこの表現を勉強しましたか。	A. 日本語教科書・日本語授業で勉強しました。	19	28.80%
	B. 日本の文学作品（アニメ、小説、テレビドラマなど）で勉強しました。	5	7.60%
	C. アルバイトや授業、買い物などの生活中の場で、ほかの日本人が使用しているのを聞いて覚えました。	13	19.70%
	D. 街中の店の看板・ポスター・掲示物などで見て覚えました。	25	37.90%
	E. その他（詳しく記入してください） _____	4	6.00%

※ 「E. その他」では、4名の中3名が「よく覚えていない」旨を記入しており、1名が「中国の大学で勉強した」と記入している。

表 7-3 パート2の各質問に対する回答状況

質問	「適切」の回答数		「適切でない」の回答数	
	人数	%	人数	%
①（学生が教師に）先生の本を <u>使わせていただけ</u> ないでしょうか	32	48.50%	34	51.50%
②（教師の持っている本をコピーしたいとき） <u>コピーを取らせていただけますか。</u>	36	54.50%	30	45.50%
③（遊園地で遊んだ後）〇〇さんのおかげで <u>楽しい一日を過ごさせていただきました。</u>	27	40.90%	39	69.10%
④（助手が教授に）教授のお傍で、こんな楽しい <u>仕事をさせていただける</u> ことは、私にとって願ってもないことです。	30	45.50%	36	54.50%

⑤（パーティーの出欠の返事として） <u>出席させていただきます。</u>	51	77.30%	15	22.70%
⑥（学術発表中に）ここは図を提示するだけで説明は <u>省略させていただきます。</u>	48	72.70%	18	27.30%
⑦（店の休業を知らせる張り紙）本日、 <u>休業とさせていただきます。</u>	62	93.90%	4	6.10%
⑧（授業中の発表の冒頭で）それでは <u>発表させていただきます。</u>	58	87.90%	8	12.10%
⑨（日記に書く）大雨に降られ、大きな木の下で <u>雨宿りをさせていただいた。</u> おかげで濡れずに済んだ。	21	31.80%	45	68.20%
⑩（オークションサイトについての感想をネット上書き込む）私は出品、落札共にいつも <u>楽しませていただいています。</u>	27	40.90%	39	59.10%
⑪（会社の同僚に）休暇中は <u>海外旅行をさせていただきました。</u>	28	42.40%	38	57.60%
⑫（自分について話している）それで都立の教育研究所に <u>行かせていただいて</u> 障がい児の勉強をし、そのあと戻ってから障がい児学級の担任になりました。	28	42.40%	38	57.60%
⑬（近所の人に）正月はハワイで <u>過ごさせていただきます。</u>	18	27.30%	48	72.70%
⑭（自己紹介で）私は〇〇中学校を <u>卒業させていただきました。</u>	20	30.30%	46	69.70%

以下の各項では、母語話者の容認度調査の結果との比較や習得方法による差などの面からこの結果を見ていく。

7.2.3 習得方法による使用意識の差

本項では、パート1の習得方法に関する調査結果（表7-2）から、習得方法と学習者の使用意識の関連性を検討する。

「A. 日本語教科書・日本語授業で勉強しました」を選択した学習者は、日本語教育の「正規のルート」で「～（さ）せていただく」を習得した者で、19名であった。これらの学習者のうち、基本用法の質問①、②に対する「適切」の選択率は、14名（73.7%）、16名（84.2%）であり、A以外の非正規ルート学習者に比べると高い値を示している。このことから、正規のルートで「～（さ）せていただく」を習得した学習者には基本用法を容認する傾向があると言えるが、少数ではあるが、基本用法を「不適切な用法」として捉えている学習者も存在した。また、母語話者の使用頻度が最も多い拡大用法Ⅲに該当する質問⑤、⑥、⑦、⑧に対して、19名のうち「適切」と回答した学習者がそれぞれ13名（68.4%）、12名（63.2%）、15名（78.9%）、16名（84.2%）と高水準であった。

選択肢B、C、Dを選んだ非正規ルート学習者は計43名で、全体の6割以上を占める。また、43名のうち、基本用法に該当する質問①、②に対して「適切」を選択した者はそれぞれ15名（34.9%）、18名（41.9%）と学習者全体の平均よりも低かった。それに対して、質問⑤、⑥、⑦、⑧における「適切」の回答者数は、質問⑤では36名（83.7%）、⑥では33名（76.7%）、⑦では43名（100%）、⑧では39名（90.7%）と、正規のルートで習得した学習者よりも高い使用意識を示した。

以上、本調査では、正規のルートで「～（さ）せていただく」を習得した学習者が基本用法と拡大用法Ⅲの双方に、非正規ルートで習得した学習者が拡大用法Ⅲのみに高い使用意識を示すという傾向が見られた。ここで注目しておきたいのは、習得ルートにかかわらず、回答者全員が拡大用法Ⅲに高い使用意識を示したことである。ただ王（同上）が指摘しているように、一部の学習者が許可を求める場面で「私にやらせていただきます。お願いします。」のような誤用があることが確認されており、留意する必要がある。

7.2.4 日本語母語話者に対する容認度調査の結果との比較

表7-3から、学習者の使用意識には、母語話者の容認度と同様の傾向（拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴ）が見られることが分かった。特に拡大用法Ⅲに該当する質問⑤、⑥、⑦、⑧において「適切」と回答した学習者の割合がそれぞれ77.3%、72.7%、93.9%と87.9%であり、母語話者を上回る高水準になっている。また、

母語話者では特に容認度が低い質問⑨～⑭においても、母語話者ほどではないが「不適切」と回答した者の割合が比較的高いという結果が得られた。

ただし、「～（さ）せていただく」の基本用法においては、母語話者の容認度と学習者の使用意識に相違が見られた。基本用法に該当する質問①、②に対する母語話者の容認率はそれぞれ 73.1%、76.8%と高かったが、「適切」と回答した学習者の割合は、質問①では 48.5%と「不適切」の割合を下回り、質問②では 54.5%と僅差であった。

第 5 章で述べたように、「～（さ）せていただく」の各用法に対する母語話者の容認度はその用法の使用頻度に影響されると考えられる。また、第 4 章の「青空文庫」を用いた「～（さ）せていただく」の用例収集では、拡大用法Ⅲの用例が 111 例と全用法の中で最も多く、基本用法に該当する用例の 3 倍近くにも上った。そのため、母語話者の拡大用法Ⅲに対する容認度の高さは、その用法の使用頻度の多さに由来する (pp. 62 - 63)。ただ、母語話者の場合、「～（さ）せていただく」の基本用法に関する知識は自然に身につくもので、拡大用法の使用頻度が高くても、基本用法を「誤用」として捉える人は少ないと思われる。それに対して、学習者は元来「～（さ）せていただく」に関する知識を持っていないため、習得していない用法を「誤用」として認識してしまう可能性を排除できず、母語話者の基本用法の使用頻度が低下すると、学習者が習得する機会が減るため、結果的に学習者の使用意識の低下につながると考えられる。

以上のことから、基本用法を「不適切」な使用として捉える学習者が多いのは、学習者を取り巻く言語環境において「～（さ）せていただく」の基本用法の使用頻度が学習者に浸透する水準に達していないという要因の存在が考えられる。さらにそれ以外にも、日本語教科書や日本語教育現場における「～（さ）せていただく」の扱い方などの要因も関与している可能性があり、このことについては次章で論じることにする。

7.2.5 外国人学習者の使用意識の類型

第 5 章では、クラスター分析を通して、日本語母語話者の容認の類型に「用法区分型」、「容認傾向型」、「非容認型」の 3 クラスターが存在することと、「用法区分型」が多数派であることを明らかにした。本項では母語話者と学習者との比較対照のため、学習者の使用意識の類型について検討することにする。

そこで、66 名の対象者の回答にウォード法を使用したクラスター分析を行った。その結果を示すデンドログラムが図 7-1（次頁）である。

図 7-1 学習者のデンドログラム

Ward 法を使用するデンドログラム
再調整された距離クラス結合

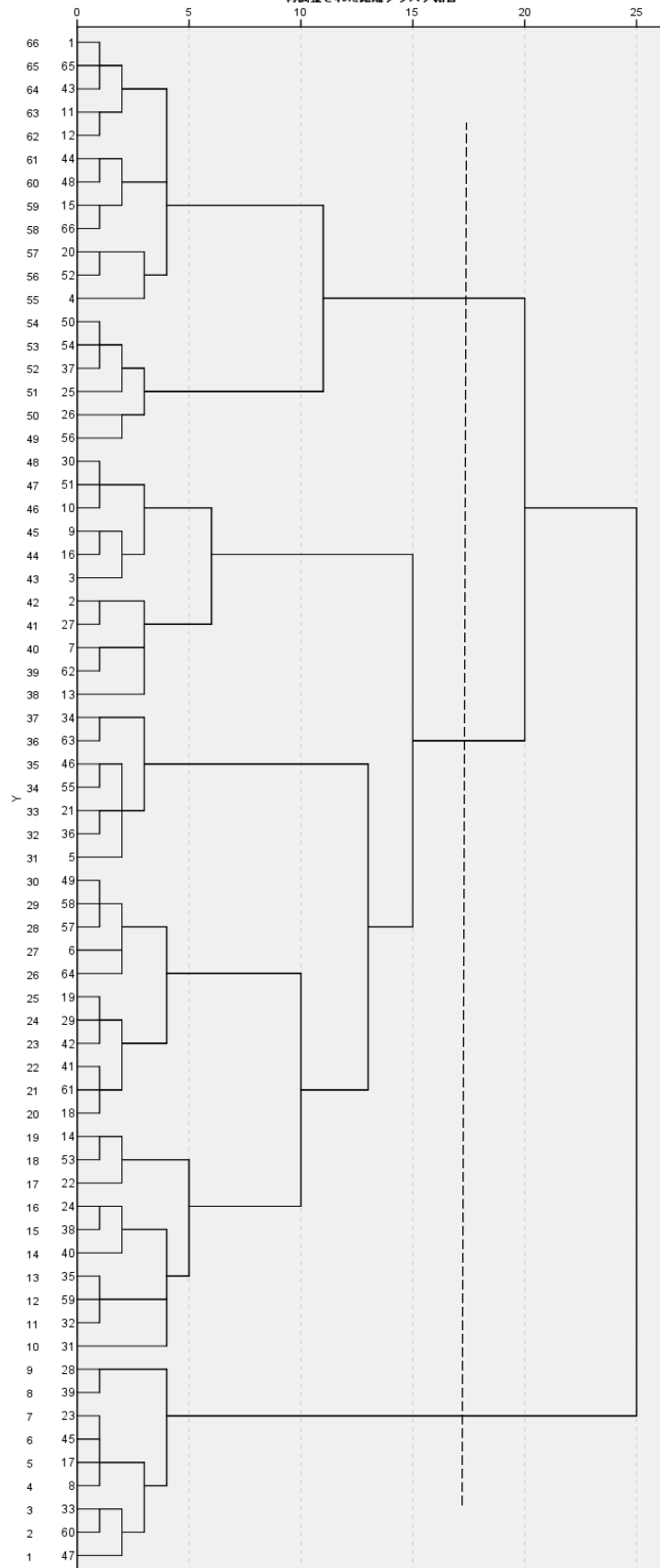
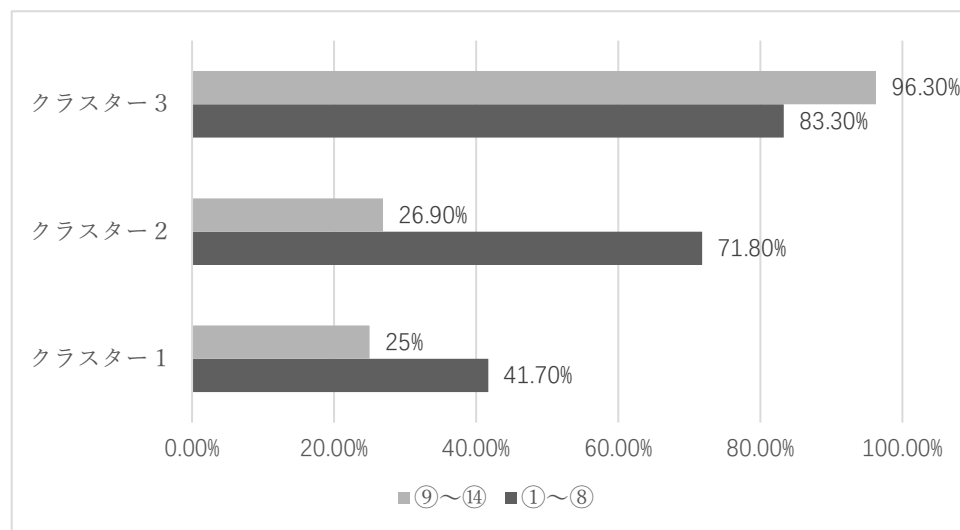


図 7-1 では、点線が示しているように、3つのクラスターが適切であると判断した²⁴。母語話者の場合は、質問①～⑧及び⑨～⑭に対する回答状況を基準にクラスターの特徴を検討したため、ここでは同様の手法を用いて考察することにする。そこで、3つのクラスターごとに、質問①～⑧及び⑨～⑭に対する「適切」の平均回答率を算出した。その結果を図 7-2 に示す。

図 7-2 3 クラスターの質問別の「適切」の平均回答率



第 1 クラスターには 18 名の回答者が属しており、全体の 27%に相当する。このクラスターでは、質問①～⑧に対する「適切」の平均回答率が 41.7%と、3 クラスターの中で唯一 50%を下回るうえ、質問⑨～⑭に対する「適切」の平均回答率も 25%と最も低い。この特徴は、母語話者の「非容認型」と軌を一にしている。

第 2 クラスターには 39 名が属し、対象者全体の 59%を占めている。このクラスターでは、質問①～⑧に対する「適切」の平均回答率が 71.8%と比較的高水準である一方、⑨～⑭に対する「適切」の平均回答率が 26.9%であり、第 1 クラスター並みの低い水準にとどまる。この特徴は、母語話者の「用法区分型」に類似する。

第 3 クラスターには 9 名が含まれており、全回答者の 14%に相当し、最少である。このクラスターは、質問①～⑧、⑨～⑭の双方において「適切」とした平均回答率が 3 クラスターの中で最も高く、全用例に高い使用意識を示している。この特徴は、母語話者の「容

²⁴ 図 7-1 では、4～6 クラスターの場合、枝が短くなっており、次は 7 クラスターが適切であるが、分類が細かすぎる恐れがある。

認傾向型」に類似している。

以上、本節ではクラスター分析を通して、学習者の使用意識には、母語話者の容認度の型と同様の「用法区分型」、「容認傾向型」、「非容認型」の3パターンが存在することと、母語話者と同様に「用法区分型」が多数派であることが明らかになった。ただし、母語話者の場合、「非容認型」の回答者数が全体の1割に満たず、最少であるのに対して、学習者では「非容認型」の回答者数が「容認傾向型」を上回り、全体の3割近くを占めるも分かった。

7.3 まとめと本章の結論

本章ではまず、「日本語学習者会話データベース」及び「KY コーパス」を用いて、「～（さ）せていただく」についての学習者の大まかな使用状況を考察した。その結果、先行研究で指摘されている語用論的な誤りによる誤用は見られなかった一方、「～ていただく」との混同が多発していることが分かった。その理由については、教科書調査などを通して次章で検討することにした。

また、本章ではアンケート調査を通して、学習者の使用意識には母語話者の容認度と同様のクラスターが存在することや、用法別の使用意識と容認度には同様な傾向（拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴ）が存在することを示し、学習者の使用意識と母語話者の容認度には一定程度の関連性があることを確認した。しかしその一方で、学習者の使用状況には、基本用法に対して使用意識が低下することや、全用法に非容認的態度を示す回答者が比較的多いことなど、母語話者の容認度との相違も確認され、そこには習得方法などの要因が関わっていると思われる。その詳細は次章で述べることにする。

第8章 日本語教育における「～（さ）せていただく」の捉え方

習得方法に関する前章の調査では、調査対象となる外国人日本語学習者の6割以上が日本国内で1年以上の正規の日本語教育を受けた経歴があるにもかかわらず、正規のルートで「～（さ）せていただく」を習得した学習者が全体の3割にも満たないことが明らかになった。このことは、a)「多くの日本語教科書・日本語教育の現場において「～（さ）せていただく」が取り上げてられていない」ことを示唆している。また、拡大用法Ⅲに対する容認度及びその使用頻度の高さから、本研究では「許容範囲内」の用法として捉えることにしているが、b)「日本語教育では現在、拡大用法Ⅲをどのように扱っているのかは不明である」。

上記a) b)以外にも、日本語教育における「～（さ）せていただく」の捉え方について、前章では以下の問題点を示した。

- 1) 「～（さ）せていただく」が取り上げられるタイミング
- 2) 基本用法に対する学習者の使用意識が低下する理由
- 3) 「～ていただく」との混同が起きる理由
- 4) 学習者が休暇の許可を求める場面で「～（さ）せていただく」を多用する理由

そこで本章では、外国人日本語学習者用の日本語教科書における「～（さ）せていただく」の取り上げ方、並びに日本語教育の現場において、学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明内容を考察することにした。

8.1 日本語教育教科書における「～（さ）せていただく」の取り上げ方

宇都宮（2005）によれば、日本語能力試験出題基準では、「～（さ）せていただく」に関する内容が表8-1のように分類されている。

表8-1 日本語能力試験出題基準における「～（さ）せていただく」（宇都宮 2005:p40）

文法		例文	レベル
使役	V(サ)セル	私は弟に部屋の掃除をさせた。（強制）	3 級

		妹を泣かせてはいけません（誘発）	
受給：行為	—テイタダク	私は高校のとき、鈴木先生に英語を教えてくださいました。	3 級
敬語：謙譲語	—（サ）セテイタダク	先生の辞書を利用させていただいた。	2 級

日本語能力試験の各レベルの認定基準²⁵によれば、3 級は初級日本語コースを修了したレベル、2 級は中級日本語コースを修了したレベルにそれぞれ相当する。「～（さ）せていただく」表現自体は2 級に分類されているが、関係する文法が3 級に分類されているため、日本語教科書では「～（さ）せていただく」が初級後半または中級で初出する可能性が高いと思われる。

これを基に、初級、中級日本語教科書を対象として、学習項目としての「～（さ）せていただく」の有無及びその取り上げ方を調査した。調査対象は、『日本語教材リスト 2018－2019』から、2015 年以後に出版されたものや比較的広く使用されている総合教科書にビジネス用教科書を追加した計 25 冊（初級 10 冊、中級 10 冊²⁶、ビジネス用 5 冊）とした。その結果、初級用教科書では 4 冊、中級及びビジネス用の教科書では 3 冊に、「～（さ）せていただく」が取り上げられていることを確認した。対象となる教科書のリストとそれぞれで取り上げられている用法は、以下の表 8－2 の通りである。

表 8－2 使用する教科書の詳細

教科書名	出版社・編者（出版年）	取り上げた用法	
		基本用法	拡大用法
総合教科書：初級			
『大学の日本語初級ともだち Vol. 1・2』	東京外国語大学出版会（2017）	○	×
『みんなの日本語初級 2』 第 2 版	スリーエーネットワーク (2013)	○	×

²⁵ 日本語能力試験のウェブサイト（<https://www.jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf>、2021 年 3 月 1 日アクセス）に掲載されている認定基準による。

²⁶ 中上級用教科書 4 冊を含む。

『「初級」語学留学生のための日本語 2』	凡人社（2002）	○	×
『新文化初級日本語 2』	文化外国語専門学校（2000）	○	×
『初級日本語「げんき」 2』第3版	ジャパンタイムズ（2020）	×	×
『きょうから話せる!にほんごだいじょう ぶ1・2』	サンアカデミー日本語センター （2015）	×	×
『初級日本語あゆみ Vol. 2』	関西外語専門学校日本語教育部 （2013）	×	×
『中日交流標準日本語 初級上・下』新 版	光村図書出版株式会社（2005）	×	×
『初級ひらけ日本語 下』新装版	拓殖大学（2004）	×	×
『日本語初級 2』新装版	東海大学出版会（2002）	×	×
総合教科書：中級			
『できる日本語ことば・表現ワークブッ ク：中級』	凡人社（2018）	○	×
『中級日本語 上』新装改訂版	凡人社（2015）	○	×
『新日本語の中級：本冊』	スリーエーネットワーク （2000）	○	×
『上級で学ぶ日本語：テーマ別』3訂版	研究社（2016）	×	×
『中級へ行こう：日本語の文型と表現 55』第2版	スリーエーネットワーク （2016）	×	×
『中・上級日本語教科書日本への招待』 第2版	東京大学出版会（2008）	×	×
『文化中級日本語 1』第2版	文化外国語専門学校（2004）	×	×
『日本語中級 J501：中級から上級へ』 改定版	スリーエーネットワーク （2001）	×	×
『生きた素材で学ぶ中級から上級への日 本語』	ジャパンタイムズ（1998）	×	×
『文化中級日本語 2』	文化外国語専門学校（1997）	×	×

ビジネス用教科書			
『人を動かす!実戦ビジネス日本語会話 中級 1』	スリーエーネットワーク (2016)	○	○
『ビジネス日本語マスターテキスト』	IBC パブリッシング (2017)	×	○
『ビジネスのための日本語 初中級』新装 版	スリーエーネットワーク (2006)	×	○
『しごとの日本語 FOR BEGINNERS』	アルク (2018)	×	×
『中級から伸ばすビジネスケースで学ぶ 日本語』	ジャパントイムズ (2014)	×	×

以下では、初級～中級～ビジネス用教科書の順に、各教科書における「～（さ）せていただく」の取り上げ方を見ていく。

8.1.1 初級教科書での取り上げ方

初級教科書では、10 冊中、4 冊に「～（さ）せていただく」についての説明があることを確認した。また、その内容はすべて基本用法についてのものであり、拡大用法を扱う教科書は見られなかった。

『大学の日本語初級ともだち Vol.2』（東京外国語大学出版会、2017）の第 24 課「依頼」では、依頼の文型として「V ない（さ）せて {ください・くださいませんか・いただけませんか}」が提示されているが、その後の説明は「～（さ）せてください・くださいませんか」に対するもののみであり、「～（さ）せていただく」については例文「すみませんが、明日は休ませていただけませんか」の提示のみにとどまり、用法に関する説明はない。なお、この教科書では「～（さ）せていただく」が取り上げられる前に、第 7 課では授受動詞、第 20 課では授受動詞の補助動詞用法、第 23 課では使役文が既に学習されている。

『みんなの日本語初級 2 第 2 版』（スリーエーネットワーク、2013）では、使役形を扱う第 48 課で「～（さ）せていただく」の用例として「休ませていただけませんか」が提示されている。学生用テキストではこの例文の提示のみにとどまるが、教師用指導書の『教え方の手引き』には、「学習目標：丁寧に許可を求めることができる」や「相手に自分の行為を許可してもらえるように、丁寧に依頼する場合に」「～（さ）せていただく」

を用いる」など、「～（さ）せていただく」の基本用法についての説明がある。なお、「～（さ）せていただく」が取り上げられる前、第 41 課では授受動詞が学習されている。

『「初級」語学留学生のための日本語 2』（凡人社、2002）では、依頼表現を扱う第 37 課で「～（さ）せてください」とともに「～（さ）せていただけませんか」を文型として提示しているが、用法などの説明はない。なおこの教科書では、第 28 課では授受動詞の補助動詞用法、第 29 課では「～ていただけませんか」、第 36 課では使役文をそれぞれ取り上げている。

『新文化初級日本語 2』（文化外国語専門学校、2000）の第 35 課「お待たせして」では、「今日の講演を録音させていただきたいんですが」を含む「～（さ）せていただく」の例文 3 文が提示されているが、この教科書も例文の提示のみであり、それ以上の説明はなされていない。

8.1.2 中級教科書での取り上げ方

中級教科書では、10 冊中、3 冊に「～（さ）せていただく」が取り上げられていることが確認された。また、用法については初級教科書と同様に、基本用法のみの扱いにとどまり、拡大用法を取り上げるものは見られなかった。

『できる日本語ことば・表現ワークブック：中級』（凡人社 2018）の第 8 課では、学習目標を「理由を話して、相手に丁寧に許可を求めることができる」とする中で、「目上の人に丁寧に許可を求めるときに使う表現」として「～（さ）せていただく」を取り上げている。

『中級日本語 上 新装改訂版』（凡人社 2015）の第 12 課では、許可を求める文型として「～させて [くれる・もらう・あげる・やる・ほしい]」を提示しており、また例文として「おじがやっているレストランへ遊びにいくと、好きな料理をたべさせてくれる。私たちは、いつでも食べさせてもらえるので、喜んで行っている」を取り上げている。用法についてなど、それ以上の説明はないが、基本用法の例文として文末が「疑問型」（椎名 2018:62）ではなく「言い切り型」（同上）のものを取り上げているのはこの教科書のみである。なお、この教科書では初級（上）の第 8 課に授受動詞、初級（下）の第 22 課に授受動詞の補助動詞用法をそれぞれ取り上げている。

『新日本語の中級：本冊』（スリーエーネットワーク 2000）の第 4 課「許可をもら

う」では、学習目標を「丁寧に許可を求めることができる」とし、その文型として「Vさせていただきます」を取り上げている。教科書の本冊では例文「早退させていただきます」の提示に留まるが、教師用指導書では「相手の自分への使役の形だが、状況は目上の人への申し出、許可申請の、強い要求表現。どうしてもという積極性が感じられる」と使用上の注意を促し、さらに、「許可を求める表現の選択や許容度というのはかなり個人差もある事柄なので、できれば教師が決めつけてしまわず、一般の日本人に対する課外インタビュー活動なども実施できれば良いだろう」と、母語話者の実際の使用状況に合わせて指導するように促す内容も盛り込まれている。

8.1.3 ビジネス用教科書での取り上げ方

ビジネス用教科書では、5冊中、3冊に「～（さ）せていただく」についての説明があったが、総合教科書では基本用法のみが取り上げられているのに対して、ビジネス用教科書では拡大用法のみの扱いである。

『ビジネス日本語マスターテキスト』（IBCパブリッシング 2017）は「～（さ）せていただく」表現の実用性に重心を置き、様々な場面における「～（さ）せていただく」の拡大用法Ⅲの機能及び使用効果を実例を挙げながら説明している。例えば、「残念ながら、今回の件は見送らせていただきます」は「断る際のクッションことば」、「来月より御社を担当させていただきます、営業部のキムでございます」は「取引先に敬意あるかつ礼儀正しいあいさつ」、「これで失礼させていただきますが、何かお手伝いすることはありますか」は「先に帰る際の上司や先輩に対する気配り」として挙げられている。

『人を動かす!実戦ビジネス日本語会話 中級1』（スリーエーネットワーク 2016）について、この教科書は読解中心のため、本文テキストでは「私にできることでしたら、なんでもお手伝いさせていただきます」という拡大用法Ⅲの使用例が見られる。ただし、文型として取り上げられていない。

『ビジネスのための日本語 初中級 新装版』（スリーエーネットワーク 2006）の第3課「許可」では、「～（さ）せていただく」は文型として提示されているが、許可を求める用法の説明はなく、拡大用法類型Ⅲが「許可をもらったことを確認する表現」として以下の例文が取り上げられている。

社員：「明日伺ってもよろしいでしょうか。」

上司：「ええ、どうぞ。」

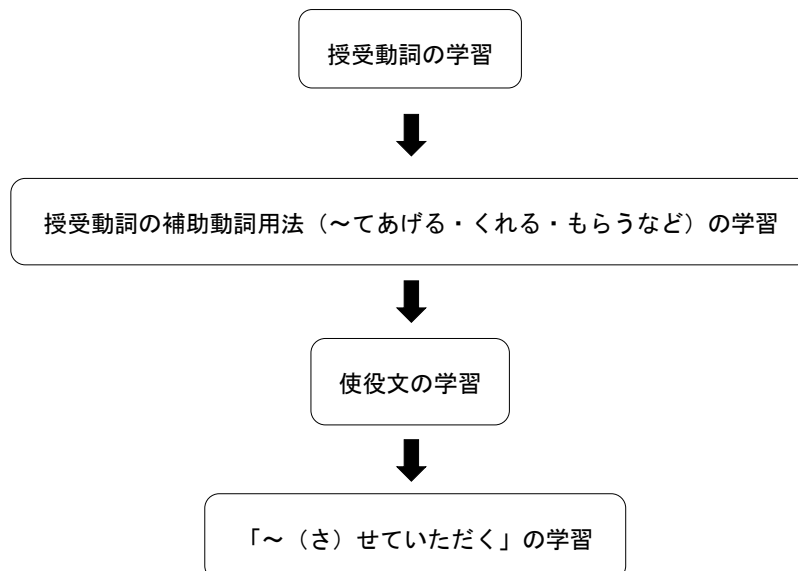
社員：「では、そうさせていただきます。」

8.1.4 日本語教科書調査のまとめと分析

8.1.4.1 「～（さ）せていただく」の学習段階

今回の調査では、総合教科書 20 冊のうち、「～（さ）せていただく」を取り上げているものは 7 冊に留まり、その割合は 35%であった。また、その用法はすべて「依頼・許可求め」の基本用法であり、拡大用法を扱う総合教科書は本調査では見当たらなかった。また、「～（さ）せていただく」の学習段階は概ね次のようになっている。

図 8-1 「～（さ）せていただく」の学習段階



一方、ビジネス用教科書では、計 5 冊のうち、「～（さ）せていただく」を取り上げているものは 3 冊で、その割合は 60%であった。また、その用法はすべて拡大用法で、基本用法を取り上げるものはなかった。基本用法と拡大用法の両方を取り上げる教科書も今回の調査では確認できなかった。また、ビジネス用教科書では総合教科書の学習段階のような決まったパターンは確認できなかった。これは、文法の統合性よりも、文型の機能を重要視するビジネス用教科書の特性によるものであると思われる。

また、ビジネス用教科書に「～（さ）せていただく」の拡大用法が多く取り上げられているのは、拡大用法が「商業敬語」としてのイメージが強いからだと考えられる。この点

については米澤（2001）も、「（「～（さ）せていただく」の拡大用法が）特に客である相手への配慮が不可欠な商売上で頻用され、商業敬語と位置づけられる」と指摘している。一方、総合教科書には拡大用法が取り上げられていない。また、ビジネス用教科書では類型Ⅲの扱いが中心であり、今回の調査において、それ以外の類型は見られなかった。これは、前述の拡大用法Ⅲに対する母語話者の容認度の高さと無関係ではないかもしれないが、現時点では断定的なことは言えないであろう。

8.1.4.2 「～ていただく」と「～（さ）せていただく」との混同について

「～ていただく」との混同という問題は、形式的類似性に加え、使用場面に「丁寧さが求められる」ことであつたり「相手をお願いする」場面で用いられるという共通点があることが大きな理由として考えられるが、今回の調査では、教科書の中で、その使い分けに注意喚起をしているものは、『大学の日本語初級ともだち Vol.2』と『人を動かす!実戦ビジネス日本語会話 中級1』の2冊のみであつた。

8.2 学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査

本節では、日本語教育の現場において、学習者が「～（さ）せていただく」について日本語教師からどのように説明を受けたかを検証してみる。

前章の習得方法に関する調査で「A. 日本語教科書・日本語授業で勉強しました」と回答した19名（本稿での「正規ルート」を経験した学習者にあたる）に「～（さ）せていただく」に関する聞き取り調査への協力を依頼し、8名から協力が得られた。以下ではまず、学習者の回答内容を示し、その後、日本語教師の説明パターンについて考察する。なお参考までに、（ ）内に学習者の日本語能力試験レベルを記した。

8.2.1 聞き取り調査の内容

ここでは、学習者A～Hの回答内容を以下に提示する²⁷。なお、下線は筆者によるものである。

²⁷ 協力者全員が中国人であるため、聞き取り調査は中国語で行われた。ここに掲げているのは、筆者が協力者の回答を日本語に翻訳したものである。なお、インタビューへの回答の原文（中国語）は付録2に掲げる。

学習者 A (N3) : 「～(さ) せていただく」を 使わないほうがいい と (先生に) 言われた。

学習者 B (N4) : 休みたいときは「休みたいです」より「休ませていただけないでしょうか」のほうが 丁寧 との説明を受けた。

学習者 C (N1) : 「～(さ) せていただく」は 敬語だ と教わった。使用する場面として、先生など目上の人に許可を求める 際に、「その本を拝借させていただきたいんですが」のように使う。

学習者 D (N1) : 依頼の文型 として「～(さ) せていただけませんか」を勉強したが、「～(さ) せていただきます」の用法については勉強したことがない。

学習者 E (N3) : 「明日休ませていただけませんか」は 大丈夫 だが、店の看板にある「休ませていただきます」は 誤用 だと教わった。

学習者 F (N1) : 「～(さ) せていただく」は他人に 許可を求める場合に使う表現。また先生から「依頼以外の場面での使用」も見られるが、許可を求めているわけでもないのに、あえて許可を求めているような言い方をするのは 少々うるさく感じる」との説明を受け、実際に日本語授業での発表で「説明させていただきます」を使用した際、先生に「「説明いたします」で十分 だ」と指摘されたこともある。

学習者 G (N1) : 「丁寧に許可を求める」と「自分の行動を丁寧に伝える」の両方の使用があるが 後者のような使用は勧めない。その場合は普通「いたします」や「します」でいい」と教わった。

学習者 H (N2) : 先生の話によれば、「～(さ) せていただく」は 主に許可を求める場合 に使うが、現在、自分の行動をいう使い方も多い そうだ。

8.2.2 休暇の許可を求める場面で多用されることについて

「～（さ）せていただく」を学習項目として取り上げている総合教科書は、全 20 冊のうち 7 冊で、その内「休ませていただけますか」や「早退させていただけますか」という休暇の許可を求める用例を提示している教科書は、3 冊である。また、教室で受けた説明の中でこの休暇の用例を提示されたとしている正規ルート体験者は、19 名のうち 2 名（10.5%）と僅かである。いずれも、学習者が休暇の許可を求める場面で「～（さ）せていただく」を多用する理由とするには無理のある数値である。筆者は、この目上の者に休暇の許可を求める談話場面を、学習者が日常的に体験している可能性に解答を求めたいと考えているが、更なる検討については次回以降の研究課題としたい。

8.2.3 日本語教師による「～（さ）せていただく」の説明パターン

本項では、前項で示した学習者 A～H の回答内容の下線部に着目し、日本語教師の説明の特徴について考察する。

学習者 A は教師の説明から「～（さ）せていただく」表現の存在を知っていたが、当該教師の説明には、用法を問わず、「～（さ）せていただく」表現の使用を全面的に否定するという特徴が見られた。これを「説明パターン 1」とする。

学習者 B の場合、教師からは基本用法に該当する用例の提示とともに、その使用効果が「丁寧である」ことについても説明もあった。学習者 C の場合、教師は「～（さ）せていただく」が敬語表現であることと、基本用法の使用場面・対象についての説明をしたうえで、用例の提示もしたため、比較的全面的な説明であった。学習者 D は、基本用法の使用場面が「依頼」であることを理解していたが、それ以外の説明はなされなかった。

このように、学習者 B～D の場合、教師は基本用法についての説明をある程度行った一方、拡大用法には触れていなかった。これを「説明パターン 2」とする。

学習者 E の場合、教師は基本用法と拡大用法類型Ⅲの双方を取り上げたが、拡大用法Ⅲの使用については否定的な態度を取っていた。また、学習者 F、G の場合、教師は基本用法と拡大用法の使用場面を同時に説明していたが、後者については使用しないよう学習者に促していた。さらに学習者 F は、拡大用法を使用した場面で教師に指摘されたことも経験も持っていた。

このように、学習者 E～G の場合、教師は基本用法と拡大用法の双方を取り上げたが、拡大用法の使用には否定的な態度を取っていた。これを「説明パターン 3」とする。

学習者 H の場合、教師は基本用法と拡大用法の使用場面について説明した。また、特定の用法の使用については賛否を示しておらず、使用するかどうかの判断を学習者に委ねる形を取っていた。これを「説明パターン 4」とする。

このように、本調査からは「～（さ）せていただく」に対する日本語教師の説明に少なくとも 4 つのパターンが存在することが分かった。各説明パターンの特徴を以下の表 8 - 3 にまとめる。

表 8 - 3 各説明パターンの特徴

説明のパターン	各用法の取り上げ方	
	基本用法	拡大用法
パターン 1	×	×
パターン 2	○	×
パターン 3	○	△
パターン 4	○	○

*○＝取り上げた

△＝取り上げたが、その使用については否定的な態度を示した

×＝取り上げなかった

4 パターンのうち 3 パターンで基本用法が取り上げられているのに対して、拡大用法について何らかの説明を行っているのは 2 パターンである。さらにその使用に否定的な態度を示さないのはパターン 4 の 1 種類のみであった。

8.2.4 各説明パターンの問題点

ここでは、学習者 A～H の回答内容を見ながら、各説明パターンに対する筆者の見解を述べる。

「パターン 1」では、日本語教師が「～（さ）せていただく」表現の全用法の教授・使用に消極的な態度を示している。教師がこのような態度を取ることは、「「～（さ）せていただく」表現に対する教師自身の容認度が低下する」や、「「～（さ）せていただ

く」の使用が負の効果をもたらすこともあり得るため、あえて取り上げないようにする」など、様々な可能性が考えられ、断言はできないが、仮に後者の場合、その使用に伴うリスクを学習者に客観的に伝えることが求められる。本稿第7章で、拡大用法Ⅲに対する学習者の使用意識が高いことが分かったが、その使用にマイナス効果が伴うことも理解する必要がある。あえて触れないことは、ただ学習者の使用意識を低下させるだけで、自然な「～（さ）せていただく」表現の産出にはつながらないため、その適用の範囲と使用する際のリスクを同時に学習者に示すことが大切なのではないかと筆者は考える。

「パターン2」では、学習者は「～（さ）せていただく」の基本用法についてある程度の説明を受けている。ただ、学習者Bの場合、「～（さ）せていただく」は丁寧さが求められる場面で使用する一種の待遇表現であることをある程度理解している一方、許可を求めるという基本的な用法やその敬意の程度、使用が適切な相手などについての説明がなされていない。そのため、「「～（さ）せていただく」=丁寧な表現」という偏った認識が生じやすく、これが「～（さ）せていただく」の誤用や過剰使用を誘発する可能性は排除できない。また、学習者Dの場合、「依頼・許可求め」という「～さ（せ）ていただけませんか」の機能については理解しているが、その使用には「敬意」が伴うことについての説明がなされていないため、高い敬意が求められない場面での不適切な使用を引き起こす恐れがある。

「パターン3」では、日本語教師が基本用法と拡大用法の双方を取り上げているが、拡大用法の機能に「話し手自身の行為を丁寧に伝達・宣言する」用法があることにまで言及したのは学習者Gに対してのみであった。また、この説明パターンでは教師が拡大用法について否定的な態度を取っており、特に学習者Eの場合、母語話者の容認度が高い拡大用法Ⅲが「誤用」とであると決めつけられている。学習者Fの場合、教授者が「少々うるさく感じる」と説明しており、これは使用効果についての説明を意図したものであると思われるが、当該教師の好悪が含まれているとも受け取れ、客観性に欠ける嫌いがある。

「説明パターン4」では、学習者が基本用法と拡大用法の双方について比較的客観的な説明を受けているが、拡大用法の類型や使用場面、使用効果などについての説明が皆無であったため、不十分な点が多かった。

8.3 まとめと本章の結論

本章では、日本語教科書及び日本語教育の現場における「～（さ）せていただく」の取り扱いの現状を考察した。総合教科書では、20冊のうち、「～（さ）せていただく」表現を取り上げているのは約3割の7冊にとどまり、決して多いとは言えない。また、その内容は基本用法に関するもののみであり、拡大用法Ⅲの使用頻度が最も多いという現状が総合教科書にほとんど反映されていないことが分かった。その一方、ビジネス用教科書の約7割では拡大用法に関する説明が確認でき、本章ではその理由について「拡大用法が「ビジネス敬語」としてのイメージが強いため」であるとした。

次に「休ませていただけませんか」や「早退させていただきませんか」などの休暇の許可を求める用例を学習者が多用する理由について検討したが、蓋然性として学習者が日常的に体験していることが理由として考えられることに言及した。

学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査では、その説明内容に4つのパターンが存在することが分かった。そのうち、拡大用法を取り上げているのはパターン3と4の2種類であり、さらに、パターン4は唯一拡大用法の使用に否定的な態度を示さなかった。また、拡大用法に対する説明では拡大用法の類型、機能や使用効果、過剰使用の危険性などにほとんど触れておらず、不十分な点が多く残されている。このことは、「～（さ）せていただく」の拡大用法がまだ日本語教育に受容されていない可能性を示唆するものであるが、今後の日本語教育において拡大用法の取り扱い方がどのように変化していくのか、引き続き注目していきたい。

基本用法に対する学習者の使用意識が高まらないのは、本調査で明らかになった教科書への取り上げ方の少なさと、教師の消極的な姿勢とからの影響が無視できないものと思われる。それに対して、第7章で述べたように、拡大用法Ⅱ、Ⅲに対する学習者の高い使用意識には母語話者の使用状況による影響が推測されるという点も考慮すると、学習者を取り巻く言語状況との関連について更なる調査研究が必要と思われる。今後の課題としたい。

第9章 「～（さ）せていただく」の教授に関する提言

本章では、第3章～第8章の議論を踏まえ、日本語教育における「～（さ）せていただく」のあるべき姿を検討し、その教授に関する提言を行う。

9.1 日本語教育文法に基づく「～（さ）せていただく」の用法分類

9.1.1 日本語教育における「80%を目指す文法」の必要性

庵（2010a）は、「日本語記述文法では、「体系」「隙間のない記述」といったものが重視されるが、こうしたものを重視すると、規則は必然的に、数が増えるか説明が抽象的になる」と述べている（p. 41）。日本語母語話者の場合、日本語文法の規則が増えたり、抽象的になっても、それを理解するのは困難なことではない。その理由について庵（同上）は、「母語話者が文法性判断をする能力（文法能力）を持っているからである」としている。

その一方、日本語教育文法について庵（2010a、2010b）は、その目的が産出であることを指摘し、「規則のカバー率 100%を目指す文法」（庵 2010a:44）よりも「規則の数を学習者が操作可能なレベルまで刈り込んだもの」（庵 2010b:28）が必要であるとし、「80%を目指す文法²⁸」（同上）の必要性を提唱した。また、「80%を目指す文法」を実現するために、「有標・無標」という概念が重要であると論じている。以下に引用する。

²⁸ ここでの「80%」という数字は象徴的なもので、正確に 80%をカバーするという意味ではない。（庵 2010b:29）

2つの類義関係にある言語形式A、Bがあるとき、文脈Cにおいて、言語環境Xでは形式Bのみが使われ、その他の言語環境では形式Aが使われるとき、AとBのうち、Aは無標の形式であり、Bは有標の形式である。

文脈C	
A	: not X → 無標
B	: X → 有標
形式	環境

(庵 2010a:46)

ここで本稿の場合を考えると、第3章で提示した「～（さ）せていただく」の用法の分類は、すべての用法を漏れなく記述することを目指した日本語記述文法の延長線上に位置するものであると言えよう。しかし、庵（同上）が指摘している通り、このような分類を日本語教育の現場に適用しようとしても、限られた時間の中で、学習者が諸々の情報（恩恵・許可の有無、許可の様態（実在か、形式上か））を処理することは困難であると思われる、自然な「～（さ）せていただく」表現の産出につながるとは考えにくい。そのため、日本語記述文法とは別に、日本語教育文法上の「～（さ）せていただく」の用法分類を検討する必要がある。

9.1.2 「80%を目指す文法」に基づく「～（さ）せていただく」の用法分類

ここでは、前項で取り上げた「無標・有標」という概念に基づき、「～（さ）せていただく」表現の自然な産出を目指す用法分類を検討する。

宇都宮（2005）によれば、自然な「～（さ）せていただく」表現を産出するには、「～（さ）せていただく」表現を使用する場合は、「人間関係」や「場面」を選ぶことが重要である」とされる（p.42）。この点について考えてみたい。

まず「人間関係」についてだが、「～（さ）せていただく」の使用は、敬意の対象となる相手との会話や、公的な場での使用が基本である。友人や後輩との会話など、くだけた場面での使用は、不適切である。

次に「場面」では、「～（さ）せていただく」が使用される最も基本的な場面は、「先生の本を使わせていただいてもよろしいでしょうか」のような、「①自分の行動に対する許可を相手側に求める」という場面であるが、1～6章で述べた通り、現在その使用は、

「②自分の行動を相手側に伝える」場面にまで拡大している。また、②の場合には、さらに以下の２種類の使用場面が存在する。

まず、「a)自分の行動に聞き手が関与している場面」である。例えば、「あなたのお家で休ませていただきます」は、話し手の行為に聞き手が関与していると考えられる。この場合、聞き手を形式上の許可者として見立てることができ、第３章の分類では拡大用法Ⅱ、Ⅲがこの②-aに該当する。

次に、「b)「自分の行動」に聞き手が関与していない（または関与しているかどうかが不明な）場合」である。「夏休みは沖縄に旅行させていただきます」のような例である。この場合、聞き手を形式上の許可者としても見立てることができない。第３章の分類では拡大用法Ⅳ、Ⅴがこの②-bに該当する。

こうして、「人間関係」と「場面」を合わせて考えると、「～（さ）せていただく」の用法を以下のように記述することが可能である。

１）使用の前提＝丁寧さが求められる場面

２）用法

用法A：自分の行動に対する許可を相手側に求める。（上記①）

用法B：自分の行動を相手側に伝える。なお、相手側はその行動に関与している。（同②-a）

用法C：自分の行動を相手側に伝える。なお、相手側はその行動に関与していない（または関与しているか不明である）。（同②-b）

この分類法を「無標・有標」の概念を用いたフローチャートにしてみる。

図 9-1 「～（さ）せていただく」の各用法の使い分け 庵（2010a）に倣って著者が作成

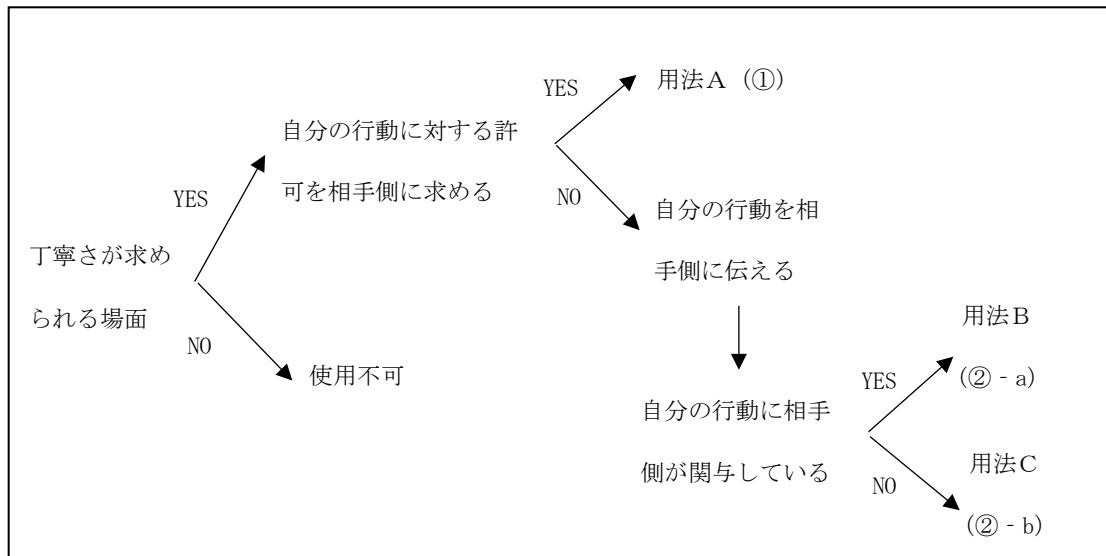


図 9-1 は次のような無標・有標の概念に基づいている。

a. 「丁寧さが求められる場面」

無標の場合は使用不可（その場面の改まり度に適応する表現を使用）、有標の場合は使用可能

b. 「自分の行動に対する許可を相手側に求める」

1) 有標の場合は用法 A

2) 無標の場合、自分の行動に相手側が関与している場合は用法 B、関与していない場合は用法 C

この分類法と第 3 章で論じた分類法の違いは、「恩恵」「事実上の許可」「形式上の許可」という概念を排除したことと、用法の種類を 5 種類から 3 種類にまで減らしたことである。その一方、「自分の行動に対する許可を相手側に求める」などの具体的な場面の提示により、分かりやすさの向上を図った。

この分類法は、「～（さ）せていただく」のあらゆる用法を漏れなくをカバーすることを意図するものではなく、その結果として学習者にとって容易な習得や産出が可能になるのではないだろうか。

9.2 「～（さ）せていただく」の学習について

本節では、「～（さ）せていただく」の各用法を学習する必要性と学習のタイミングについて述べる。

9.2.1 「～（さ）せていただく」の学習の必要性

本稿第7章の「～（さ）せていただく」の習得方法に関する調査では、正規のルートで習得した学習者は66名の内19名（28.8%）であり、また第8章の教科書調査では、「～（さ）せていただく」表現を取り上げたものは25冊のうち10冊（40%）にとどまり、いずれも高い割合とは言えないものであった。しかしその一方で、「～（さ）せていただく」は接客場面をはじめ、学習者を取り巻く言語環境にもある程度の勢力で浸透しており、運用が求められる表現であると言える。そのため、日本語教育において「～（さ）せていただく」が、さほど多く取り上げられていない現状は、使用状況の実態を反映していないものと考えざるをえない。「～（さ）せていただく」は学習者が日常生活で遭遇する可能性の高い表現として、日本語教育に盛り込まれるべきであり、筆者は用法別にその取り上げる範囲を以下のように考える。

始めに、基本用法は「～（さ）せていただく」の最も重要な用法として、その学習の必要性については論を俟たないであろう。そこで、ここでは主に拡大用法の取り上げ方を検討する。

まず、拡大用法Ⅲについて考える。本稿第4章及び第5章の調査結果では拡大用法Ⅲが「容認範囲内」にある用法であるという結果が得られており、筆者は、拡大用法Ⅲも取り上げるべきであるものとする²⁹。

拡大用法Ⅱは現時点において、「許容範囲境界線上の用法」であり、日本語教育で取り上げるのは尚早であろう。今後は、拡大用法Ⅱの容認度の動向に注目しながら、その変化に合わせて教授内容の調整をするとよいものと思われる。

拡大用法ⅣとⅤは、いずれも現時点では母語話者の容認度が低く、本稿では「許容範囲外の用法」とした。そのため筆者は、日本語教育に学習項目として取り上げる必要性は低

²⁹ なお、本稿第8章の調査によれば、拡大用法Ⅲは「ビジネス敬語」として位置づけられているが、実際にはスピーチなどの改まった場面などで広く使用されている。総合教科書で一般的な用法として取り上げることも可能である。

いものとする。なお、宇都宮（2005）がこれらの用法について、「実際の生活上、中級後期および上級において、知識としては必要がある」と指摘している点には留意しておきたい。

以上、拡大用法Ⅱ、Ⅳ、Ⅴの教授について、筆者は、日本語教育での取り扱いには否定的な立場を取るが、宇都宮（同上）が述べているように、それらの用法を知識として学習者に伝えることの意義までを否定するものではない。あえて取り上げる場合は、拡大用法Ⅲと同時に提示すること、使用場面の違いや容認度の低さにも触れることが望まれる。

9.2.2 各用法の学習のタイミング

第8章で触れたように、旧日本語能力試験出題基準（以下「旧基準」とする）では、「～（さ）せていただく」は中級修了レベルに相当する旧「2級」に分類されている。しかし、教科書調査では、初級用教科書10冊のうち、基本用法を取り上げているものが4冊あり、初級でも「～（さ）せていただく」表現が取り上げられていることが分かった。

「～（さ）せていただく」は敬語表現に属し、また統語論の観点からすると「使役授受表現」である。そのため、この表現を学習する前に、学習者が既に以下の項目を学習している必要がある。

- 1) 敬語表現における話し手と聞き手の上下関係
- 2) 授受動詞、及び授受動詞の補助動詞用法
- 3) 使役文

旧基準によると、初級修了レベルに相当する旧「3級」では修了時に全種類の敬語表現（尊敬語・謙譲語A・謙譲語B・丁寧語）が学習されている³⁰。また、授受動詞の補助動詞用法や使役文は、いずれも旧3級で習得する内容である。そのため、初級の内容をほぼ習得している学習者には、「～（さ）せていただく」表現を理解するための要件がすべて

³⁰ 具体的には以下の8つの敬語表現が3級で取り上げられている。

①オVになる ②V（ラ）レル ③オVクダサイ ④オN ⑤オVスル ⑥オVイタス ⑦（オ）Aゴザイマス ⑧AN・Nデゴザイマス

また、謙譲語Bの用例として、「電車が参ります」なども挙げられている。

整っていると見做せる。そこで、この段階で、まず基本用法を取り上げるのが適当ではないだろうか。そうすることによって、初級文法までを正規のルートで習得し、それ以後は自己学習となった学習者でも、「～（さ）せていただく」を学習する機会が持てることになる。

基本用法の使用場面が「相手に許可を求める」という比較的狭い範囲内に限られているのに対して、拡大用法Ⅲは、「自らの行動を相手側に伝える³¹」用法へと広がっている。また、実際の運用上も、学習者には、その使用効果や、他の謙譲表現との違いへの理解、さらに場面の改まり度を考慮し使用を判断する能力が求められる。こうしたことから、拡大用法Ⅲの学習は、「より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解できることを目指す³²」中級以降で行うほうが適当であろう。

最後に、拡大用法Ⅱ、Ⅳ、Ⅴの学習については、前項で述べたように、理解知識の範囲内に止め、取り上げる場合は、拡大用法Ⅲと同時に提示したうえで、使用場面の違いや現時点では容認度が低いことを学習者に伝え、誤用の歯止めとすべきであろう。

9.3 使用効果の学習について

「～（さ）せていただく」は、類似する意味を有するほかの謙譲表現と比べると、その使用には様々な効果が伴うという特徴があり、またその効果にはプラス面とマイナス面の双方が見られる。現時点で判明している「～（さ）せていただく」の使用効果を以下にまとめる。

プラス面

- 1) 敬度が高い印象を与える（菊地 1997a）
- 2) 聞き手への配慮が示されている（米澤 2001）
- 3) どうしてもという積極性が感じられる（『新日本語の中級：教師用指導書』）

マイナス面

- 4) 押しつけがましい（「朝日新聞」 2010 年 9 月 4 日）
- 5) 特に続けて使用する場合は、うるさく聞こえてしまう（本稿 pp. 81－82）

³¹ 前述の通り、相手がその行動に関与している必要がある。

³² 同上

6) 過剰使用が時間的ロスを引き起こし、会話が長引いてしまう (同上)

「～(さ)せていただく」は運用上、上記の効果を考慮しながら使用することが求められる。そうしない場合は、不自然な使用につながる恐れがある。例えば、ある行為を遂行する意欲が高い場合に「ぜひ、そうさせていただきます」と言うことは、上記の使用効果 3) を活用したものであると思われるが、会議で一度の発言中に「～(さ)せていただく」を複数回使用することは、上記の 5)、6) というマイナス面を考慮しなかったものであり、参会者の反感を招きかねない。

このことから、「～(さ)せていただく」表現を取り上げる際は、そのプラス効果のみならず、マイナス面も学習することが重要である。しかし、第 8 章で行った聞き取り調査では、使用効果に関する説明を受けた学習者は 8 名の内の 3 名のみであり、さらにその説明内容は断片的なものにとどまっていた。その結果、プラス効果についての説明しか受けていない学習者は過剰に使用し、マイナス効果の説明しか受けていない学習者は「～(さ)せていただく」の使用に抵抗してしまうという学習者の偏った認識が生じやすいことは想像に難くない。そのため、「～(さ)せていただく」を使用するメリットとともに、その使用に伴うリスクも提示することによって、学習者に使用するかどうかを判断する能力を身に付けさせることは、自然な「～(さ)せていただく」表現を産出するうえで重要な課題となってくるものと思われる。

第10章 結論と今後の課題

本章では、1～9章の議論を振り返り、本研究の結論をまとめる。最後に、「～（さ）せていただく」に対して、将来の展望と課題について述べて、本稿での議論を締め括りたい。

10.1 各章のまとめと結論

第1章では、本研究の背景、目的、研究対象、研究方法といった基本事項について述べた。その後、本論文の構成及び各章の概要について記した。

第2章では、「～（さ）せていただく」に関連する先行研究を「用法に関する研究」、「使用動機及び使用効果に関する研究」、「外国人日本語学習者の使用に関する研究」に分類し、類別に考察を行った。その結果、先行研究には「拡大用法をもれなく包含した分類法が確立されていない」、「各用法の容認度が明らかにされていない」、「日本語母語

話者による拡大用法の使用動機が十分に究明されていない」、「日本語学習者の使用上の特徴が明らかにされていない」という4つの問題点が存在することが分かり、これらの問題点を本研究の課題とした。

第3章～第6章では母語話者の「～（さ）せていただく」使用について論じた。第3章では、「拡大用法をもれなく包含した分類法が確立されていない」という問題を解決すべく、「～（さ）せていただく」の用法の新たな分類法を検討した。まず、「～（さ）せていただく」の基本的な用法に対する先行研究の定義を分析し、その中から「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の4つの要素を抽出した。これにより、基本用法を「「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の4つの要素をすべて有するもの」と規定した。次に、「～（さ）せていただく」の拡大用法に対する先行研究の分類法を考察し、拡大用法の実質が「「許可」及び「恩恵」の2要素の希薄化または欠落に起因する使用範囲の拡大により生じた用法」であることを指摘した。これに基づき、「恩恵」・「許可」の有無及び「許可」の性質（実在か、形式上か）により、拡大用法をⅠ～Ⅴの5タイプに分類した。最後に、「恩恵」の有無を判断する基準についても論じた。

第4章では、『青空文庫』を用いて、1870年～1960年の90年間における「～（さ）せていただく」の各用法の使用状況を実例を挙げながら考察した。その結果、拡大用法Ⅲの用例が1890年代に初めて現れ、その後の使用の歴史も長いことと、使用回数が常に基本用法を上回っていることが分かった。また、基本用法と拡大用法Ⅲの用例数が全用例の8割以上を占めることも分かった。これらのことから、「「～（さ）せていただく」の基本用法が縮小し、それに対して拡大用法、特に自己宣言する用法が主流になりつつある」という先行研究の議論に対して、本稿では、拡大用法Ⅲが現れた時期から、基本用法と拡大用法Ⅲが「～（さ）せていただく」の用法の2本柱になっていると捉えた方が妥当であることを論じた。

第5章では、「各用法の容認度が明らかにされていない」という問題を解決すべく、2020年時点の「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度をアンケート調査を基に考察した。その結果、社会的容認度が、拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴの順であることが分かった。これにより、本稿では、基本用法と拡大用法Ⅲを「容認範囲内の用法」、拡大用法Ⅱを「許容範囲の境界線上にある用法」、拡大用法ⅣとⅤを「許容範囲外の用法」として捉えることにした。また、拡大用法Ⅴに対する容認度における世代間の差異が認められ、比較的新しい用法への中高年齢層の抵抗感の存在が

示唆された。さらに、基本用法に対する容認度の男女差については、男女の敬語意識の相違などの理由が考えられるが、明確な説明項を立てるためには、更なる調査が必要であることから、今後の検討課題とした。

本章ではまた、「～（さ）せていただく」の社会的容認度に影響する要素についても検討した。その結果、許可の有無、及び使用回数と容認度の間において相関関係が認められたことから、使用回数が容認度に影響するプロセスについても検討した。

本章の最後では、クラスター分析を通して、日本語母語話者の容認の類型を明らかにした。その結果、「用法区分型」、「容認傾向型」、「非容認型」の3クラスターが存在することと、「用法区分型」が多数派であることが分かった。

第6章では、言語景観及び国会委員会における「～（さ）せていただく」の使用例を観察し、使用動機を検討した。その結果、言語景観における「～（さ）せていただく」の使用には、「好ましい状況」、「好ましくない状況」、「どちらでもない状況」の三種類の場面があり、いずれも予想を超える事態が起きた場面にのみ使用されることが分かった。また、「好ましくない状況」での使用例が全用例の7割と最も多く、その理由について本稿では、好ましくない状況における話し手の心理的負担が最も大きく、「～（さ）せていただく」には話し手の心理的負担を軽減する効果があるため多用されることを論じた。

「好ましい状況」および「どちらでもない状況」における使用動機は、それぞれ「恩着せがましさの回避」と「強い立場のアピール」であった。また、国会委員会での使用動機について本稿では、①「～（さ）せていただく」の使用により場面の改まり度が上がり、前の発言者によって基準化されたその場の改まり度を承認し維持するための使用と、②前の発言者が「～（さ）せていただく」を使うのに伴い、後に発言する者も「当該表現を元より知悉している」ことを宣明するための使用、の2点にまとめた。

また、使用動機と使用効果の間に存在する「ずれ」については、本章ではその原因を「許可者の明示性」、「聞き手における選択する権利の消滅」、「表現自体の音韻的長さ」の3方面から論じた。

第7章～第9章では、日本語学習者の使用に関わる諸問題を検討した。第7章では、「日本語学習者の使用実態が明らかにされていない」という問題を解決すべく、「日本語学習者会話データベース」及び「KY コーパス」を用いて、「～（さ）せていただく」についての学習者の使用状況を考察した。その結果、先行研究で指摘されている語用論的な誤りによる誤用は見られなかった一方、「～ていただく」との混同が多発していることが

分かった。また、本章ではアンケート調査を通して、学習者の使用意識には母語話者の容認度と同様のクラスターが存在することや、用法別の使用意識と容認度には同様の傾向（拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴ）が存在することを示し、学習者の使用意識と母語話者の容認度には類似性があることを確認した。しかしその一方で、学習者の使用状況には、基本用法に対して使用意識が低下することや、全用法に非容認的態度を示す回答者が比較的多いことなど、母語話者の容認度との相違も確認された。

第8章では、日本語教科書での「～（さ）せていただく」表現の取り扱い状況を考察した。その結果、総合教科書では、20冊のうち、「～（さ）せていただく」表現を取り上げているのは約3割の7冊にとどまり、その内容も基本用法に関するもののみであり、拡大用法Ⅲの使用回数が最も多いという現状が総合教科書にほとんど反映されていないことが分かった。その一方で、ビジネス用教科書の約7割では拡大用法に関する説明が確認でき、本章ではその理由について「拡大用法が「ビジネス敬語」としてのイメージが強いため」であることを論じた。

本章ではまた、学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査を行った。その結果、説明内容に4つのパターンが存在することが分かり、また、拡大用法に対する説明では拡大用法の類型、機能や使用効果、過剰使用の危険性などにほとんど触れられておらず、不十分な点が多く残されていることも分かった。

第9章では、日本語教育における「～（さ）せていただく」のあるべき姿を検討した。この章ではまず、「日本語教育文法は日本語記述文法とは独立に設計しなければならない」という庵（2010b）の提起した「無標・有標」の対立概念を取り入れ、「～（さ）せていただく」の「使用場面」と「人間関係」に着目して、3種類の用法に分類した。

本章ではまた、「～（さ）せていただく」の各用法の学習の必要性及び学習のタイミングについて検討した。その結果、現段階では学習が必要なのは基本用法と拡大用法Ⅲであり、学習のタイミングについては、それぞれ初級後期と中級以降で学習するのが適切であることをと論じた。それ以外の用法（拡大用法Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ）については、現状では容認度が低いため、学習項目として取り上げる必要性に乏しく、教授する場合は理解知識の範囲内に止め、拡大用法Ⅲと同時に提示したうえで、使用場面の違いや現時点では容認度が低いことを学習者に伝えることが重要であることを述べた。

本章の最後では、「～（さ）せていただく」の使用効果をプラスとマイナスの両面から教授することの重要性を論じた。

10.2 今後の課題

10.2.1 学習者の使用意識と母語話者の容認度の関連性について

本研究では、「～（さ）せていただく」の各用法に対する外国人日本語学習者の使用意識を調査した。その結果、学習者の使用意識には母語話者の容認度と同様のクラスターが存在することや、用法別の使用意識と容認度には同様な傾向（拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴ）が存在することが分かり、学習者の使用意識と母語話者の容認度には類似性があることを確認した。しかし、両者に何らかの関係が存在することを証明するのには、個々の学習者の習得ルートや人間関係、加えて母国語からの影響など様々な要素を考慮した大規模な調査が必要である。本研究ではこの点については議論を深めることができず、可能性の指摘にとどまった。学習者の使用意識と母語話者の関連性は、今後引き続き考察していきたい問題である。

10.2.2 「～（さ）せていただく」の社会的容認度について

本研究では、「～（さ）せていただく」の各用法に対する母語話者の容認度を性別、年齢などの面から考察した。しかし、容認度に影響する要素がこれ以外にも存在する可能性は十分にあり得る。その一つとして考えられるのが「地域差」である。井上（1999）、松本（2008）が指摘しているように、「～（さ）せていただく」は本来関西の言葉であり、それが東京で広まったのは戦後のことである。このように、地域によって「～（さ）せていただく」の使用歴が異なるため、容認度も違うことは十分に考えられるが、容認度の地域差を調査するのには、調査範囲や対象者が膨大になり、本研究ではその調査を行うことは断念せざるを得なかった。これを将来の課題にしたい。

また、「～（さ）せていただく」の社会的容認度は常に変化していると思われる。母語話者の容認度は、日本語教育における「～（さ）せていただく」の取り扱いにも影響するため、今後も引き続き、その動向に注目していきたい。

参考文献・資料一覧

- 茜八重子 (2002) 「「～(さ)せていただく」について」『講座日本語教育』38:28 - 52
- 庵功雄 (2010a) 「産出のための日本語教育文法：「は」と「が」の使い分けを例として」
『台湾日本語文学報』50:40 - 55
- 庵功雄 (2010b) 「日本語教育文法から見た「は」と「が」－産出に結びつく規則化を目指して－」対話創生プロジェクト（第8回日本語教育研究集会）招待講演会
- 庵功雄 (2011) 「日本語記述文法と日本語教育文法」『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 李韻珍 (2015) 「衆議院の予算委員会における「させていただく」の使用実態とその用法の変化について：『国会会議録検索システム』を利用して」『言語の研究』3:45－60
- 井口裕子 (1995) 「謙讓表現「～(さ)せていただく」について」－結婚披露宴における

- 使用例を中心にー」『特集 言語と教育』11:54-66
- 池上彰 (2012) 『伝える力 2』PHPビジネス新書
- 伊藤博美 (2011) 「「(さ) せていただく」表現における自然度と判断要因」『日本語学論集』7:139 - 152
- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない 最新用例と基礎知識』講談社
- 井上史雄・金順任・松田謙次郎 (2012) 「岡崎 100 年の「ていただく」増加傾向ー授恵表現にみる敬語の民主化」『国立国語研究所論集』4:1-25
- 井上史雄 (2017) 『新・敬語論 なぜ「乱れる」のか』NHK 出版新書
- 李炳萬 (1998) 「現代日本語の敬語「～(さ) せていただく」考」『野州国文学』61:25-52
- 今泉忠義 (1943) 「現代の敬語ーその教養と教育とー」『現代語法の諸相』岩波書店
- 宇都宮陽子 (2004) 「「～(さ) せていただく」の「定型表現」に関する考察ー「待遇表現」の観点からー」『待遇コミュニケーション研究』2:1 - 16
- 宇都宮陽子 (2005) 「「待遇表現」としての「～(さ) せていただく」に関する一考察」『早稲田大学日本語教育研究』6:29-44
- 宇都宮陽子 (2006) 「「～(さ) せていただく」の「行動の許可者」に関する考察ー「行動展開表現」と「理解要請表現」の観点から」『早稲田日本語研究』15:35-46
- 浦谷宏・坂本恵 (1991) 「待遇表現教育の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』3:107-116
- 浦谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 王慧雋 (2018) 「依頼場面における使役授受表現の使用に関する日本語学習者の捉え方ー中国大学日本語専攻生に対する調査に基づいてー」『早稲田日本語教育実践研究』6:11-30
- 岡垣亮我 (2015) 「「～(さ) せていただく」表現についてー話し手と聞き手の意識に着目してー」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』11:93-100
- 金沢裕之 (2007) 「「～てくださる」と「～ていただく」について」『日本語の研究』3:47-53
- 川口義一 (1987) 「日本語初級教科書における敬語の扱われ方」『日本語教育』61:126-139
- 菊地康人 (1997a) 『敬語』講談社学術文庫
- 菊地康人 (1997b) 「変わりゆく「させていただく」」『言語』26(6):40 - 47

- 菊地康人（2010）『敬語再入門』講談社学術文庫
- 北直美（1995）「日本語教育における待遇表現の研究」『北陸大学紀要』19:311-320
- 斎藤幹樹（2015）「言語表現の容認度に対する下位構文スキーマ頻度及び単語頻度の影響の統計的考察」『言語科学論集』21:37-57
- 坂本恵（2002）「日本語教育の中での敬語表現の扱い方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28:61-67
- 椎名美智（2017）「「させていただく」という問題系—「文法化」と「新丁寧語」の誕生—」『語用論フォーラム 2』:75-105
- 椎名美智（2018）「ベネファクティブ「させていただく」の形式と機能：2つのコーパス調査より」『東アジア日本語教育・日本文化研究』21(修正版):47-72
- 椎名美智（2021）『「させていただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか』ひつじ書房
- 塩田雄大（2016）「“させていただきます”について書かせていただきます～2015 年「日本語のゆれに関する調査」から②～」『放送研究と調査』66:26-41
- 孫向宇（2020a）「「～（さ）せていただく」の社会的容認度についての考察—アンケート調査結果の分析から—」『東アジア日本学研究』4:21 - 35
- 孫向宇（2021）「「～（さ）せていただく」の使用動機に関する研究 —言語景観及び国会委員会における使用例を中心に—」『拓殖大学大学院言語教育研究科研究年報』21:49 - 62
- 高橋圭子（2016）『自然な敬語が基本から身につく本』研究社
- 高橋圭子・東泉裕子（2017）「近現代語コーパスにみる『（さ）せていただく』の用法」NINJAL 国際シンポジウム「第 10 回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」2017 年 7 月 8 日 国立国語研究所
- 高橋圭子・東泉裕子（2018）「「（さ）せていただく」の許容度と依頼表現の変化 —アンケート調査による年齢層の比較から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10:45-53
- 滝浦真人（2008）「＜距離＞と＜領域＞の語用論—日韓対照ポライトネスのために—」森雄一、西村義樹、山田進、米山三明編『ことばのダイナミズム』くろしお出版
- 滝浦真人（2016）「社会語用論」『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房
- 滝島雅子・山下洋子（2017）「報告させていただいてもよろしいですか？～2016 年「日本

- 語の揺れに関する調査」から①～」『放送研究と調査』July2017:86-105
- ダニエル・ロング (2010) 「奄美ことばの言語景観」『東アジア内海の環境と文化』:174-200
- 原田登美 (2007) 「『日本語会話データベース (上村コーパス) 』にみる日本語会話における<授受表現>の使用実態とポライトネス・ストラテジー」『言語と文化』:117-138
- 東泉裕子 (2010) 「『(さ) せていただく』と『いたす』の競合」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ サテライトセッション予稿集』:27-32
- 馮富栄 (1994) 「日本語使役文の学習過程における母語 (中国語) の影響について」『教育心理学研究』42:324-333
- 前田直子 (2011) 「現代日本語の使役表現:「拡大文型」の試み」『東洋文化研究』13:593-614
- 前田均 (2017) 「自己の言語を絶対化する人たち—『させていただく』の検討から始める—」『ことばと文字』7:148 - 154
- 正井泰夫 (1972) 『東京の生活地図』時事通信社
- 益岡隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30:26-32
- 松方三郎 (1954) 「私ならこうする 文部大臣だったら」『言語生活』34
- 松本修 (2008) 「東京における「させていただく」」『國文學』92:355 - 367
- 嶺田明美 (1997) 「謙讓表現の一形式「(サ) セテイタダク」の使用の実態について」『学苑』685:33-40
- 森篤嗣 (2012) 「使役における体系と現実の言語使用—日本語教育文法の視点から—」『日本語文法』12:3-19
- 森勇太 (2016) 『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院
- 米澤昌子 (1996) 「受給動詞の史的変遷」『同志社国文学』45:73-87
- 米澤昌子 (2001) 「待遇表現としての使役形を伴う受給補助詞 —「～(さ) せていただく」の用法の考察を中心に—」『同志社大学留学生別科紀要』創刊号:105-117
- 米澤昌子 (2013) 「聞き手を意識した「ていただく」の使用—TV のトーク番組における用例の分析—」『同志社大学日本語・日本文化研究』:23-37

梁婧（2018）日本語母語話者と外国人日本語学習者の「サセテイタダク」に関する研究『方言・音声研究』 10:1-13

渡辺友左（1998）「『現代社会と敬語』の言語社会的な一考察（1）－〈させていただく〉の新しい用法考－」『中京大学社会学部紀要』 13

朝日新聞社（2010）「be」（2010年9月4日）

海外技術者研修協会（2002）『新日本語の中級：教師用指導書』スリーエーネットワーク

国際交流基金・日本国際教育協会（2004）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社

スリーエーネットワーク（2001）『みんなの日本語初級 2 教え方の手引き』スリーエーネットワーク

日本国家公務員労働組合共闘会議（2010）「国公労調査時報」 572

文化庁（2007）「敬語の指針」

読売新聞社会部（1988）『東京ことば』読売新聞社

付録

1. 王（2018）の自由産出課題用紙（p. 16 より）

すべてお書きください。

【問題】 假设你是 W。你希望 B 把干事的工作交给你做，你会如何表达？请将所有你认为恰当的日语表达都写在下面的虚线上。

りたいと言いましたが、BさんはWさんが入社1年目で経験がないのでできないのではないかと心配している様子です。Wさんはどうしても幹事をやりたいと思っているので、先輩たちにアドバイスをもらったうえでやると安心させ、Bさんをお願いしました。

【人物关系】 W 是刚进公司第 1 年的职员，B 是 W 的上司。

【情景状况】 W 所在的部门决定下下周开年终联欢会。上司 B 在找人负责联欢会事宜。W 表示想做负责联欢会的干事，但 B 担心 W 刚进公司 1 年缺乏经验会做不好。W 为了使 B 打消顾虑表示会向前辈们讨教，请求 B 把干事的工作交给自己做。

【上記の状況におけるWさんとBさんの会話】

【W和B的对话】

B 「再来週の忘年会の幹事はだれがやってくれるのかな。」

有谁愿意负责下下周年终联欢会的干事工作吗？

W 「あのう、よろしければ、私が…」

那个，如果可以的话，我来……

B 「あ、君、入社 1 年目じゃないのか？できるのか？」

啊，你不是进公司才第 1 年么？会做吗？

W 「はい、先輩方のアドバイスを伺ってやりますので、ぜひ_____。」

我会跟前辈们讨教经验的， 无论如何

【質問】 あなたがWさんだとします。あなたは、どうしても幹事をやりたいと思っています。そこで、Bさんをお願いしようとしています。下線のところで、どんな日本語を使いますか？いくつでも構いませんので、あなたが適切だと思う言い方を

2. 学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査への回答

学習者 A (N3) : 老师教我们说最好不要用这个。

学習者 B (N4) : 老师好像有讲过, 请假的时候用「休ませていただけないでしょうか」会比「休みたいです」听起来更有礼貌。

学習者 C (N1) : 这个就是敬语嘛。向地位比你高的人, 请求他同意你做什么事的时候用的, 像「その本を拝借させていただきたいんですが」这种。

学習者 D (N1) : 我们在请求表现这一课学过「～(さ)せていただけませんか」这个句子, 不过「～(さ)せていただきます」这个我们没讲过。

学習者 E (N3) : 像「明日休ませていただけませんか」这样的可以用, 但是像有些店他会写「休ませていただきます」, 这种好像就不对。

学習者 F (N1) : 「～(さ)せていただく」这个表现主要就是请求别人允许的一个表现。然后我记得教授说现在有人也会用来传达, 嗯, 好像就是说自己做的事? 不过我们教授好像不太喜欢别人这样用, 他说明明不是在请求别人的允许, 还专门用这个, 听起来就有点“うるさい”。我有一次在ゼミ发表时候说了「説明させていただきます」, 结果被我们教授批了, 他说「説明いたします」就行了。

学習者 G (N1) : 上课讲了两种用法, 一种是「丁寧に許可を求める」, 还有一种是「自分の行動を丁寧に伝える」。但是我这里记得是第二种尽量少用, 一般用「いたします」或者「します」。

学習者 H (N2) : 老师说的是, 「～(さ)せていただく」主要是用于请求别人同意, 但是现在好像单纯的说自己的行为比较多一点。